CPP17Book

## はじめに

本書は 2017 年に規格制定されたプログラミング言語 C++ の国際規格、IS 14882:2017 の新機能をほぼすべて解説している。

新しい C++17 は不具合を修正し、プログラマーの日々のコーディングを装 新機能がいくつも追加された。その結果、C++ の特徴であるパフォーマンス 型付けは損なうことなく、近年の動的な型の弱い言語に匹敵するほどの柔軟な 可能にしている。

人によっては、新機能を学ぶのは労多くして益少なしと考えるかもしれぬか

の新機能は現実の問題を解決するための便利な道具として追加されるもので機能を使わないとしても問題はなくならないため、便利な道具なく問題に対ければならぬ。また、C++の機能は一般的なプログラマーにとって自然だるように設計されているため、利用は難しくない。もし C++ が難しいと感じるれば、それは C++ が解決すべき現実の問題が難しいのだ。なんとなれば、利思とは程遠い歪なアーキテクチャのコンピューターを扱う時代に生きているの性能上昇は停滞し、メモリは CPU に比べて遥かに遅く、しかもそのアク定数時間ではない。キャッシュに収まる局所性を持つデータへの操作は無料キャッシュサイズの単位はすでに MB で数えられている。手のひらに乗るまてPU でさえマルチコアが一般的になり、並列処理、非同期処理は全プログラ考慮せねばならぬ問題になった。

そのような時代にあたっては、かつては最良であった手法はその価値を失いは逆に悪い手法と成り下がる。同時に昔は現実的ではなかった手法が今ではてまともな方法になることさえある。このため、現在活発に使われている生き言語は、常に時代に合わない機能を廃止し、必要な機能を追加する必要があるの発展はここで留まることなく、今後も C++ が使われ続ける限り、修正と材が行われていくだろう。

本書の執筆は Github 上で公開して行われた。

https://github.com/EzoeRvou/cpp17book

本書のライセンスは GPLv3 だ。

本書の執筆では株式会社ドワンゴと GitHub 上で Pull Request を送ってくれるくの貢献者の協力によって、誤りを正し、より良い記述を実現できた。この場を付て謝意を表したい。

本書に誤りを見つけたならば、Pull Request を送る先は

https://github.com/EzoeRyou/cpp17book

だ。

江泊

## 序

### 0.1 C++ の規格

プログラミング言語 C++ は ISO の傘下で国際規格 ISO/IEC 14882 としされている。この規格は数年おきに改定されている。一般に C++ の規格を参ときは、規格が制定した西暦の下二桁を取って、C++98 (1998 年発行) とか (2011 年発行) と呼ばれている。現在発行されている C++ の規格は以下のと

#### 0.1.1 C++98

C++98 は 1998 年に制定された最初の C++ の規格である。本来ならばか 1995 年には制定させる予定が大幅にずれて、1998 年となった。

#### $0.1.2 \quad C++03$

C++03 は C++98 の文面の曖昧な点を修正したマイナーアップデートとし 年に制定された。新機能の追加はほとんどない。

#### 0.1.3 C++11

C++11 は制定途中のドラフト段階では元 C++0x と呼ばれていた。これに年までに規格が制定される予定だったからだ。予定は大幅に遅れ、ようやく規定されたときにはすでに 2011 年の年末になっていた。C++11 ではとても多機能が追加された。

### 0.1.4 C++14

C++14 は 2014 年に制定された。C++11 の文面の誤りを修正した他、9 能が追加された。本書で解説する。

#### 0.1.5 C++17

C++17 は 2017 年に制定されることが予定されている最新の C++ 規格で、 で解説する。

## 0.2 C++ の将来の規格

#### 0.2.1 C++20

C++20 は 2020 年に制定されることが予定されている次の C++ 規格だ。この格では、モジュール、コンセプト、レンジ、ネットワークに注力することが予定される。

## 0.3 コア言語とライブラリ

C++ の標準規格は、大きく分けて、C プリプロセッサーとコア言語とライブからなる。

C プリプロセッサーとは、C++ が C 言語から受け継いだ機能だ。ソースファクをトークン列単位で分割して、トークン列の置換ができる。

コア言語とは、ソースファイルに書かれたトークン列の文法とその意味のことだってブラリとは、コア言語機能を使って実装されたもので、標準に提供されていまのだ。標準ライブラリには、純粋にコア言語の機能のみで実装できるものと、・以外の実装依存の方法やコンパイラーマジックが必要なものとがある。

# 目次

# はじめに

2.8

序	
0.1	C++ の規格
	0.1.1 C++98
	0.1.2 C++03
	0.1.3 C++11
	0.1.4 C++14
	0.1.5 C++17
0.2	C++ の将来の規格
	0.2.1 C++20
0.3	コア言語とライブラリ
第1章	<b>SD-6 C++</b> のための機能テスト推奨
1.1	機能テストマクロ
1.2	has_include 式:ヘッダーファイルの存在を判定する
1.3	has_cpp_attribute 式
第 2 章	C++14 のコア言語の新機能
2.1	二進数リテラル
2.2	数値区切り文字・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
2.3	[[deprecated]] 属性
2.4	通常の関数の戻り値の型推定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
2.5	decltype(auto): 厳格な auto
2.6	ジェネリックラムダ
2.7	初期化ラムダキャプチャー

	2.8.2 traits のラッパー
2.9	constexpr 関数の制限緩和
2.10	メンバー初期化子とアグリゲート初期化の組み合わせ
2.11	サイズ付き解放関数
第3章	C++17 のコア言語の新機能
3.1	トライグラフの廃止
3.2	16 進数浮動小数点数リテラル
3.3	UTF-8 文字リテラル
3.4	関数型としての例外指定
3.5	fold 式
3.6	ラムダ式で *this のコピーキャプチャー
3.7	constexpr ラムダ式
3.8	文字列なし static_assert
3.9	ネストされた名前空間定義
3.10	[[fallthrough]] 属性
3.11	[[nodiscard]] 属性
3.12	[[maybe_unused]] 属性
3.13	演算子のオペランドの評価順序の固定
3.14	constexpr if 文:コンパイル時条件分岐
	3.14.1 実行時の条件分岐
	3.14.2 プリプロセス時の条件分岐
	3.14.3 コンパイル時の条件分岐
	3.14.4 超上級者向け解説
	3.14.5 constexpr if では解決できない問題
	3.14.6 constexpr if で解決できる問題
3.15	初期化文付き条件文
3.16	クラステンプレートのコンストラクターからの実引数推定
	3.16.1 推定ガイド
3.17	auto による非型テンプレートパラメーターの宣言
3.18	using 属性名前空間
3.19	非標準属性の無視
3.20	構造化束縛
3.23	3 20 1 超上級者向け解説

3.20.2 構造化束縛宣言の仕様

		の名前である場合
	3.20.5	上記以外の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
3.21	inline	変数
	3.21.1	inline の歴史的な意味
	3.21.2	現代の inline の意味
	3.21.3	inline 変数の意味
3.22	可変長	using 宣言
3.23	std::by	rte: バイトを表現する型
第4章	C++1	l <b>7</b> の型安全な値を格納するライブラリ
4.1	varian	t:型安全な union
	4.1.1	使い方
	4.1.2	型非安全な古典的 union
	4.1.3	variant の宣言
	4.1.4	variant の初期化
		デフォルト初期化
		コピー初期化
		variant のコンストラクターに値を渡した場合
		in_place_type による emplace 構築
	4.1.5	variant の破棄
	4.1.6	variant の代入
	4.1.7	variant $\mathcal{O}$ emplace
	4.1.8	variant に値が入っているかどうかの確認
		valueless_by_exception メンバー関数
		index メンバー関数
	4.1.9	swap
		variant_size <t>: variant が保持できる型の数を取得</t>
	4.1.11	$variant_alternative < I, T>: インデックスから型を返す$ .
	4.1.12	
		るかどうかの確認
		get< <b>I&gt;</b> (v): インデックスから値の取得
		get <t>(v): 型から値の取得</t>
	4 1 15	get if・値を保持している場合に取得

4.1.16 variant の比較 . . . . . . . . . . . . . . . .

3.20.4 初期化子の型が配列ではなく、std::tuple\_size<E>が完全

		大小比較
	4.1.17	visit: variant が保持している値を受け取る
4.2	any:	どんな型の値でも保持できるクラス
	4.2.1	使い方
	4.2.2	any の構築と破棄
	4.2.3	in_place_type コンストラクター
	4.2.4	any への代入
	4.2.5	any のメンバー関数
		emplace
		reset: 値の破棄
		swap: スワップ
		has_value: 値を保持しているかどうか調べる
		type:保持している型の type_info を得る
	4.2.6	any のフリー関数
		make_any <t>:T 型の any を作る</t>
		any_cast: 保持している値の取り出し
4.3	option	al:値を保有しているか、していないクラス
	4.3.1	使い方
	4.3.2	optional のテンプレート実引数
	4.3.3	optional の構築
	4.3.4	optional の代入
	4.3.5	optional の破棄
	4.3.6	swap
	4.3.7	has_value:値を保持しているかどうか確認する
	4.3.8	operator bool:値を保持しているかどうか確認する
	4.3.9	value:保持している値を取得
	4.3.10	value_or: 値もしくはデフォルト値を返す
	4.3.11	reset: 保持している値を破棄する
	4.3.12	optional 同士の比較
		同一性の比較
		大小比較
	4.3.13	optional と std::nullopt との比較
		optional <t>と T の比較</t>
	4.3.15	make_optional <t>: optional<t>を返す</t></t>

4.3.16 make\_optional<T, Args ...

第5章	string_view: 文字列ラッパー
5.1	使い方
5.2	basic_string_view
5.3	文字列の所有、非所有
5.4	string_view の構築
	5.4.1 デフォルト構築
	5.4.2 null 終端された文字型の配列へのポインター
	5.4.3 文字型へのポインターと文字数
5.5	文字列クラスからの変換関数
5.6	string_view の操作
	5.6.1 remove_prefix/remove_suffix: 先頭、末尾の要素の削除
5.7	ユーザー定義リテラル
第6章	メモリーリソース: 動的ストレージ確保ライブラリ
6.1	メモリーリソース
	6.1.1 メモリーリソースの使い方
	6.1.2 メモリーリソースの作り方
6.2	polymorphic_allocator:動的ポリモーフィズムを実現するアロケ
	<b>ター</b>
	6.2.1 コンストラクター
6.3	プログラム全体で使われるメモリーリソースの取得
	6.3.1 new_delete_resource()
	6.3.2 null_memory_resource()
	6.3.3 デフォルトリソース
6.4	標準ライブラリのメモリーリソース
6.5	プールリソース
	6.5.1 アルゴリズム
	6.5.2 synchronized/unsynchronized_pool_resource
	6.5.3 pool_options
	6.5.4 プールリソースのコンストラクター
	6.5.5 プールリソースのメンバー関数
	release()
	$upstream\_resource() \dots \dots \dots \dots \dots$
	$\operatorname{options}()$
6.6	モノトニックバッファーリソース

8.88.9

	6.6.2 コンストラクター	
	6.6.3 その他の操作	
	release()	
	upstream_resource()	
第7章	並列アルゴリズム	
7.1	並列実行について	
7.2	使い方	
7.3	並列アルゴリズム詳細	
	7.3.1 並列アルゴリズム	
	7.3.2 ユーザー提供する関数オブジェクトの制約	
	実引数で与えられたオブジェクトを直接、間接に変更しては	
	ならない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	実引数で与えられたオブジェクトの一意性に依存してはなら	
	ない	
	データ競合と同期	
	7.3.3 例外	
	7.3.4 実行ポリシー	
	is_execution_policy traits	
	シーケンス実行ポリシー	
	パラレル実行ポリシー	
	パラレル非シーケンス実行ポリシー	
	実行ポリシーオブジェクト	
第8章	数学の特殊関数群	
8.1	ラゲール多項式(Laguerre polynomials)	
8.2	ラゲール陪多項式(Associated Laguerre polynomials)	
8.3	ルジャンドル多項式(Legendre polynomials)	
8.4	ルジャンドル陪関数(Associated Legendre functions)	
8.5	球面ルジャンドル陪関数(Spherical associated Legendre functions)	ıs)
8.6	エルミート多項式(Hermite polynomials)	
8.7	ベータ関数(Beta function)	
0.0	Martin Martin (C. 1. 11. 11. 11. 11. 11. 11. 11. 11. 11	, ·

第 1 種完全楕円積分(Complete elliptic integral of the first kind)

第2種完全楕円積分 (Complete elliptic integral of the second kind) 第3種完全楕円積分 (Complete elliptic integral of the third kind) 8.12

8.13

9.9

8.14	第1種ベッセル関数 (Cylindrical Bessel functions of the first kin
8.15	ノイマン関数 (Cylindrical Neumann functions)
8.16	第1種変形ベッセル関数 (Regular modified cylindrical Bessel fun
	tions)
8.17	第 2 種変形ベッセル関数 (Irregular modified cylindrical Bess
	functions)
8.18	第1種球ベッセル関数 (Spherical Bessel functions of the first kin
8.19	球ノイマン関数(Spherical Neumann functions)
8.20	指数積分(Exponential integral)
8.21	リーマンゼータ関数(Riemann zeta function)
第9章	その他の標準ライブラリ
9.1	ハードウェア干渉サイズ(キャッシュライン)
9.2	$std::uncaught\_exceptions \qquad \dots \qquad \dots \qquad \dots$
9.3	apply: tupleの要素を実引数に関数を呼び出す
9.4	Searcher: 検索
	9.4.1 default_searcher
	9.4.2 boyer_moore_searcher
	9.4.3 boyer_moore_horspool_searcher
9.5	sample: 乱択アルゴリズム
	9.5.1 乱択アルゴリズム
	9.5.2 アルゴリズム S:選択標本、要素数がわかっている集合か
	の標本の選択
	9.5.3 アルゴリズム R:保管標本、要素数がわからない集合から
	標本の選択・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	9.5.4 C++ $\mathcal{O}$ sample
9.6	shared_ptr <t[]>:配列に対する shared_ptr</t[]>
9.7	as_const: const 性の付与
9.8	make_from_tuple: tuple の要素を実引数にコンストラクターを

invoke: 指定した関数を指定した実引数で呼び出す

第2種不完全楕円積分 (Incomplete elliptic integroal of the second

第3種不完全楕円積分 (Incomplete elliptic integral of the thin

9.11	メモリー管理アルゴリズム
	9.11.1 addressof
	9.11.2 uninitialized_default_construct
	9.11.3 uninitialized_value_construct
	9.11.4 uninitialized_copy
	9.11.5 uninitialized_move
	9.11.6 uninitialized_fill
	9.11.7 destory
9.12	shared_ptr::weak_type
9.13	void_t
9.14	bool_constant
9.15	type_traits
	9.15.1 変数テンプレート版 traits
	9.15.2 論理演算 traits
	conjunction: 論理積
	disjunction: 論理和
	negation: 否定
	9.15.3 is_invocable: 呼び出し可能か確認する traits
	9.15.4 has_unique_object_representations: 同値の内部表現が同
	ーか確認する traits
	9.15.5 is_nothrow_swappable: 無例外 swap 可能か確認する traits
9.16	コンテナーで不完全型のサポート
9.17	emplace の戻り値
9.18	map と unordered_map の変更
	9.18.1 try_emplace
	9.18.2 insert_or_assign
9.19	連想コンテナーへの splice 操作
	9.19.1 merge
	9.19.2 ノードハンドル
	9.19.3 extract : ノードハンドルの取得
	9.19.4 insert : ノードハンドルから要素の追加
	9.19.5 ノードハンドルの利用例
	ストレージの再確保なしに、コンテナーの一部の要素だけ別
	のコンテナーに移す

コンテナーの寿命を超えて要素を存続させる

9.20	コンテナーアクセス関数
9.21	clamp
9.22	3 次元 hypot
9.23	atomic <t>::is_always_lock_free</t>
9.24	scoped_lock: 可変長引数 lock_guard
9.25	std::byte
9.26	最大公約数(gcd)と最小公倍数(lcm)
	9.26.1 gcd: 最大公約数
	9.26.2 lcm: 最小公倍数
第 10 章	ファイルシステム
10.1	名前空間
10.2	POSIX 準拠
10.3	ファイルシステムの全体像
10.4	エラー処理
	10.4.1 例外
	10.4.2 非例外
10.5	path: ファイルパス文字列クラス
	10.5.1 path: ファイルパスの文字列
	10.5.2 ファイルパスの操作
10.6	file_status
10.7	directory_entry
10.8	directory_iterator
	10.8.1 エラー処理
10.9	recursive_directory_iterator
	10.9.1 オプション
	10.9.2 depth: 深さ取得
	10.9.3 pop: 現在のディレクトリーの列挙中止
	10.9.4 recursion_pending: 現在のディレクトリーの再帰をスキプ
10.10	ファイルシステム操作関数
	10.10.1 ファイルパス取得
	current_path
	temp_directory_path
	10.10.9 ファイルパス場佐

canonical

目次

Canonical
weakly_canonical
relative
proximate
10.10.3 作成
create_directory
create_directories
create_directory_symlink
create_symlink
create_hard_link
10.10.4 コピー
copy_file
copy
copy_symlink
10.10.5 削除
remove
remove_all
10.10.6 変更
permissions
rename
resize_file
10.10.7 情報取得
ファイルタイプの判定
status
status_known
symlink_status
equivalent
exists
file_size
hard_link_count
last_write_time
read_symlink
space
<del>-</del>

## 第1章

# **SD-6 C++** のための 機能テスト推奨

C++17 には機能テストのための C プリプロセッサー機能が追加された。

## 1.1 機能テストマクロ

#else

機能テストというのは、C++ の実装 (C++ コンパイラー) が特定の機能をトしているかどうかをコンパイル時に判断できる機能だ。本来、C++17 の機 拠した C++ 実装は、C++17 の機能をすべてサポートしているべきだ。した念ながら現実の C++ コンパイラーの開発はそのようには行われていない。

に対応途中の C++ コンパイラーは将来的にはすべての機能を実装することをしつつも、現時点では一部の機能しか実装していないという状態になる。

たとえば、C++11 で追加された rvalue リファレンスという機能に現実にコンパイラーが対応しているかどうかをコンパイル時に判定するコードは以てなる。

```
#ifndef __USE_RVALUE_REFERENCES
#if (__GNUC__ > 4 || __GNUC__ == 4 && __GNUC_MINOR__ >= 3) ||
    __MSC_VER >= 1600
#if __EDG_VERSION__ > 0
    #define __USE_RVALUE_REFERENCES (__EDG_VERSION__ >= 410)
#else
    #define __USE_RVALUE_REFERENCES 1
#endif
#elif __clang__
#define __USE_RVALUE_REFERENCES __has_feature(cxx_rvalue_ref
```

第1章 SD-6 C++ のための機能テスト推奨

#### #endif

#### #endif

このそびえ立つクソのようなコードは現実に書かれている。このコードは GCC MSVC と EDG と Clang という現実に使われている主要な 4 つの C++ コンクラーに対応した rvalue リファレンスが実装されているかどうかを判定する機能・トコードだ。

この複雑なプリプロセッサーを解釈した結果、\_\_USE\_RVALUE\_REFERENCES といりプロセッサーマクロの値が、もし C++ コンパイラーが rvalue リファレンスポートしているならば 1、そうでなければ 0 となる。後は、このプリプロセッサークロで #if ガードしたコードを書く。

#### // 文字列を処理する関数

void process\_string( std::string const & str ) ;

#### #if \_\_USE\_RVALUE\_REFERENCES == 1

// 文字列をムーブして処理してよい実装の関数

// C++ コンパイラーが rvalue リファレンスを実装していない場合はコンパイ.

void process\_string( std::string && str ) ;

#### #endif

C++17では、上のようなそびえ立つクソのようなコードを書かなくてもすむ。 に、標準の機能テストマクロが用意された。C++ 実装が特定の機能をサポート いる場合、対応する機能テストマクロが定義される。機能テストマクロの値は、・

機能が C++ 標準に採択された年と月を合わせた 6 桁の整数で表現される。 たとえば rvalue リファレンスの場合、機能テストマクロの名前は $\_cpp\_rval$ 

\_referencesとなっている。rvalue リファレンスは 2006 年 10 月に採択されたの機能テストマクロの値は 200610 という値になっている。将来 rvalue リファレジの機能が変更されたときは機能テストマクロの値も変更される。この値を調べるによって使っている C++ コンパイラーはいつの時代の C++ 標準の機能をサポ

この機能テストマクロを使うと、上のコードの判定は以下のように書ける。

#### // 文字列を処理する関数

しているか調べることもできる。

void process\_string( std::string const & str ) ;

#### #ifdef \_\_cpp\_rvalue\_references

// 女会列ま/ ブレイ加珊レイトい中株の開業

1.2 \_\_has\_include 式: ヘッダーファイルの存在を¥

```
れない
void process_string( std::string && str );
#endif
```

機能テストマクロの値は通常は気にする必要がない。機能テストマクロがそかどうかで機能の有無を確認できるので、通常は #ifdef を使えばよい。

## **1.2** has include 式: ヘッダーファイルの存在を判定する

\_\_has\_include 式は、ヘッダーファイルが存在するかどうかを調べるための

```
__has_include( ヘッダー名 )
```

\_\_has\_include 式はヘッダー名が存在する場合 1 に、存在しない場合 0 にれる。

たとえば、C++17の標準ライブラリにはファイルシステムが入る。そのへ名は  $\langle filesystem \rangle$  だ。C++ コンパイラーがファイルシステムライブラリをトしているかどうかを調べるには、以下のように書く。

```
#if __has_include(<filesystem>)
// ファイルシステムをサポートしている
#include <filesystem>
namespace fs = std::filesystem;
#else
// 実験的な実装を使う
#include <experimental/filesystem>
namespace fs = std::experimental::filesystem;
#endif
```

C++ 実装が\_has\_include をサポートしているかどうかは、\_has\_include 在をプリプロセッサーマクロのように #ifdef で調べることによって判定でき

```
#ifdef __has_include
// __has_include をサポートしている
#else
// __has_include をサポートしていない
#endif
__has_include 式は #if と #elif の中でしか使えない。
```

第1章 SD-6 C++ のための機能テスト推奨

```
// エラー
if ( __has_include(<vector>) )
{ }
}
```

## 1.3 has cpp attribute 式

C++ 実装が特定の属性トークンをサポートしているかどうかを調べるに \_\_has\_cpp\_attribute 式が使える。

```
__has_cpp_attribute( 属性トークン )
```

\_\_has\_cpp\_attribute 式は、属性トークンが存在する場合は属性トークンが標準格に採択された年と月を表す数値に、存在しない場合は0に置換される。

```
// [[nodiscard]] がサポートされている場合は使う
#if __has_cpp_attribute(nodiscard)
[[nodiscard]]
#endif
void * allocate_memory( std::size_t size );
```

\_\_has\_include 式と同じく、\_\_has\_cpp\_attribute 式も #if か #elif の中でし使えない。#ifdef で\_\_has\_cpp\_attribute 式の存在の有無を判定できる。

## 第2章

# C++14 のコア言語の新機能

C++14 で追加された新機能は少ない。C++14 は C++03 と同じくマイラブデートという位置付けで積極的な新機能の追加は見送られたからだ。

## 2.1 二進数リテラル

二進数リテラルは整数リテラルを二進数で記述する機能だ。整数リテラルフィクスに OB もしくは Ob を書くと、二進数リテラルになる。整数を表現する0 と 1 しか使えない。

```
int main()
{
    int x1 = 0b0 ; // 0
    int x2 = 0b1 ; // 1
    int x3 = 0b10 ; // 2
    int x4 = 0b11001100 ; // 204
}
```

二進数リテラルは浮動小数点数リテラルには使えない。 機能テストマクロは \_\_cpp\_binary\_literals, 値は 201304。

## 2.2 数値区切り文字

数値区切り文字は、整数リテラルと浮動小数点数リテラルの数値をシング/ ト文字で区切ることができる機能だ。区切り桁は何桁でもよい。

```
int main()
{
```

```
int x2 = 1'2'3'4'5'6'7'8'9;
int x3 = 1'2345'6789;
int x4 = 1'23'456'789;
double x5 = 3.14159'26535'89793;
}
大きな数値を扱うとき、ソースファイルに 100000000 と 1000000000 と書かれた場合、どちらが大きいのか人間の目にはわかりにくい。人間が読んでわかりに
```

に書くことができる。これはわかりやすい。 他には、1 バイト単位で見やすいように区切ることもできる。

```
{
   unsigned int x1 = 0xde'ad'be'ef;
   unsigned int x2 = 0b110111110'10101101'10111110'111011111;
}
```

コードは間違いの元だ。数値区切りを使うと、100,000,000 と 1,000,000,000 の

数値区切りはソースファイルを人間が読みやすくするための機能で、数値に影響与えない。

# 2.3 [[deprecated]] 属性

int main()

[[deprecated]] 属性は名前とエンティティが、まだ使えるものの利用は推奨:ない状態であることを示すのに使える。[[deprecated]] 属性が指定できる名前、ンティティは、クラス、typedef 名、変数、非 static データメンバー、関数、名前

それぞれ以下のように指定できる。

間、enum, enumerator, テンプレートの特殊化だ。

```
// 変数

// どちらでもよい

[[deprecated]] int variable_name1 { } ;

int variable_name2 [[deprecated]] { } ;

// typedef名

[[deprecated]] typedef int typedef_name1 ;

typedef int typedef_name2 [[deprecated]] ;

using typedef_name3 [[deprecated]] = int ;
```

```
// 関数
   // メンバー関数も同じ文法
   // どちらでもよい
   [[deprecated]] void function_name1() { }
   void function_name2 [[deprecated]] () { }
   // クラス
   // union も同じ
   class [[deprecated]] class_name
   // 非 static データメンバー
   [[deprecated]] int non_static_data_member_name ;
   } ;
   // enum
   enum class [[deprecated]] enum_name
   // enumerator
   enumerator_name [[deprecated]] = 42
   } ;
   // 名前空間
   namespace [[deprecated]] namespace_name { int x ; }
   // テンプレートの特殊化
   template < typename T >
   class template_name { } ;
   template < >
   class [[deprecated]] template_name<void> { } ;
 [[deprecated]] 属性が指定された名前やエンティティを使うと、C++ こ
ラーは警告メッセージを出す。
```

[[deprecated("Use of f() is deprecated. Use f(int option) instea

[[deprecated]] 属性には、文字列を付け加えることができる。これは C-

によっては警告メッセージに含まれるかもしれない。

```
woid f(int option);
機能テストマクロは __has_cpp_attribute(deprecated), 値は 201309。
```

## 2.4 通常の関数の戻り値の型推定

関数の戻り値の型として auto を指定すると、戻り値の型を return 文から推定 くれる。

```
// int ()
  auto a(){ return 0 ; }
  // double ()
  auto b(){ return 0.0 ; }
  // T(T)
  template < typename T >
  auto c(T t){ return t ; }
 return 文の型が一致していないとエラーとなる。
  auto f()
  {
     return 0 ; // エラー、一致していない
     return 0.0; // エラー、一致していない
  }
 すでに型が決定できる return 文が存在する場合、関数の戻り値の型を参照で
コードも書ける。
  auto a()
  {
     &a ; // エラー、aの戻り値の型が決定していない
     return 0 ;
  }
  auto b()
  {
     return 0 ;
     &b; // OK、戻り値の型は int
```

関数 a へのポインターを使うには関数 a の型が決定していなければなら return 文の前に型は決定できないので関数 a はエラーになる。関数 b は retu 現れた後なので戻り値の型が決定できる。

再帰関数も書ける。

```
auto sum( unsigned int i )
{
   if ( i == 0 )
      return i ; // 戻り値の型は unsigned int
   else
      return sum(i-1)+i ; // OK
}
```

このコードも、return 文の順番を逆にすると戻り値の型が決定できずエラるので注意。

```
auto sum( unsigned int i )
{
   if ( i != 0 )
      return sum(i-1)+i ; // エラー
   else
      return i ;
}
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_return\_type\_deduction, 値は 201304。

# 2.5 decltype(auto):厳格な auto

警告:この項目はC++ 規格の詳細な知識を解説しているため極めて難解になる。平均的なC++ プログラマーはこの知識を得てもよりよいコードが書ける

はならない。この項目は読み飛ばすべきである。 decltype(auto) は auto 指定子の代わりに使える厳格な auto だ。利用に

の規格の厳格な理解が求められる。 autoとdecltype(auto)は型指定子と呼ばれる文法の一種で、プレイスホル

として使う。 わかりやすく言うと、具体的な型を式から決定する機能だ。

```
// a は int
auto a = 0 ;
```

```
auto b() { return 0 ; }
```

変数宣言にプレイスホルダー型を使う場合、型を決定するための式は初期化子に ばれる部分に書かれる式を使う。関数の戻り値の型推定にプレイスホルダー型を付 場合、return 文の式を使う。

decltype(auto) は auto の代わりに使うことができる。decltype(auto) も型がら決定する。

```
// a は int
decltype(auto) a = 0;
// b は int
decltype(auto) b() { return 0; }
```

一見すると auto と decltype (auto) は同じようだ。しかし、この 2 つは式かりを決定する方法が違う。どちらも C++ の規格の極めて難しい規則に基づいて決めれる。習得には熟練の魔法使いであることが要求される。

auto が式から型を決定するには、auto キーワードをテンプレートパラメータ・で置き換えた関数テンプレートの仮引数に、式を実引数として渡してテンプレー引数推定を行わせた場合に推定される型が使われる。

たとえば

```
auto x = 0;
```

の場合は、

```
template < typename T >
void f( T u ) ;
```

のような関数テンプレートに対して、

f(0);

と実引数を渡したときにuの型として推定される型と同じ型になる。

```
int i ;
auto const * x = &i ;
```

の場合には、

```
template < typename T >
void f( T const * u );
```

```
f(&i);
```

と実引数を渡したときに  $\mathbf{u}$  の型として推定される型と同じ型になる。こは int const \* になる。

ここまでが auto の説明だ。decltype(auto) の説明は簡単だ。 decltype(auto) の型は、auto を式で置き換えた decltype の型になる。

```
// int
decltype(auto) a = 0;

// int
decltype(auto) f() { return 0; }

上のコードは、下のコードと同じ意味だ。
decltype(0) a = 0;
decltype(0) f() { return 0; }
```

ここまでは簡単だ。そして、これ以降は黒魔術のようなC++の規格の知識になってくる。

auto と decltype(auto) は一見すると同じように見える。型を決定するだて、auto は関数テンプレートの実引数推定を使い、decltype(auto) は decl 使う。どちらも式を評価した結果の型になる。いったい何が違うというのか。

主な違いは、auto は関数呼び出しを使うということだ。関数呼び出しの際まざまな暗黙の型変換が行われる。

たとえば、配列を関数に渡すと、暗黙の型変換の結果、配列の先頭要素への ターになる。

```
template < typename T >
void f( T u ) {}

int main()
{
   int array[5];
   // T は int *
   f( array );
}
```

では auto と decltype(auto) を使うとどうなるのか。

auto x1 = f() ;
// int &

}

decltype(auto) x2 = f();

```
auto x1 = array ;
  // エラー、配列は配列で初期化できない
  decltype(auto) x2 = array ;
 このコードは、以下と同じ意味になる。
  int array[5] ;
  // int *
  int * x1 = array ;
  // エラー、配列は配列で初期化できない
  int x2[5] = array;
 autoの場合、型は int *となる。配列は配列の先頭要素へのポインターへと暗見
変換できるので、結果のコードは正しい。
 decltype(auto) の場合、型は int [5] となる。配列は配列で初期化、代入が
ないので、このコードはエラーになる。
 関数型も暗黙の型変換により関数へのポインター型になる。
  void f();
  // 型は void(*)()
  auto x1 = f:
  // エラー、関数型は変数にできない
  decltype(auto) x2 = f ;
 auto はトップレベルのリファレンス修飾子を消すが、decltype(auto) は保持す
  int & f()
  {
     static int x ;
     return x ;
  }
  int main()
     // int
```

はないためエラー。

```
int main()
     // std::initializer_list<int>
     auto x1 = \{ 1,2,3 \} ;
     // エラー、decltype({1,2,3}) はできない
     decltype(auto) x2 = { 1,2,3 } ;
  }
 decltype(auto) は単体で使わなければならない。
  // OK
  auto const x1 = 0;
  // エラー
  decltype(auto) const x2 = 0;
 この他にも auto と decltype(auto) にはさまざまな違いがある。すべての
列挙するのは煩雑なので省略するが、decltype(auto)は式の型を直接使う。
たいていの場合は便利な型の変換が入る。
 auto は便利でたいていの場合はうまくいくが暗黙の型の変換が入るため、
おりの推定をしてくれないことがある。
 たとえば、引数でリファレンスを受け取り、戻り値でそのリファレンスを対
を書くとする。以下のように書くのは間違いだ。
  // int ( int & )
  auto f( int & ref )
  { return ref ; }
 なぜならば、戻り値の型は式の型から変化して int になってしまうからだ。
decltype(auto)を使うと、
  // int & ( int & )
  decltype(auto) f( int & ref )
  { return ref ; }
 式の型をそのまま使ってくれる。
```

ラムダ式に delctype(auto) を使う場合は以下のように書く。

[]() -> decltype(auto) { return 0 ; } ;

ようにするために追加された機能だ。その利用には C++ の型システムの深い理解必要になる。

機能テストマクロは \_\_cpp\_decltype\_auto, 値は 201304。

## 2.6 ジェネリックラムダ

ジェネリックラムダはラムダ式の引数の型を書かなくてもすむようにする機能 通常のラムダ式は以下のように書く。

```
int main()
{
    []( int i, double d, std::string s ) { };
}
```

ラムダ式の引数には型が必要だ。しかし、クロージャーオブジェクトoperator ()に渡す型はコンパイル時にわかる。コンパイル時にわかるというこれでわざ人間が指定する必要はない。ジェネリックラムダを使えば、引数の型を

```
べき場所に auto キーワードを書くだけで型を推定してくれる。
int main()
```

[]( auto i, auto d, auto s ) { } ; }

ジェネリックラムダ式の結果のクロージャー型には呼び出しごとに違う型を渡せができる。

```
int main()
{
    auto f = []( auto x ) { std::cout << x << '\n' ; } ;

    f( 123 ) ; // int
    f( 12.3 ) ; // double
    f( "hello" ) ; // char const *
}</pre>
```

仕組みは簡単で、以下のようなメンバーテンプレートの operator () を持ってロージャーオブジェクトが生成されているだけだ。

struct closure\_object

```
template < typename T >
    auto operator () ( T x )
    {
        std::cout << x << '\n';
    }
};

機能テストマクロは __cpp_generic_lambdas, 値は 201304。
```

# 2.7 初期化ラムダキャプチャー

初期化ラムダキャプチャーはラムダキャプチャーする変数の名前と式を書く できる機能だ。

ラムダ式は書かれた場所から見えるスコープの変数をキャプチャーする。

```
int main()
{
   int x = 0 ;
   auto f = [=]{ return x ; } ;
   f() ;
}
```

初期化ラムダキャプチャーはラムダキャプチャーに初期化子を書くことがで 能だ。

```
int main()
{
    int x = 0;
    [x = x, y = x, &ref = x, x2 = x * 2]
    {// キャプチャーされた変数を使う
        x;
        y;
        ref;
        x2;
    };
```

初期化ラムダキャプチャーは、"識別子 = expr"という文法でラムダ導入中に書く。するとあたかも"auto 識別子 = expr;"と書いたかのように変数れる。これによりキャプチャーする変数の名前を変えたり、まったく新しい

初期化ラムダキャプチャーの識別子の前に & を付けると、リファレンスキ・チャー扱いになる。

```
int main()
{
    int x = 0;
    [&ref = x]()
    {
       ref = 1;
    }();
    // x は 1
}
```

初期化ラムダキャプチャーが追加された理由には変数の名前を変えたりまったしい変数を導入したいという目的の他に、非 static データメンバーをコピーキ・チャーするという目的がある。

以下のコードには問題があるが、わかるだろうか。

```
struct X
{
    int data = 42;

    auto get_closure_object()
    {
        return [=]{ return data; };
    }
};

int main()
{
    std::function< int() > f;

    {
        X x;
        f = x.get_closure_object();
    }

std::cout << f() << std::endl;</pre>
```

```
X::get_closure_object は X::data を返すクロージャーオブジェクトを返っ
  auto get_closure_object()
     return [=]{ return data ; } ;
  }
 これを見ると、コピーキャプチャーである [=] を使っているので、data la
ジャーオブジェクト内にコピーされているように思える。しかし、ラムタ
static データメンバーをキャプチャーしてはいない。ラムダ式がキャプチャ
いるのは this ポインターだ。上のコードと下のコードは同じ意味になる。
  auto get_closure_object()
  {
     return [this]{ return this->data ; } ;
  }
 さて、main 関数をもう一度見てみよう。
  int main()
  {
     // クロージャーオブジェクトを代入するための変数
     std::function< int() > f ;
     {
        X x ; // x が構築される
        f = x.get_closure_object() ;
        // x が破棄される
     }
     // すでに x は破棄された
     // return &x->data で破棄された x を参照する
     std::cout << f() << std::endl ;
  }
```

初期化ラムダキャプチャーを使えば、非 static データメンバーもコピーチャーできる。

なんと、すでに破棄されたオブジェクトへのリファレンスを参照してしま

auto get\_closure\_object()

る。これは未定義の動作だ。

std::string str ;
std::cin >> str ;

```
}
なお、ムーブキャプチャーは存在しない。ムーブというのは特殊なコピーなの類化ラムダキャプチャーがあれば実現できるからだ。
auto f()
{
```

}

機能テストマクロは \_\_cpp\_init\_captures, 値は 201304。

return [str = std::move(str)]{ return str ; } ;

return [data=data]{ return data ; } ;

## 2.8 変数テンプレート

して使える。

template < typename T >

// ムーブ

変数テンプレートとは変数宣言をテンプレート宣言にできる機能だ。

```
template < typename T >
T variable { } ;

int main()
{
 variable<int> = 42;
 variable<double> = 1.0;
}

これだけではわからないだろうから、順を追って説明する。
C++ではクラスを宣言できる。
class X
{
 int member;
};
```

C++ ではクラスをテンプレート宣言できる。型テンプレートパラメーターは

```
{
  public :
     T member ;
  } ;
  int main()
     X<int>i;
     i.member = 42; // int
     X<double> d ;
     d.member = 1.0 ; // double
  }
 C++ では関数を宣言できる。
  int f( int x )
  { return x ; }
 C++ では関数をテンプレート宣言できる。型テンプレートパラメーターに
て使える。
  template < typename T >
  T f(Tx)
  { return x ; }
  int main()
     auto i = f(42); // int
     auto d = f(1.0); // double
  }
 C++11 では typedef 名を宣言するためにエイリアス宣言ができる。
  using type = int ;
 C++11 ではエイリアス宣言をテンプレート宣言できる。型テンプレート/
ターは型として使える。
  template < typename T >
```

using type = T;

```
{
    type<int> i = 42 ; // int
    type<double> d = 1.0 ; // double
}
```

そろそろパターンが見えてきたのではないだろうか。C++ では一部の宣言はプレート宣言できるということだ。このパターンを踏まえて以下を考えてみよう。C++ では変数を宣言できる。

```
int variable{};
```

C++14 では変数宣言をテンプレート宣言できる。型テンプレートパラメータ・型として使える。index てんぷれとせんげん@テンプレート宣言

```
template < typename T >
T variable { } ;
int main()
{
   variable<int> = 42 ;
   variable<double> = 1.0 ;
}
```

変数テンプレートは名前どおり変数宣言をテンプレート宣言できる機能だ。変数ンプレートはテンプレート宣言なので、名前空間スコープとクラススコープの中心か書くことができない。

// これはグローバル名前空間スコープという特別な名前空間スコープ

```
namespace ns {
// 名前空間スコープ
}
class
{
// クラススコープ
};
```

変数テンプレートの使い道は主に2つある。

#### 2.8.1 意味は同じだが型が違う定数

プログラムでマジックナンバーを変数化しておくのは良い作法であるとさる。たとえば円周率を3.14... などと書くよりも pi という変数名で扱ったにかりやすい。変数化すると、円周率の値が後で変わったときにプログラムを多のも楽になる。

```
constexpr double pi = 3.1415926535;
```

しかし、円周率を表現する型が複数ある場合どうすればいいのか。よくある前を分ける方法だ。

```
constexpr float pi_f = 3.1415 ;
 constexpr double pi_d = 3.1415926535 ;
 constexpr int pi_i = 3 ;
 // 任意の精度の実数を表現できるクラスとする
 const Real pi_r("3. 141592653589793238462643383279");
しかしこれは、使う側で型によって名前を変えなければならない。
 // 円の面積を計算する関数
 template < typename T >
 T calc_area( T r )
 {
    // Tの型によって使うべき名前が変わる
    return r * r * ???;
 }
関数テンプレートを使うという手がある。
 template < typename T >
 constexpr T pi()
 {
    return static_cast<T>(3.1415926535);
 }
 template < >
 Real pi()
    return Real("3. 141592653589793238462643383279");
```

#### 第2章 C++14のコア言語の新機能

```
template < typename T >
   T calc area(Tr)
   {
      return r * r * pi<T>();
   }
 しかし、この場合引数は何もないのに関数呼び出しのための()が必要だ。
 変数テンプレートを使うと以下のように書ける。
   template < typename T >
   constexpr T pi = static_cast<T>(3.1415926535) ;
   template < >
   Real pi<Real>("3. 141592653589793238462643383279");
   template < typename T >
   T calc_area( T r )
   {
      return r * r * pi<T>;
   }
2.8.2 traits のラッパー
 値を返す traits で値を得るには::value と書かなければならない。
   std::is_pointer<int>::value ;
   std::is_same< int, int >::value ;
 C++14 では std::integral_constant に constexpr operator bool が追加され
ので、以下のようにも書ける。
   std::is_pointer<int>{} ;
   std::is_same< int, int >{};
  しかしまだ面倒だ。変数テンプレートを使うと traits の記述が楽になる。
   template < typename T >
   constexpr bool is_pointer_v = std::is_pointer<T>::value ;
   template < typename T, typename U >
   constexpr bool is_same_v = std::is_same<T, U>::value ;
```

```
is_same_v< int, int > ;
```

C++ の標準ライブラリでは従来の traits ライブラリを変数テンプレートプした \_v 版を用意している。

機能テストマクロは \_\_cpp\_variable\_templates, 値は 201304。

# 2.9 constexpr 関数の制限緩和

C++11 で追加された constexpr 関数はとても制限が強い。constexpr 関数には実質 return 文 1 つしか書けない。

C++14 では、ほとんど何でも書けるようになった。

```
constexpr int f( int x )
{
    // 変数を宣言できる
    int sum = 0;

    // 繰り返し文を書ける
    for ( int i = 1; i < x; ++i) )
{
        // 変数を変更できる
        sum += i;
    }

    return sum;
}</pre>
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_constexpr, 値は 201304。

C++11 の constexpr 関数に対応しているが C++14 の constexpr 関数に対いない C++ 実装では、 $\_$ cpp\_constexpr マクロの値は 200704 になる。

# 2.10 メンバー初期化子とアグリゲート初期化の組み合わせ

C++14 ではメンバー初期化子とアグリゲート初期化が組み合わせられるなった。

メンバー初期化子とはクラスの非 static データメンバーを = で初期化 C++11 の機能だ。

#### 第2章 C++14のコア言語の新機能

```
{
    // メンバー初期化子
    int data = 123;
};
```

アグリゲート初期化とはアグリゲートの条件を満たす型をリスト初期化で初期化きる C++11 の機能だ。

```
struct S
{
    int x, y, z;
};

S s = { 1,2,3 };
// s.x == 1, s.y == 2, s.z == 3
```

C++11 ではメンバー初期化子を持つクラスはアグリゲート型の条件を満たされてアグリゲート初期化ができない。

C++14 では、この制限が緩和された。

```
struct S
{
    int x, y=1, z;
};

S s1 = { 1 };
// s1.x == 1, s1.y == 1, s1.z == 0

S s2{ 1,2,3 };
// s2.x == 1, s2.y == 2, s2.z == 3
```

アグリゲート初期化で、メンバー初期化子を持つ非 static データメンバーに対する値がある場合はアグリゲート初期化が優先される。省略された場合はメンバ期化子で初期化される。アグリゲート初期化でもメンバー初期化子でも明示的になれていない非 static データメンバーは空の初期化リストで初期化された場合同じになる。

機能テストマクロは \_\_cpp\_aggregate\_nsdmi, 値は 201304。

### 2.11 サイズ付き解放関数

C++14 では operator delete のオーバーロードに、解放すべきストレージズを取得できるオーバーロードが追加された。

```
void operator delete
                         ( void *, std::size_t ) noexcept ;
   void operator delete[] ( void *, std::size_t ) noexcept ;
 第二引数は std::size_t 型で、第一引数で指定されたポインターが指す解析
ストレージのサイズが与えられる。
 たとえば以下のように使える。
   void * operator new ( std::size_t size )
      void * ptr = std::malloc( size ) ;
      if ( ptr == nullptr )
          throw std::bad_alloc() ;
       std::cout << "allocated storage of size: " << size << '\n';</pre>
      return ptr ;
   }
   void operator delete ( void * ptr, std::size_t size ) noexcept
   {
       std::cout << "deallocated storage of size: " << size << '\n'
       std::free( ptr );
   }
   int main()
   {
      auto u1 = std::make_unique<int>(0) ;
      auto u2 = std::make_unique<double>(0.0) ;
   }
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_sized\_deallocation, 値は 201309。

# 第3章

# C++17 のコア言語の新機能

C++14 の新機能のおさらいが終わったところで、いよいよ C++17 のコラ 新機能を解説していく。

C++17 のコア言語の新機能には、C++11 ほどの大きなものはない。

# 3.1 トライグラフの廃止

C++17 ではトライグラフが廃止された。

トライグラフを知らない読者はこの変更を気にする必要はない。トライク知っている読者はなおさら気にする必要はない。

# 3.2 16 進数浮動小数点数リテラル

C++17 では浮動小数点数リテラルに 16 進数を使うことができるようにな 16 進数浮動小数点数リテラルは、プレフィクス 0x に続いて仮数部を (0123456789abcdefABCDEF) で書き、p もしくは P に続けて指数部を 10 進数で

```
double d1 = 0x1p0 ; // 1
double d2 = 0x1.0p0 ; // 1
double d3 = 0x10p0 ; // 16
double d4 = 0xabcp0 ; // 2748
```

指数部はeではなくpかPを使う。

```
double d1 = 0x1p0; double d2 = 0x1p0;
```

16 進数浮動小数点数リテラルでは、指数部を省略できない。

0x1.0 ; // エラー、指数部がない

指数部は10進数で記述する。16進数浮動小数点数リテラルは仮数部に2の指揮を掛けた値になる。つまり、

MqNxO

という浮動小数点数リテラルの値は

 $N \times 2^{M}$ 

となる。

0x1p0; // 1 0x1p1; // 2 0x1p2; // 4 0x10p0; // 16 0x10p1; // 32

0x10p1; // 32 0x1p-1; // 0.5 0x1p-2; // 0.25

16 進数浮動小数点数リテラルには浮動小数点数サフィックスを記述できる。

auto a = 0x1p0f ; // float
auto b = 0x1p0l ; // long double

16 進数浮動小数点数リテラルは、浮動小数点数が表現方法の詳細を知ってい境 (たとえば IEEE-754) で、正確な浮動小数点数の表現が記述できるようにな機能テストマクロは \_\_cpp\_hex\_float, 値は 201603。

# 3.3 UTF-8 文字リテラル

C++17 では UTF-8 文字リテラルが追加された。

char c = u8'a';

となる。

UTF-8 文字リテラルは文字リテラルにプレフィクス u8 を付ける。UTF-8 文字 テラルは UTF-8 のコード単位 1 つで表現できる文字を扱うことができる。UCS 規格としては、C0 制御文字と基本ラテン文字 Unicode ブロックが該当する。UT 文字リテラルに書かれた文字が複数の UTF-8 コード単位を必要とする場合はエ

```
// U+3042 は UTF-8 は 0xE3, 0x81, 0x82 という 3 つのコード単位で表現する
// あるため
u8'あ';
```

# 3.4 関数型としての例外指定

機能テストマクロはない。

C++17 では例外指定が関数型に組み込まれた。

例外指定とは noexcept のことだ。noexcept と noexcept(true) が指定され は例外を外に投げない。

C++14 ではこの例外指定は型システムに入っていなかった。そのため、指定の付いた関数へのポインター型は型システムで無例外を保証することだかった。

```
// C++14 のコード
void f()
{
    throw 0;
}

int main()
{
    // 無例外指定の付いたポインター
    void (*p)() noexcept = &f;

    // 無例外指定があるにもかかわらず例外を投げる
    p();
}
```

C++17 では例外指定が型システムに組み込まれた。例外指定のある関数型指定のない関数へのポインター型に変換することはできる。逆はできない。

```
// 型は void()
void f() { }
// 型は void() noexcept
void g() noexcept { }
// OK
```

```
// OK
// 例外指定のある関数へのポインター型&g を例外指定のない関数へのポインター型
// に変換できる
void (*p2)() = &g ; // OK

// エラー
// 例外指定のない関数へのポインター型&f は例外指定のある関数へのポインター型
// に変換できない
void (*p3)() noexcept = &f ;

// OK
// p4, &f は例外指定のある関数へのポインター型
void (*p4)() noexcept = &f ;
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_noexcept\_function\_type, 値は 201510。

### 3.5 fold 式

return x ;

C++17 には fold 式が入った。fold は元は数学の概念で畳み込みとも呼ばないる。

C++ における fold 式とはパラメーターパックの中身に二項演算子を適用するの式だ。

今、可変長テンプレートを使って受け取った値をすべて加算した合計を返す sum を書きたいとする。

```
template < typename T, typename ... Types > auto sum( T x, Types ... args );

int main()
{
   int result = sum(1,2,3,4,5,6,7,8,9); // 45
}

このような関数テンプレート sum は以下のように実装することができる。
template < typename T > auto sum( T x )
```

```
template < typename T, typename ... Types >
auto sum( T x, Types ... args )
{
    return x + sum( args... ) ;
}
```

sum(x, args) は 1 番目の引数を x で、残りをパラメーターパック ar け取る。そして、x + sum(args ...) を返す。すると、sum(args ...) sum(x, args) に渡されて、1 番目の引数、つまり最初から見て 2 番目の引数 り、また sum が呼ばれる。このような再帰的な処理を繰り返していく。

そして、引数が1つだけになると、可変長テンプレートではない sum が呼これは重要だ。なぜならば可変長テンプレートは0 個の引数を取ることがで、そのまま可変長テンプレート版の sum が呼ばれてしまうと、次の sum のじができずにエラーとなる。これを回避するために、また再帰の終了条件のため数が1つの sum のオーバーロード関数を書いておく。

可変長テンプレートでは任意個の引数に対応するために、このような再帰的ドが必須になる。

しかし、ここで実現したいこととは N 個あるパラメーターパック args 0 対して、仮に N 番目を args # N とする表記を使うと、args # 0 + args # 1 + args # N = 1 のような展開をしたいだけだ。C + + 17 の fold 式はパラメーター/対して二項演算子を適用する展開を行う機能だ。

fold 式を使うと sum は以下のように書ける。

```
template < typename ... Types >
auto sum( Types ... args )
{
   return ( ... + args ) ;
}
```

( ... + args ) は、args#0 + args#1 + ... + args#N-1 のように展開され fold 式には、単項 fold 式と二項 fold 式がある。そして、演算子の結合 がわせて左 fold と右 fold がある。

fold 式は必ず括弧で囲まなければならない。

```
template < typename ... Types > auto sum( Types ... args ) {
    // fold 式
```

```
// エラー、括弧がない
      ... + args ;
   }
 単項 fold 式の文法は以下のいずれかになる。
   単項右fold
   ( cast-expression fold-operator ... )
   単項左fold
   ( ... fold-operator cast-expression )
例:
   template < typename ... Types >
   void f( Types ... args )
   {
      // 単項左 fold
      ( ... + args ) ;
      // 単項右 fold
      ( args + ... ) ;
   }
 cast-expression には未展開のパラメーターパックが入っていなければならない
例:
   template < typename T >
   T f(Tx) { return x; }
   template < typename ... Types >
   auto g( Types ... args )
   {
      // f(args#0) + f(args#1) + ... + f(args#N-1)
      return ( ... + f(args) ) ;
   }
 これは f(args) というパターンが展開される。
 fold-operator には以下のいずれかの二項演算子を使うことができる。
                               <<= >>=
          <
                 <=
                    >=
                            П
                        &&
```

```
fold 式には左 fold と右 fold がある。
```

```
左 fold 式の ( ... op pack ) では、展開結果は ((( pack#0 op pack#1 ) #2 ) ... op pack#N-1 )となる。右 fold 式の ( pack op ... ) では、展開 ( pack#0 op ( pack#1 op ( pack#2 op ( ... op pack#N-1 ))))となる。
```

浮動小数点数のような交換法則を満たさない型に fold 式を適用する際には必要だ。

二項 fold 式の文法は以下のいずれかになる。

```
( cast-expression fold-operator \dots fold-operator cast-expression
```

左右の cast-expression のどちらか片方だけに未展開のパラメーターパック ていなければならない。2 つの fold-operator は同じ演算子でなければならな ( e1 op1 ... op2 e2 ) という二項 fold 式があったとき、e1 にパラメータ クがある場合は二項右 fold 式、e2 にパラメーターパックがある場合は二項

```
template < typename ... Types >
void sum( Types ... args )
```

式になる。

```
void sum( Types ... args )
{
    // 左fold
    // ((((0+1)+2)+3)+4)+5)
    auto left = ( 0 + ... + args ) ;
    // 右fold
```

```
auto right = ( args + ... + 0 ) ;
}
int main()
{
    sum(1,2,3,4,5) ;
}
```

fold 式はパラメーターパックのそれぞれに二項演算子を適用したいときにわる ざ複雑な再帰的テンプレートを書かずにすむ方法を提供してくれる。

機能テストマクロは \_\_cpp\_fold\_expressions, 値は 201603。

### 3.6 ラムダ式で \*this のコピーキャプチャー

C++17 ではラムダ式で \*this をコピーキャプチャーできるようになっ \*this をコピーキャプチャーするには、ラムダキャプチャーに \*this と書く。

```
struct X
{
    int data = 42;
    auto get()
    {
        return [*this]() { return this->data; };
    }
};

int main()
{
    std::function < int () > f;
    {
        X x;
        f = x.get();
    }// x の寿命はここまで

    // コピーされているので問題ない
    int data = f();
}
```

コピーキャプチャーする \*this はラムダ式が書かれた場所の \*this だ。

```
struct X
   int data = 0 ;
   void f()
       // this はポインターのキャプチャー
       // data は this ポインターをたどる
        [this]{ data = 1 ; }() ;
       // this->data は 1
       // エラー、*this はコピーされている
       // クロージャーオブジェクトのコピーキャプチャーされた変数は
       // デフォルトで変更できない
        [*this]{ data = 2; } ();
       // OK、mutable を使っている
        [*this]() mutable { data = 2 ; } () ;
       // this->data は 1
       // 変更されたのはコピーされたクロージャーオブジェクト内の*this
   }
 };
最初のラムダ式で生成されるクロージャーオブジェクトは以下のようなもの
 class closure_object
    X * this_ptr ;
 public :
    closure_object( X * this_ptr )
        : this_ptr(this_ptr) { }
```

void operator () () const

} }; this\_ptr->data = 1;

{

### 第3章 C++17のコア言語の新機能

class closure\_object

X this\_obj ;

X const \* this\_ptr = &this\_obj ;

```
public :
     closure_object( X const & this_obj )
         : this_obj(this_obj) { }
     void operator () () const
        this_ptr->data = 2 ;
     }
  } ;
 これは C++ の文法に従っていないのでやや苦しいコード例だが、コピーキ・
チャーされた値を変更しようとしているためエラーとなる。
 3番目のラムダ式では以下のようなクロージャーオブジェクトが生成される。
  class closure_object
     X this_obj ;
     X * this_ptr = &this_obj ;
  public :
     closure_object( X const & this_obj )
         : this_obj(this_obj) { }
     void operator () ()
        this_ptr->data = 2;
     }
  } ;
 ラムダ式に mutable が付いているのでコピーキャプチャーされた値も変更できん
 *this をコピーキャプチャーした場合、this キーワードはコピーされたオブジ
トへのポインターになる。
  struct X
```

{

```
// this はコピーされた別のオブジェクトへのアドレス
        [*this](){ std::printf("%p\n", this); }();
    }
  };
  int main()
     Xx;
     x.f();
  }
 この場合、出力される2つのポインターの値は異なる。
 ラムダ式での *this のコピーキャプチャーは名前どおり *this のコピー
チャーを提供する提案だ。同等の機能は初期化キャプチャーでも可能だが、表
長で間違いの元だ。
  struct X
     int data ;
     auto f()
        return [ tmp = *this ] { return tmp.data ; };
```

std::printf("%p\n", this);

// this はこのメンバー関数 f を呼び出したオブジェクトへのアドレス

# 3.7 constexpr ラムダ式

int main()

};

C++17 ではラムダ式が constexpr になった。より正確に説明すると、ラクロージャーオブジェクトの operator () は条件を満たす場合 constexpr に

機能テストマクロは \_\_cpp\_capture\_star\_this, 値は 201603。

```
{
   auto f = []{ return 42 : } :
```

```
第3章 C++17のコア言語の新機能
```

t.func() ;
return true ;

```
constexpr int value = f(); // OK
  }
 constexpr の条件を満たすラムダ式はコンパイル時定数を必要とする場所で使
とができる。たとえば constexpr 変数や配列の添字や static_assert などだ。
  int main()
  {
      auto f = []{ return 42 ; } ;
     int a[f()];
     static_assert( f() == 42 ) ;
     std::array<int, f()> b ;
  }
 constexpr の条件を満たすのであれば、キャプチャーもできる。
  int main()
  {
      int a = 0 ; // 実行時の値
      constexpr int b = 0; // コンパイル時定数
      auto f = [=]{ return a ; };
     auto g = [=]{ return b ; } ;
     // エラー、constexpr の条件を満たさない
     constexpr int c = f() ;
     // OK、constexpr の条件を満たす
     constexpr int d = g() ;
  }
 以下の内容は上級者向けの解説であり、通常の読者は理解する必要がない。
 constexpr ラムダ式は SFINAE の文脈で使うことができない。
  // エラー
  template < typename T,
     bool b = []{
         Tt;
```

```
void f()
{
    T t ;
    t.func() ;
}
```

なぜならば、これを許してしまうとテンプレート仮引数に対して任意の式や ンプレートの Substitution に失敗するかどうかをチェックできてしまうから 上級者向けの解説終わり。

機能テストマクロは \_\_cpp\_constexpr, 値は 201603。

\_\_cpp\_constexpr マクロの値は、C++11 の時点で 200704、C++14 の 201304 だ。

# 3.8 文字列なし static assert

C++17 では  $static_assert$  に文字列リテラルを取らないものが追加された

```
static_assert( true ) ;
```

C++11 で追加された  $static_assert$  には、文字列リテラルが必須だった。

```
static_assert( true, "this shall not be asserted." ) ;
```

特に文字列を指定する必要がない場合もあるので、文字列リテラルを取static\_assert が追加された。

機能テストマクロは \_\_cpp\_static\_assert, 値は 201411。

C++11 の時点で \_\_cpp\_static\_assert の値は 200410。

# 3.9 ネストされた名前空間定義

C++17ではネストされた名前空間の定義を楽に書ける。

ネストされた名前空間とは、A::B:: C のように名前空間の中に名前空間がえる名前空間のことだ。

```
namespace A {
    namespace B {
        namespace C {
        // ...
```

```
}
C++17では、上記のコードと同じことを以下のように書ける。
namespace A::B::C {
// ...
}
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_nested\_namespace\_definitions, 値は 201411。

# 3.10 [[fallthrough]] 属性

[[fallthrough]] 属性は switch 文の中の case ラベルを突き抜けるというヒン 出すのに使える。

switch 文では対応する case ラベルに処理が移る。通常、以下のように書く。

```
void f( int x )
    switch (x)
    case 0 :
        // 処理 0
        break ;
    case 1 :
        // 処理 1
        break ;
    case 2 :
        // 処理 2
        break ;
    default :
        // x がいずれでもない場合の処理
        break ;
    }
 }
この例を以下のように書くと
 case 1 :
```

// 処理 1

case 2 :

x が 1 のときは処理 1 を実行した後に、処理 2 も実行される。switch 文を書はこのような誤りを書いてしまうことがある。そのため、賢い C++ コンパッ switch 文の case ラベルで break 文や return 文などで処理が終わらず、次のベルや default ラベルに処理に突き抜けるコードを発見すると、警告メッセ出す。

しかし、プログラマーの意図がまさに突き抜けて処理してほしい場合、響セージは誤った警告となってしまう。そのような警告メッセージを抑制め、またコード中に処理が突き抜けるという意図をわかりやすく記述する[[fallthrough]] 属性が追加された。

[[fallthrough]] 属性を書くと、C++ コンパイラーは処理がその先に突きことがわかるので、誤った警告メッセージを抑制できる。また、他人がコートときに意図が明らかになる。

機能テストマクロは \_\_has\_cpp\_attribute(fallthrough), 値は 201603。

# 3.11 [[nodiscard]] 属性

[[nodiscard]] 属性は関数の戻り値が無視されてほしくないときに使うことる。[[nodiscard]] 属性が付与された関数の戻り値を無視すると警告メッセー示される。

```
[[nodiscard]] int f()
{
    return 0;
}

void g( int ) { }

int main()
{
    // エラー、戻り値が無視されている
```

```
// OK、戻り値は無視されていない
int result = f();
g(f);
f() + 1;
(void) f();
}
```

戻り値を無視する、というのは万能ではない。上の例でも、意味的には戻り値に 視されていると言えるが、コンパイラーはこの場合に戻り値が無視されていると に えない。

[[nodiscard]] の目的は、戻り値を無視してほしくない関数をユーザーが利用ときの初歩的な間違いを防ぐためにある。void 型にキャストするような意図的がり値の無視まで防ぐようには作られていない。

[[nodiscard]] 属性を使うべき関数は、戻り値を無視してほしくない関数だ。ような関数が戻り値を無視してほしくないかというと大きく2つある。

戻り値をエラーなどのユーザーが確認しなければならない情報の通知に使う関係

```
enum struct error_code
{
    no_error, some_operations_failed, serious_error
};

// 失敗するかもしれない処理
error_code do_something_that_may_fail()
{
    // 処理
    if ( is_error_condition() )
        return error_code::serious_error;

    // 処理

    return error_code::no_error;
}

// 工ラーがいっさい発生しなかったときの処理
int do_something_on_no_error();
```

```
// エラーを確認していない
     do_something_that_may_fail() ;
     // エラーがない前提で次の処理をしようとする
     do_something_on_no_error() ;
  }
 関数に [[nodiscard]] 属性を付与しておけば、このようなユーザー側の初き
ラー確認の欠如に警告メッセージを出せる。
 [[nodiscard]] 属性は、クラスと enum にも付与することができる。
  class [[nodiscard]] X { } ;
  enum class [[nodiscard]] Y { };
 [[nodiscard]] が付与されたクラスか enum が戻り値の型である
[[nodiscard]] が付与された扱いとなる。
  class [[nodiscard]] X { };
  X f() { return X{} ; }
  int main()
     // 警告、戻り値が無視されている
     f():
  }
 機能テストマクロは __has_cpp_attribute(nodiscard), 値は 201603。
```

# 3.12 [[maybe\_unused]] 属性

[[maybe\_unused]] 属性は名前やエンティティが意図的に使われないことでに使える。

現実の C++ のコードでは、宣言されているのにソースコードだけを考慮す こからも使われていないように見える名前やエンティティが存在する。

```
void do_something( int *, int * ) ;
void f()
{
```

}

のかもしれない。

#### 第3章 C++17のコア言語の新機能

```
char reserved[1024] = { } ;
int y[5] ;
do_something( x, y ) ;
```

ここでは reserved という名前はどこからも使われていない。一見すると不必 名前に見える。優秀な C++ コンパイラーはこのようなどこからも使われていない

前に対して「どこからも使われていない」という警告メッセージを出す。

しかし、コンパイラーから見えているソースコードがプログラムのすべてでい い。さまざまな理由で reserved のような一見使われていない変数が必要になる。

たとえば、reserved はスタック破壊を検出するための領域かもしれない。プリラムは C++ 以外の言語で書かれたコードとリンクしていて、そこで使われるのしれない。あるいは OS や外部デバイスが読み書きするメモリーとして確保してい

どのような理由にせよ、名前やエンティティが一見使われていないように見える存在が必要であるという意味を表すのに、[[maybe\_unused]] 属性を使うことがる。これにより、C++ コンパイラーの「未使用の名前」という警告メッセージを制できる。

[[maybe\_unused]] char reserved[1024];

[[maybe\_unused]] 属性を適用できる名前とエンティティの宣言は、クラス、type 名、変数、非 static データメンバー、関数、enum, enumerator だ。

```
// クラス
class [[maybe_unused]] class_name
{
// 非 static データメンバー
        [[maybe_unused]] int non_static_data_member;
};

// typedef 名
// どちらでもよい
[[maybe_unused]] typedef int typedef_name1;
typedef int typedef_name2 [[maybe_unused]];
```

// エイリアス宣言によるtypedef 名

```
// 変数
// どちらでもよい
[[maybe_unused]] int variable_name1{};
int variable_name2 [[maybe_unused]] { };

// 関数
// メンバー関数も同じ文法
// どちらでもよい
[[maybe_unused]] void function_name1() { }
void function_name2 [[maybe_unused]] () { }

enum [[maybe_unused]] enum_name
{
// enumerator
    enumerator_name [[maybe_unused]] = 0
};

機能テストマクロは __has_cpp_attribute(maybe_unused), 値は 201603
```

# 3.13 演算子のオペランドの評価順序の固定

C++17 では演算子のオペランドの評価順序が固定された。

以下の式は、a, b の順番に評価されることが規格上保証される。e= の e に 上許される任意の演算子が入る (+=, -= など)。

```
a.b

a->b

a->*b

a(b1,b2,b3)

b @= a

a[b]

a << b

a >> b

T$$ 0;

int* f();
```

```
f()[g()];
}
```

と書いた場合、関数  ${\bf f}$  がまず先に呼び出されて、次に関数  ${\bf g}$  が呼び出されることだ証される。

関数呼び出しの実引数のオペランド b1, b2, b3 の評価順序は未規定のままだ。 これにより、既存の未定義の動作となっていたコードの挙動が定まる。

# 3.14 constexpr if 文: コンパイル時条件分岐

constexpr if 文はコンパイル時の条件分岐ができる機能だ。 constexpr if 文は、通常の if 文を if constexpr で置き換える。

```
// if 文
if ( expression )
    statement ;

// constexpr if 文
if constexpr ( expression )
    statement ;
```

constexpr if 文という名前だが、実際に記述するときは if constexpr だ。 コンパイル時の条件分岐とは何を意味するのか。以下は constexpr if が行われ

ものの一覧だ。

- 最適化
- 非テンプレートコードにおける挙動の変化

コンパイル時の条件分岐の機能を理解するには、まず C++ の既存の条件分岐いて理解する必要がある。

#### 3.14.1 実行時の条件分岐

通常の実行時の条件分岐は、実行時の値を取り、実行時に条件分岐を行う。

```
void f( bool runtime_value )
{
    if ( runtime_value )
        do_true_thing() ;
```

3.14 constexpr if 文: コンパイル時刻

```
do_false_thing();
  }
 この場合、runtime_value が true の場合は関数 do_true_thing が呼ばれ、t
場合は関数 do_false_thing が呼ばれる。
 実行時の条件分岐の条件には、コンパイル時定数を指定できる。
  if (true)
     do_true_thing();
  else
     do_false_thing() ;
 この場合、賢いコンパイラーは以下のように処理を最適化するかもしれない
  do_true_thing();
 なぜならば、条件は常に true だからだ。このような最適化は実行時の条件
もコンパイル時に行える。コンパイル時の条件分岐はこのような最適化が目
ない。
 もう一度コード例に戻ろう。今度は完全なコードを見てみよう。
  // do_true_thing の宣言
  void do_true_thing() ;
  // do_false_thing の宣言は存在しない
  void f( bool runtime_value )
     if (true)
        do_true_thing();
     else
        do_false_thing(); // エラー
  }
 このコードはエラーになる。その理由は、do_false_thingという名前が宣
ていないからだ。C++ コンパイラーは、コンパイル時にコードを以下の形に
ることで最適化することはできるが、
```

void do\_true\_thing() ;

void f( bool runtime value )

```
do_true_thing() ;
}
```

最適化の結果失われたものも、依然としてコンパイル時にコードとして検証はる。コードとして検証されるということは、コードとして誤りがあればエラーる。名前 do\_false\_thing は宣言されていないのでエラーとなる。

### 3.14.2 プリプロセス時の条件分岐

C++ が C 言語から受け継いだ C プリプロセッサーには、プリプロセス時の多分岐の機能がある。

```
// do_true_thing の宣言
 void do_true_thing() ;
 // do_false_thing の宣言は存在しない
 void f( bool runtime_value )
 {
 #if true
    do_true_thing();
 #else
    do_false_thing();
 #endif
 }
このコードは、プリプロセスの結果、以下のように変換される。
void do_true_thing() ;
void f( bool runtime_value )
 {
    do_true_thing();
 }
```

この結果、プリプロセス時の条件分岐では、選択されない分岐はコンパイルされいので、コンパイルエラーになるコードも書くことができる。

プリプロセス時の条件分岐は、条件が整数とか bool 型のリテラルか、リテラル 比較演算子を適用した結果ではうまくいく。しかし、プリプロセス時とはコンパー

時ではないので コンパイル時計質はできない

```
constexpr int f()
{
    return 1;
}

void do_true_thing();

int main()
{
// エラー
// 名前fはプリプロセッサーマクロではない
#if f()
    do_true_thing();

#else
    do_false_thing();

#endif
}
```

#### 3.14.3 コンパイル時の条件分岐

コンパイル時の条件分岐とは、分岐の条件にコンパイル時計算の結果を使っ、選択されない分岐にコンパイルエラーが含まれていても、使われないのでイルエラーにはならない条件分岐のことだ。

たとえば、std::distance という標準ライブラリを実装してみstd::distance(first, last) は、イテレーター first と last の距離を返す。

```
template < typename Iterator >
constexpr typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_ty
distance( Iterator first, Iterator last )
{
    return last - first ;
}
```

残念ながら、この実装は Iterator がランダムアクセスイテレーターの場合動かない。入力イテレーターに対応させるには、イテレーターを1つずつインントして last と等しいかどうか比較する実装が必要になる。

```
template < typename Iterator >
constexpr typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_ty
distance( Iterator first. Iterator last )
```

```
while (first != last)
      {
         ++n ;
         ++first ;
      }
      return n ;
  }
 残念ながら、この実装は Iterator にランダムアクセスイテレーターを渡した。
に効率が悪い。
 ここで必要な実装は、Iterator がランダムアクセスイテレーターなり
last - first を使い、そうでなければ地道にインクリメントする遅い実装を使
とだ。Iterator がランダムアクセスイテレーターかどうかは、以下のコードを
ば、is_random_access_iterator<iterator> で確認できる。
   template < typename Iterator >
   constexpr bool is_random_access_iterator =
      std::is_same_v<
         typename std::iterator_traits<
             std::decay_t<Iterator>
         >::iterator_category,
         std::random_access_iterator_tag > ;
 すると、distance は以下のように書けるのではないか。
   // ランダムアクセスイテレーターかどうかを判定するコード
  template < typename Iterator >
   constexpr bool is_random_access_iterator =
      std::is_same_v<
         typename std::iterator_traits<</pre>
             std::decay_t<Iterator>
         >::iterator_category,
         std::random_access_iterator_tag > ;
   // distance
   template < typename Iterator >
   constexpr typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_type
```

typename std::iterator\_traits<Iterator>::difference\_type n = 0

{

```
if ( is_random_access_iterator<Iterator> )
     {// ランダムアクセスイテレーターなので速い方法を使う
        return last - first ;
     }
     else
     { // ランダムアクセスイテレーターではないので遅い方法を使う
        typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_type
        while (first != last)
        ₹
           ++n ;
           ++first;
        }
        return n ;
     }
  }
 残念ながら、このコードは動かない。ランダムアクセスイテレーターではな
レーターを渡すと、last - first というコードがコンパイルされるので、こ
ルエラーになる。コンパイラーは、
```

// ランダムアクセスイテレーターかどうか確認する

計算できるので、最終的なコード生成の結果としては、if (true)か if (fa なると判断できる。したがってコンパイラーは選択されない分岐のコード生成ないことはできる。しかしコンパイルはするので、コンパイルエラーになる。

という部分について、is\_random\_access\_iterator<Iterator>の値はコンパー

if ( is\_random\_access\_iterator<Iterator> )

constexpr if を使うと、選択されない部分の分岐はコンパイルエラーではコンパイルエラーとはならなくなる。

```
// distance
template < typename Iterator >
constexpr typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_ty
distance( Iterator first, Iterator last )
{
    // ランダムアクセスイテレーターかどうか確認する
    if constexpr ( is_random_access_iterator<Iterator> )
```

```
return last - first ;
}
else
{ // ランダムアクセスイテレーターではないので遅い方法を使う
    typename std::iterator_traits<Iterator>::difference_type n =

while ( first != last )
    {
        ++n ;
        ++first ;
    }

return n ;
}
```

#### 3.14.4 超上級者向け解説

constexpr if は、実はコンパイル時条件分岐ではない。テンプレートの実体に、選択されないブランチのテンプレートの実体化の抑制を行う機能だ。

constexpr if によって選択されない文は discarded statement とな discarded statement はテンプレートの実体化の際に実体化されなくなる。

```
struct X
{
   int get() { return 0 ; }
};

template < typename T >
int f(T x)
{
   if constexpr ( std::is_same_v< std::decay_t<T>, X > )
        return x.get() ;
   else
        return x ;
}

int main()
```

```
f( x ); // return x.get()
f( 0 ); // return x
}
```

int 型に暗黙に変換できないが問題がなくなる。f(0) では return x.g discarded statement となるため実体化されない。int 型にはメンバー関数 g いが問題はなくなる。

f(x) では、return x が discarded statement となるため実体化されない

discarded statement は実体化されないだけで、もちろんテンプレートのコティの一部だ。discarded statement がテンプレートのコードとして文法的、に正しくない場合は、もちろんコンパイルエラーとなる。

何度も説明しているように、constexpr if はテンプレートの実体化を条件抑制するだけだ。条件付きコンパイルではない。

```
template < typename T >
void f()
{
    if constexpr ( std::is_same_v<T, int> )
    {
        // 常にコンパイルエラー
        static_assert( false );
    }
}
```

このコードは常にコンパイルエラーになる。なぜならば、static\_assert(: はテンプレートに依存しておらず、テンプレートの宣言を解釈するときに、依 はないから、そのまま解釈される。

```
第3章 C++17のコア言語の新機能
```

```
よい。
  template < typename T >
  void f()
  {
      static_assert( std::is_same_v<T, int> ) ;
      if constexpr ( std::is_same_v<T, int> )
      }
  }
 もし、どうしても constexpr 文の条件に合うときにだけ static_assert が使い
い場合もある。これは、constexpr if をネストしたりしていて、その内容を含
static_assert に書くのが冗長な場合だ。
  template < typename T >
  void f()
      if constexpr (E1)
         if constexpr (E2)
            if constexpr (E3)
               // E1 && E2 && E3 のときにコンパイルエラーにしたい
               // 実際には常にコンパイルエラー
               static_assert( false ) ;
            }
  }
 現実には、E1, E2, E3 は複雑な式なので、static_assert( E1 && E2 && E3 )。
くのは冗長だ。同じ内容を二度書くのは間違いの元だ。
 このような場合、static_assert のオペランドをテンプレート引数に依存する。
```

にすると、constexpr if の条件に合うときにだけ発動する static\_assert が書け template < typename ... >

```
bool false_v = false ;

template < typename T >
void f()
{
    if constever ( F1 )
```

```
if constexpr ( E3 )
{
         static_assert( false_v<T> ) ;
}
```

このように false\_v を使うことで、static\_assert をテンプレート引数 T  $\ell$  せる。その結果、static\_assert の発動をテンプレートの実体化まで遅延されができる。

constexpr if は非テンプレートコードでも書くことができるが、その場合の if 文と同じだ。

### 3.14.5 constexpr if では解決できない問題

constexpr if は条件付きコンパイルではなく、条件付きテンプレート実行制なので、最初の問題の解決には使えない。たとえば以下のコードはエラーに

```
// do_true_thingの宣言
void do_true_thing();

// do_false_thingの宣言は存在しない
void f( bool runtime_value )
{
   if constexpr ( true )
       do_true_thing();
   else
       do_false_thing(); // エラー
}
```

理由は、名前 do\_false\_thing は非依存名なのでテンプレートの宣言時に角るからだ。

# 3.14.6 constexpr if で解決できる問題

constexpr if は依存名が関わる場合で、テンプレートの実体化がエラーに合に、実体化を抑制させることができる。

たとえば、特定の型に対して特別な操作をしたい場合

```
struct X
```

} ;

void f(T t)

第3章 C++17のコア言語の新機能

template < typename T >

```
int value{};
      // Tの型が X ならば特別な処理を行いたい
      if constexpr ( std::is_same<T, X>{} )
         value = t.get_value() ;
      }
      else
      {
         value = static_cast<int>(t) ;
      }
  }
もし constexpr if がなければ、T の型が X ではないときも t.get_value() とい
が実体化され、エラーとなる。
 再帰的なテンプレートの特殊化をやめさせたいとき
  // factorial<N>はNの階乗を返す
  template < std::size_t I >
  constexpr std::size_t factorial()
   {
      if constexpr ( I == 1 )
      { return 1 ; }
      else
      { return I * factorial<I-1>() ; }
  }
もし constexpr if がなければ、factorial<N-1> が永遠に実体化されコンパイプ
ループが停止しない。
```

### 3.15 初期化文付き条件文

O 1 17 つけ 夕舟立に知典ル立も記述ったフトニにかった

機能テストマクロは \_\_cpp\_if\_constexpr, 値は 201606。

```
if ( int x = 1; x)
      /*...*/ ;
  switch(int x = 1; x)
  {
     case 1 :
        /*... */;
  }
 これは、以下のコードと同じ意味になる。
  {
     int x = 1;
     if (x);
  }
  {
     int x = 1 ;
     switch( x )
        case 1 : ;
     }
  }
 なぜこのような機能が追加されたかというと、変数を宣言し、if 文の条件に
使い、if 文を実行後は変数を使用しない、というパターンは現実のコードで制
からだ。
```

void \* ptr = std::malloc(10) ;

```
第3章 C++17のコア言語の新機能
```

```
// これ以降 file は使わない
  auto int_ptr = std::make_unique<int>(42) ;
  if (ptr)
     // 処理
  // これ以降 int_ptr は使わない
 上記のコードには問題がある。これ以降変数は使わないが、変数自体は使える
らだ。
  auto ptr = std::make_unique<int>(42) ;
  if (ptr)
  {
     // 処理
  // これ以降 ptr は使わない
  // でも使える
  int value = *ptr ;
 変数を使えないようにするには、ブロックスコープで囲むことで、変数をスコー
から外してやればよい。
  {
     auto int_ptr = std::make_unique<int>(42) ;
     if (ptr)
     {
        // 処理
     // ptr は破棄される
  // これ以降 ptr は使わないし使えない
 このようなパターンは頻出するので、初期化文付きの条件文が追加された。
  if ( auto ptr = std::make_unique<int>(42) ; ptr )
     // 処理
  }
```

3.16 クラステンプレートのコンストラクターからの実施

# 3.16 クラステンプレートのコンストラクターからの実引数推り

C++17 ではクラステンプレートのコンストラクターの実引数からテンプ l 引数の推定が行えるようになった。

```
template < typename T >
struct X
{
      X( T t ) { }
};
int main()
{
      X x1(0) ; // X<int>
      X x2(0.0) ; // X<double>
      X x3("hello") ; // X<char const *>
}
```

これは関数テンプレートが実引数からテンプレート実引数の推定が行えるじだ。

```
template < typename T >
void f( T t ) { }

int main()
{
    f( 0 ) ; // f<int>
    f( 0.0 ) ; // f<double>
    f( "hello" ) ; // f<char const *>
}
```

#### 3.16.1 推定ガイド

クラステンプレートのコンストラクターからの実引数は便利だが、クラスのトラクターはクラステンプレートのテンプレートパラメーターに一致しない場る。そのような場合はそのままでは実引数推定ができない。

```
// コンテナー風のクラス
template < typename T >
```

template < typename T >

std::vector<T> c ;

class Container

{

```
std::vector<T> c ;
  public :
      // 初期化にイテレーターのペアを取る
      // Iterator は T ではない
      // Tは推定できない
      template < typename Iterator >
      Container( Iterator first, Iterator last )
         : c(first, last)
      { }
  } ;
  int main()
  {
      int a[] = \{1,2,3,4,5\};
      // エラー
      // Tを推定できない
      Container c( std::begin(a), std::end(a) );
  }
 このため、C++17には推定ガイドという機能が提供されている。
  テンプレート名(引数リスト) -> テンプレート id;
 これを使うと、以下のように書ける。
  template < typename Iterator >
  Container( Iterator, Iterator )
  -> Container< typename std::iterator_traits< Iterator >::value_type
 C++ コンパイラーはこの推定ガイドを使って、Container<T>::Contain
Iterator, Iterator)からは、Tを std::iterator_traits<Iterator>::value_t
として推定すればいいのだと判断できる。
 たとえば、初期化リストに対応するには以下のように書く。
```

```
Container(std::initializer_list<T> init)
: c(init)
{}
};

template < typename T >
Container(std::initializer_list<T>) -> Container<T>;

int main()
{
    Container c = { 1,2,3,4,5 };
}

C++ コンパイラーはこの推定ガイドから、Container<T>::Container
initializer_list<T>)の場合はTをTとして推定すればよいことがわかる。
```

# **3.17** auto による非型テンプレートパラメーターの宣言

機能テストマクロは \_\_cpp\_deduction\_guides, 値は 201606。

C++17 では非型テンプレートパラメーターの宣言に auto を使うことがでうになった。

```
template < auto x >
struct X { } ;

void f() { }

int main()
{
    X<0> x1;
    X<01> x2;
    X<&f> x3;
}
```

これはC++14までであれば、以下のように書かなければならなかった。

```
template < typename T, T x >
```

# **3.18** using 属性名前空間

C++17 では、属性名前空間に using ディレクティブのような記述ができるよなった。

```
// [[extention::foo, extention::bar]] と同じ
[[using extention: foo, bar]] int x;
```

属性トークンには、属性名前空間を付けることができる。これにより、独自拡張 属性トークンの名前の衝突を避けることができる。

たとえば、ある C++ コンパイラーには独自拡張として foo, bar という属性 クンがあり、別の C++ コンパイラーも同じく独自拡張として foo, bar という k-2 トークンを持っているが、それぞれ意味が違っている場合、コードの意味も違っなう。

```
[[ foo, bar ]] int x;
```

このため、C++ には属性名前空間という文法が用意されている。注意深い C コンパイラーは独自拡張の属性トークンには属性名前空間を設定しているころう。

```
[[ extention::foo, extention::bar ]] int x ;
```

問題は、これをいちいち記述するのは面倒だということだ。

C++17 では、using 属性名前空間という機能により、using ディレクティブのうな名前空間の省略が可能になった。文法は using ディレクティブと似ていて、原の中で using name: ... と書くことで、コロンに続く属性トークンに、属性名前

# 3.19 非標準属性の無視

C++17では、非標準の属性トークンは無視される。

```
// OK、無視される
[[wefapiaofeaofjaopfij]] int x ;
```

属性は C++ コンパイラーによる独自拡張を C++ の規格に準拠する形で利加するための機能だ。その属性のためにコンパイルエラーになった場合、けてプリプロセッサーを使うか、わずらわしさから独自の文法が使われてしまっためこの機能は必須だ。

# 3.20 構造化束縛

C++17 で追加された構造化束縛は多値を分解して受け取るための変数宣法だ。

```
int main()
{
    int a[] = { 1,2,3 } ;
    auto [b,c,d] = a ;

    // b == 1
    // c == 2
    // d == 3
}
```

C++ では、さまざまな方法で多値を扱うことができる。たとえば配列、tuple, pair だ。

```
int a[] = { 1,2,3 } ;
struct B
{
    int a ;
    double b ;
    std::string c ;
} ;
```

```
std::tuple< int, double, std::string > c { 1, 2.0, "hello" } ;
   std::pair< int, int > d{ 1, 2 } ;
 C++ の関数は配列以外の多値を返すことができる。
   std::tuple< int, double, std::string > f()
      return { 1, 2.0, "hello" } ;
   }
 多値を受け取るには、これまでは多値を固まりとして受け取るか、ライブラリ<sup>*</sup>
解して受け取るしかなかった。
 多値を固まりで受け取るには以下のように書く。
   std::tuple< int, double, std::string > f()
   {
      return { 1, 2.0, "hello" };
   }
   int main()
      auto result = f() ;
      std::cout << std::get<0>(result) << '\n'</pre>
          << std::get<1>(result) << '\n'
          << std::get<2>(result) << std::endl ;
   }
 多値をライブラリで受け取るには以下のように書く。
   std::tuple< int, double, std::string > f()
      return { 1, 2.0, "hello" } ;
   }
   int main()
      int a ;
      double b ;
```

```
std::tie( a, b, c ) = f();
      std::cout << a << '\n'
          << b << '\n'
          << c << std::endl ;
   }
 構造化束縛を使うと、以下のように書ける。
   std::tuple< int, double, std::string > f()
   {
      return { 1, 2.0, "hello" } ;
   }
   int main()
      auto [a, b, c] = f();
      std::cout << a << '\n'
          << b << '\n'
          << c << std::endl ;
   }
 変数の型はそれぞれ対応する多値の型になる。この場合、a, b, c はそれぞ
double, std::string 型になる。
 tuple だけではなく、pair も使える。
   int main()
   {
      std::pair<int, int> p( 1, 2 );
      auto [a,b] = p;
      // a は int 型、値は 1
      // bは int 型、値は 2
   }
 構造化束縛は if 文と switch 文、for 文でも使える。
   int main()
```

構造化束縛はクラスにも使える。

```
int expr[] = \{1,2,3\};
       if ( auto[a,b,c] = expr ; a )
       { }
       switch( auto[a,b,c] = expr ; a )
       for ( auto[a,b,c] = expr ; false ; )
       { }
   }
 構造化束縛は range-based for 文にも使える。
   int main()
   {
       std::map< std::string, std::string > translation_table
           {"dog", "犬"},
           {"cat", "猫"},
           {"answer", "42"}
       } ;
       for ( auto [key, value] : translation_table )
       {
           std::cout<<
               "key="<< key <<
               ", value=" << value << ^{\prime}n';
       }
   }
  これは、map の要素型 std::pair<const std::string, std::string> を構造
縛 [key, value] で受けている。
 構造化束縛は配列にも使える。
   int main()
   {
       int values[] = \{1,2,3\};
       auto [a,b,c] = values ;
   }
```

```
{
      int a ;
      double d;
      std::string c ;
   } ;
   int main()
   {
      Values values{ 1, 2.0, "hello" } ;
      auto [a,b,c] = values ;
   }
 構造化束縛でクラスを使う場合は、非 static データメンバーはすべて 1つ
スの public なメンバーでなければならない。
 構造化束縛は constexpr にはできない。
   int main()
   {
      constexpr int expr[] = { 1,2 };
      // エラー
      constexpr auto [a,b] = expr ;
   }
```

## 3.20.1 超上級者向け解説

構造化束縛は、変数の宣言のうち、構造化束縛宣言(structured binding decl に分類される文法で記述する。構造化束縛宣言となる宣言は、単純宣言( declaration)と for-range 宣言(for-range-declaration)のうち、[識別子リ

#### 単純宣言:

あるものだ。

```
属性 auto CV 修飾子(省略可) リファレンス修飾子(省略可)
[ 識別子リスト ] 初期化子 ;
```

#### for-range 宣言:

属性 auto CV 修飾子(省略可) リファレンス修飾子(省略可)

```
[ 識別子リスト ];
```

#### コンマで区切られた識別子

```
初期化子:
     = 式
     { 式 }
     (式)
以下は単純宣言のコード例だ。
 int main()
 {
     int e1[] = \{1,2,3\};
     struct { int a,b,c ; } e2{1,2,3} ;
     auto e3 = std::make_tuple(1,2,3) ;
     // "= 式"の例
     auto [a,b,c] = e1 ;
     auto [d,e,f] = e2;
     auto [g,h,i] = e3;
     // "{式}", "(式)"の例
     auto [j,k,l]{e1} ;
     auto [m,n,o](e1);
     // CV 修飾子とリファレンス修飾子を使う例
     auto const & [p,q,r] = e1;
 }
以下は for-range 宣言の例だ。
 int main()
 {
     std::pair<int, int> pairs[] = { {1,2}, {3,4}, {5,6} } ;
     for ( auto [a, b] : pairs )
     {
        std::cout << a << ", " << b << '\n';
     }
 }
```

## 3.20.2 構造化束縛宣言の仕様

構造化束縛の構造化束縛宣言は以下のように解釈される。

構造化束縛宣言によって宣言される変数の数は、初期化子の多値の数と一致なければならない。

```
int main()
{
    // 2個の値を持つ
    int expr[] = {1,2};

    // エラー、変数が少なすぎる
    auto[a] = expr;
    // エラー、変数が多すぎる
    auto[b,c,d] = expr;
}
```

構造化束縛宣言で宣言されるそれぞれの変数名について、記述されたとま 性、CV修飾子、リファレンス修飾子の変数が宣言される。

# 3.20.3 初期化子の型が配列の場合

初期化子が配列の場合、それぞれの変数はそれぞれの配列の要素で初期化さ リファレンス修飾子がない場合、それぞれの変数はコピー初期化される。

```
int main()
{
    int expr[3] = {1,2,3};
    auto [a,b,c] = expr;
}

これは、以下と同じ意味になる。
int main()
{
    int expr[3] = {1,2,3};
    int a = expr[0];
    int b = expr[1];
    int c = expr[2];
```

int main()

## 第3章 C++17のコア言語の新機能

int expr[3] = {1,2,3};
auto & [a,b,c] = expr;
auto && [d,e,f] = expr;

リファレンス修飾子がある場合、変数はリファレンスとなる。

```
}
 これは、以下と同じ意味になる。
  int main()
  {
      int expr[3] = \{1,2,3\};
      int & a = expr[0];
      int & b = expr[1] ;
      int & c = expr[2] ;
      int && d = expr[0] ;
      int && e = expr[1] ;
      int && f = expr[2] ;
  }
 もし、変数の型が配列の場合、配列の要素はそれぞれ対応する配列の要素で初期
される。
   int main()
      int expr[][2] = \{\{1,2\},\{1,2\}\}\ ;
      auto [a,b] = expr ;
  }
 これは、以下と同じ意味になる。
  int main()
      int expr[][2] = \{\{1,2\},\{1,2\}\}\ ;
      int a[2] = { expr[0][0], expr[0][1] };
      int b[2] = { expr[1][0], expr[1][1] };
```

# 3.20.4 初期化子の型が配列ではなく、std::tuple\_size<E> が完全形の名前 場合

構造化束縛宣言の初期化子の型 E が配列ではない場合で、 $std::tuple\_siz$  完全形の名前である場合、構造化束縛宣言の初期化子の型を E, その値を E 構造化束縛宣言で宣言される E つ目の変数を E つり、E つり、E つり、E つり、E つり、E つり、E つり、E かいたされていくインデックスを E とする。

std::tuple\_size<E>::value は整数のコンパイル時定数式で、その値は初期値の数でなければならない。

```
int main()
{
    // std::tuple< int, int, int >
    auto e = std::make_tuple( 1, 2, 3 ) ;
    auto [a,b,c] = e ;

    // std::tuple_size<decltype(e)>::size は 3
}
```

それぞれの値を取得するために、非修飾名 get が型 E のクラススコープからる。get が見つかった場合、それぞれの変数の初期化子は e.get<i>() となる

```
auto [a,b,c] = e ;
```

という構造化束縛宣言は、以下の意味になる。

```
type a = e.get<0>() ;
type b = e.get<1>() ;
type c = e.get<2>() ;
```

そのような get の宣言が見つからない場合、初期化子は get<i>(e) となる。合、get は連想名前空間から探される。通常の非修飾名前検索は行われない。

```
// ただし通常の非修飾名前検索は行われない
type a = get<0>(e);
type b = get<1>(e);
type c = get<2>(e);
```

構造化束縛宣言で宣言される変数の型は以下のように決定される。 変数の型 type は "std::tuple\_element<i, E>::type"となる。

```
std::tuple_element<1, E>::type b = get<1>(e) ;
   std::tuple_element<2, E>::type c = get<2>(e) ;
 以下のコードは、
   int main()
   {
       auto e = std::make_tuple( 1, 2, 3 );
       auto [a,b,c] = e;
   }
以下とほぼ同等の意味になる。
   int main()
   {
       auto e = std::make_tuple( 1, 2, 3 );
       using E = decltype(e) ;
       std::tuple_element<0, E>::type & a = std::get<0>(e) ;
       std::tuple_element<1, E>::type & b = std::get<1>(e) ;
       std::tuple_element<2, E>::type & c = std::get<2>(e) ;
   }
 以下のコードは、
   int main()
       auto e = std::make_tuple( 1, 2, 3 );
       auto && [a,b,c] = std::move(e) ;
   }
以下のような意味になる。
   int main()
       auto e = std::make_tuple( 1, 2, 3 );
       using E = decltype(e) ;
       std::tuple_element<0, E>::type && a = std::get<0>(std::move(e))
       std::tuple_element<1, E>::type && b = std::get<1>(std::move(e))
```

}

## 3.20.5 上記以外の場合

上記以外の場合、構造化束縛宣言の初期化子の型 E はクラス型で、すっ static データメンバーは public の直接のメンバーであるか、あるいは単一の はない public 基本クラスのメンバーである必要がある。E に匿名 union メン あってはならない。

以下は型Eとして適切なクラスの例である。

```
struct A
    int a, b, c ;
 } ;
 struct B : A { } ;
以下は型Eとして不適切なクラスの例である。
 // public 以外の非 static データメンバーがある
 struct A
 public :
    int a ;
 private :
    int b;
 };
 struct B
    int a ;
 // クラスにも基本クラスにも非static データメンバーがある
 struct C : B
    int b ;
 };
 // 匿名 union メンバーがある
```

```
{
      union
          int i ;
          double d ;
      }
  } ;
 型 E の非 static データメンバーは宣言された順番で多値として認識される。
 以下のコードは、
   int main()
   {
      struct { int x, y, z ; } e\{1,2,3\} ;
      auto [a,b,c] = e;
   }
以下のコードと意味的に等しい。
   int main()
      struct { int x, y, z ; } e\{1,2,3\} ;
      int a = e.x ;
      int b = e.y ;
      int c = e.z ;
   }
 構造化束縛はビットフィールドに対応している。
   struct S
   {
      int x : 2 ;
      int y : 4 ;
  } ;
   int main()
   {
      S = \{1,3\};
      auto [a,b] = e;
```

機能テストマクロは \_\_cpp\_structured\_bindings, 値は 201606。

# 3.21 inline 变数

C++17 では変数に inline キーワードを指定できるようになった。

```
inline int variable ;
```

このような変数を inline 変数と呼ぶ。その意味は inline 関数と同じだ。

## 3.21.1 inline の歴史的な意味

今は昔、本書執筆から 30 年以上は昔に、inline キーワードが C++ に追加inline の現在の意味は誤解されている。

inline 関数の意味は、「関数を強制的にインライン展開させるための機能ない。

大事なことなのでもう一度書くが、inline 関数の意味は、「関数を強制的にイン展開させるための機能」ではない。

確かに、かつて inline 関数の意味は、関数を強制的にインライン展開させの機能だった。

関数のインライン展開とは、たとえば以下のようなコードがあったとき、

```
int min( int a, int b )
{ return a < b ? a : b ; }

int main()
{
   int a, b ;
   std::cin >> a >> b ;

   // aとbのうち小さい方を選ぶ
   int value = min( a, b ) ;
}
```

この関数 min は十分に小さく、関数呼び出しのコストは無視できないオーバーになるため、以下のような最適化が考えられる。

```
int main()
{
   int a, b :
```

```
int value = a < b ? a : b ;
}</pre>
```

このように関数の中身を展開することを、関数のインライン展開という。

人間が関数のインライン展開を手で行うのは面倒だ。それにコードが読みにく "min(a,b)"と "a<b?a:b" のどちらが読みやすいだろうか。

幸い、C++ コンパイラーはインライン展開を自動的に行えるので人間が苦労 必要はない。

インライン展開は万能の最適化ではない。インライン展開をすると逆に遅くなっ 合もある。

たとえば、ある関数をコンパイルした結果のコードサイズが 1K バイトあった。 て、その関数を呼んでいる箇所がプログラム中に 1000 件ある場合、プログラムのサイズは 1M バイト増える。コードサイズが増えるということは、CPU のキャシュを圧迫する。

たとえば、ある関数の実行時間が関数呼び出しの実行時間に比べて桁違いに長いき、関数呼び出しのコストを削減するのは意味がない。

したがって関数のインライン展開という最適化を適用すべきかどうかを決定する は、関数のコードサイズが十分に小さいとき、関数の実行時間が十分に短いとき、 イトなループの中など、さまざまな条件を考慮しなければならない。

昔のコンパイラー技術が未熟だった時代の C++ コンパイラーは関数をインラー展開するべきかどうかの判断ができなかった。そのため inline キーワードが追加れた。インライン展開してほしい関数を inline 関数にすることで、コンパイラーその関数がインライン展開するべき関数だと認識する。

#### 3.21.2 現代の inline の意味

現代では、コンパイラー技術の発展により C++ コンパイラーは十分に賢くなので、関数をインライン展開させる目的で inline キーワードを使う必要はない。際、現代の C++ コンパイラーでは inline キーワードはインライン展開を強制

い。関数をインライン展開すべきかどうかはコンパイラーが判断できる。

inline キーワードにはインライン展開以外に、もう1つの意味がある。ODR (ODefinition Rule、定義は1つの原則) の回避だ。

C++ では、定義はプログラム中に1つしか書くことができない。

void f() ; // OK、宣言 void f() ; // OK、再宣言

```
void f() { } // OK、定義
```

```
void f() { } // エラー、再定義
```

通常は、関数を使う場合には宣言だけを書いて使う。定義はどこか1つの に書いておけばよい。

```
// f.h
void f();
// f.cpp
void f() { }
// main.cpp
#include "f.h"
int main()
{
    f();
}
```

しかし、関数のインライン展開をするには、コンパイラーの実装上の都合っの定義が同じ翻訳単位になければならない。

```
inline void f();
int main()
{
    // エラー、定義がない
    f();
}
```

しかし、翻訳単位ごとに定義すると、定義が重複して ODR に違反する。 C++ ではこの問題を解決するために、inline 関数は定義が同一であれば、 翻訳単位で定義されてもよいことにしている。つまり ODR に違反しない。

```
// a.cpp
```

```
void a()
{
    f();
}

// b.cpp

// OK, inline 関数
inline void f() { }

void b()
{
    f();
}
```

これは例のために同一の inline 関数を直接記述しているが、inline 関数は定同一性を保証させるため、通常はヘッダーファイルに書いて #include して使う。

# 3.21.3 inline 変数の意味

inline 変数は、ODR に違反せず変数の定義の重複を認める。同じ名前の inl 変数は同じ変数を指す。

```
// a.cpp
inline int data;

void a() { ++data ; }

// b.cpp
inline int data;

void b() { ++data ; }

// main.cpp
inline int data;
```

int main()

a();

```
b();
     data ; // 2
  }
 この例で関数 a, b の中の変数 data は同じ変数を指している。変数 data は
ストレージ上に構築された変数なのでプログラムの開始時にゼロで初期化さ
回インクリメントされるので値は2となる。
 これにより、クラスの非 static データメンバーの定義を書かなくてすむ
なる。
 C++17 以前の C++ では、以下のように書かなければならなかったが、
  // S.h
  struct S
     static int data;
  } ;
  // S.cpp
  int S::data ;
C++17では、以下のように書けばよい。
  // S.h
  struct S
     inline static int data ;
  } ;
 S.cpp に変数 S::data の定義を書く必要はない。
 機能テストマクロは __cpp_inline_variables, 値は 201606。
```

# 3.22 可変長 using 宣言

この機能は超上級者向けだ。

O : 17 つは ・ ウラカコンコの区切ファレギのキフトミにわしも

```
int x, y;
   int main()
      using ::x, ::y ;
  これは、C++14で
   using ::x ;
   using ::y;
と書くのと等しい。
 C++17では、using 宣言でパック展開ができるようになった。この機能に正
名前は付いていないが、可変長 using 宣言(Variadic using declaration)と呼ぶる
わかりやすい。
   template < typename ... Types >
   struct S : Types ...
      using Types::operator() ...;
      void operator () ( long ) { }
   } ;
   struct A
      void operator () ( int ) { }
   } ;
   struct B
      void operator () ( double ) { }
   } ;
   int main()
   {
      S<A, B>s;
      s(0); // A::operator()
       s(OL) ; // S::operator()
       g(0,0) \cdot // R \cdot \cdot operator()
```

3.23 std::byte: バイトを表現

機能テストマクロは \_\_cpp\_variadic\_using, 値は 201611。

# **3.23** std::byte: バイトを表現する型

C++17では、バイトを表現する型が入った。ライブラリでもあるのだがこで特別な型として扱われている。

バイトとは C++ のメモリーモデルにおけるストレージの単位で、C++ ルユニークなアドレスが付与される最小単位だ。C++ の規格はいまだに 1 バケ体的に何ビットであるのかを規定していない。これは過去にバイトのサイズがトではないアーキテクチャーが存在したためだ。

バイトのビット数は <climits> で定義されているプリプロセッサー CHAR BIT で知ることができる。

C++17 では、1 バイトは UTF-8 の 8 ビットの 1 コード単位をすべて表現と規定している。

std::byte 型は、生のバイト列を表すための型として使うことができる。タイトを表すには unsigned char 型が慣習的に使われてきたが、std::byte 型パイトを表現する型として、新たに C++17 で追加された。複数バイトが遅ストレージは、unsigned char の配列型、もしくは std::byte の配列型としてきる

std::byte 型は、<cstddef> で以下のように定義されている。

```
namespace std
{
   enum class byte : unsigned char { } ;
}
```

std::byte はライブラリとして scoped enum 型で定義されている。これに。の整数型からの暗黙の型変換が行えない。

値 0x12 の std::byte 型の変数は以下のように定義できる。

```
int main()
{
    std::byte b{0x12} ;
}
```

std::byte型の値がほしい場合は、以下のように書くことができる。

int main()

}

## 第3章 C++17のコア言語の新機能

std::byte b{};

```
b = std::byte(1);
     b = std::byte{ 1 } ;
     b = static_cast< std::byte >( 1 ) ;
     b = static_cast< std::byte >( 0b11110000 ) ;
  }
 std::byte 型は他の数値型からは暗黙に型変換できない。これによりうっかり
を取り違えてバイト型と他の型を演算してしまうことを防ぐことができる。
  int main()
  {
     // エラー、() による初期化はint 型からの暗黙の変換が入る
     std::byte b1(1);
     // エラー、=による初期化はint型からの暗黙の変換が入る
     std::byte b2 = 1 ;
     std::byte b{} ;
     // エラー、operator =による int 型の代入は暗黙の変換が入る
     b = 1;
     // エラー、operator =による double 型の代入は暗黙の変換が入る
     b = 1.0;
  }
 std::byte 型は {} によって初期化するが、縮小変換を禁止するルールによ
std::byte型が表現できる値の範囲でなければエラーとなる。
 たとえば、今 std::byte が 8 ビットで、最小値が 0、最大値が 255 の環境だとす
  int main()
  {
     // エラー、表現できる値の範囲ではない
     std::byte b1{-1};
     // エラー、表現できる値の範囲ではない
     std::byte b2{256};
```

std::byte は内部のストレージをバイト単位でアクセスできるようにするため、 格上 char と同じような配慮が行われている。

3.23 std::byte: バイトを表現

```
int main()
{
   int x = 42;

   std::byte * rep = reinterpret_cast< std::byte * >(&x);
}
```

std::byte は一部の演算子がオーバーロードされているので、通常の整数型に使うことができる。ただし、バイトをビット列演算するのに使う一部の流けだ。

具体的には、以下に示すシフト、ビット OR, ビット列 AND, ビット列 XOト列 NOT だ。

```
<<= <<
>>= >>
|= |
&= &
^= ^
```

四則演算などの演算子はサポートしていない。

std::byte は std::to\_intenger<IntType>(std::byte) により、IntType 型に変換できる。

```
int main()
{
    std::byte b{42} ;

    // int 型の値は 42
    auto i = std::to_integer<int>(b) ;
}
```

# 第4章

# **C++17** の型安全な値を 格納するライブラリ

C++17 では型安全に値を格納するライブラリとして、variant, any, opti 追加された。

# 4.1 variant: 型安全な union

// false を返す

#### 4.1.1 使い方

ヘッダーファイル <variant> で定義されている variant は、型安全な uni て使うことができる。

```
第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ
```

```
// true を返す
bool has_string = std::holds_alternative<std::string> ( x );

// 入っている値を得る
// "hello"
std::string str = std::get<std::string>(x);
}
```

#### 4.1.2 型非安全な古典的 union

C++ が従来から持っている古典的な union は、複数の型のいずれか 1 つだけのを格納する型だ。 union のサイズはデータメンバーのいずれかの型を 1 つ表現できたけのサイズとなる。

```
union U
   {
       int i;
       double d ;
       std::string s ;
   } ;
   struct S
       int i ;
       double d;
       std::string s ;
   }
  この場合、sizeof(U) は
     sizeof(U) = max{sizeof(int), sizeof(double), sizeof(std::string)}
                + パディングなど
になる。sizeof(S)は、
      sizeof(S) = sizeof(int) + sizeof(double) + sizeof(std::string)
```

になる。

union はメモリー効率がよい。union は variant と違い型非安全だ。どの型の化保持しているかという情報は保持しないので、ユーザーが適切に管理しなければ

+ パディングなど

4.1 variant: 型安全发

```
union U
{
   int i;
   double d ;
   std::string s ;
   // コンストラクター
   // int 型をデフォルト初期化する
   U() : i{} { }
   // デストラクター
   // 何もしない。オブジェクトの破棄はユーザーの責任に任せる
   ~U() { }
} ;
// デストラクター呼び出し
template < typename T >
void destruct ( T & x )
   x.~T();
}
int main()
{
   Uu;
   // 基本型はそのまま代入できる
   // 破棄も考えなくてよい
   u.i = 0;
   u.d = 0.0;
   // 非トリビアルなコンストラクターを持つ型
   // placement new が必要
   new(&u.s) std::string("hello") ;
   // ユーザーはどの型を入れたか別に管理しておく必要がある
   bool has_int = false ;
   bool has_string = true ;
   std::cout << u.s << '\n';
```

第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

```
// 破棄が必要
destruct( u.s ) ;
}
```

このようなコードは書きたくない。variant を使えば、このような面倒で冗分コードを書かずに、型安全に union と同等機能を実現できる。

## 4.1.3 variant の宣言

variant はテンプレート実引数で保持したい型を与える。

```
std::variant< char, short, int, long > v1;
std::variant< int, double, std::string > v2;
std::variant< std::vector<int>, std::list<int> > v3;
```

#### **4.1.4** variant の初期化

#### デフォルト初期化

variant はデフォルト構築すると、最初に与えた型の値をデフォルト構築して付する。

```
// int
std::variant< int, double > v1 ;
// double
std::variant< double, int > v2 ;
```

variant にデフォルト構築できない型を最初に与えると、variant もデフォル 築できない。

```
// デフォルト構築できない型
struct non_default_constructible
{
     non_default_constructible() = delete;
};

// エラー
// デフォルト構築できない
std::variant< non_default_constructible > v;
```

デフォルト構築できない型だけを保持する variant をデフォルト構築するためは、最初の型をデフォルト構築可能な型にすればよい。

struct B { B() = delete ; } ;
struct C { C() = delete ; } ;

4.1 variant: 型安全力

```
struct Empty { } ;
  int main()
  {
     // OK、Empty を保持
     std::variant< Empty, A, B, C > v ;
  }
 このような場合に、Empty のようなクラスをわざわざ独自に定義するのは正
で、標準ライブラリには std::monostate クラスが以下のように定義されてい
  namespace std {
     struct monostate { } ;
  }
 したがって、上の例は以下のように書ける。
  // OK、std::monostate を保持
  std::variant< std::monostate, A, B, C > v ;
 std::monostate は variant の最初のテンプレート実引数として使うことで
をデフォルト構築可能にするための型だ。それ以上の意味はない。
コピー初期化
 variant に同じ型の variant を渡すと、コピー/ムーブする。
  int main()
     std::variant<int> a ;
     // コピー
     std::variant<int> b ( a ) ;
  }
```

#### variant のコンストラクターに値を渡した場合

variant のコンストラクターに上記以外の値を渡した場合、variant のテント実引数に指定した型の中から、オーバーロード解決により最適な型が選ばれ

#### 第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

```
using val = std::variant< int, double, std::string > ;

int main()
{
    // int
    val a(42);
    // double
    val b(0.0);

    // std::string
    // char const *型は std::string 型に変換される
    val c("hello");

    // int
    // char 型は Integral promotionにより int 型に優先的に変換される
    val d('a');
}
```

# in\_place\_type による emplace 構築

variant のコンストラクターの第一引数に std::in\_place\_type<T> を渡すこるより、T型の要素を構築するためにT型のコンストラクターに渡す実引数を指定する。

ほとんどの型はコピーかムーブができる。

しかし、もし型 X がコピーもムーブもできない型だったとしたら、上記のコー

動かない。

X( int, int, int ) { }
X( X const & ) = delete ;

4.1 variant: 型安全为

```
X(X \&\&) = delete;
  } ;
  int main()
     // X を構築
     X x(1, 2, 3);
     // エラー、X はコピーできない
     std::variant<X> v( x );
  }
 このような場合、variant が内部で X を構築する際に、構築に必要なこ
ラクターの実引数を渡して、variant に X を構築させる必要がある。そ
に std::in_place_type<T> が使える。T に構築したい型を指定して第一引数
二引数以降をTのコンストラクターに渡す値にする。
  struct X
     X( int, int, int ) { }
     X( X const & ) = delete ;
     X(X \&\&) = delete;
  } ;
```

# 4.1.5 variant の破棄

int main()

{

}

variant のデストラクターは、そのときに保持している値を適切に破棄して

std::variant<X> v( std::in\_place\_type<X>, 1, 2, 3 );

```
int main()
{
    std::vector<int> v ;
    std::list<int> l ;
```

// X の値を構築して保持

#### 第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

```
std::variant<
    std::vector<int>,
    std::list<int>,
    std::deque<int>
> val;

val = v;
val = l;
val = d;

// variant のデストラクターは deque<int>を破棄する
}

variant のユーザーは何もする必要がない。
```

# 4.1.6 variant の代入

variant の代入はとても自然だ。variant を渡せばコピーするし、値を渡せばスパーロード解決に従って適切な型の値を保持する。

#### **4.1.7** variant $\mathcal{O}$ emplace

variant は emplace をサポートしている。variant の場合、構築すべき型を知る必要があるので、emplace<T> の T で構築すべき型を指定する。

```
struct X
{
     X( int, int, int ) { }
     X( X const & ) = delete ;
     X( X && ) = delete ;
};
int main()
{
    std::variant<std::monostate, X, std::string> v ;

     // X を構築
     v.emplace<X>( 1, 2, 3 ) ;
     // std::string を構築
     v.emplace< std::string >( "hello" ) ;
}
```

4.1 variant: 型安全发

#### 4.1.8 variant に値が入っているかどうかの確認

### valueless\_by\_exception メンバー関数

```
constexpr bool valueless_by_exception() const noexcept;
```

valueless\_by\_exception メンバー関数は、variant が値を保持している場合を返す。

variant はどの値も保持しない状態になることがある。たとえば、std::stコピーにあたって動的なメモリー確保を行うかもしれない。variant が std:をコピーする際に、動的メモリー確保に失敗した場合、コピーは失敗する。な

ば、variant は別の型の値を構築する前に、以前の値を破棄しなければならな

だ。variant は値を持たない状態になりうる。

```
int main()
{
    std::variant< int, std::string > v;
    try {
        std::string s("hello");
        v = s; // 動的メモリー確保が発生するかもしれない
    } catch( std::bad_alloc e )
    {
            // 動的メモリー確保が失敗するかもしれない
    }
    // 動的メモリー確保の失敗により
```

第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

variant は swap に対応している。

int main()

```
bool b = v.valueless_by_exception();
   }
index メンバー関数
   constexpr size_t index() const noexcept;
 index メンバー関数は、variant に指定したテンプレート実引数のうち、F
variant が保持している値の型を 0 ベースのインデックスで返す。
   int main()
      std::variant< int, double, std::string > v ;
      auto v0 = v.index(); // 0
      v = 0.0;
      auto v1 = v.index(); // 1
      v = "hello" ;
      auto v2 = v.index(); // 2
   }
 もし variant が値を保持しない場合、つまり valueless_by_exception() が t
を返す場合は、std::variant_npos を返す。
   // variant が値を持っているかどうか確認する関数
   template < typename ... Types >
   void has_value( std::variant< Types ... > && v )
   {
      return v.index() != std::variant_npos ;
      // これでもいい
      // return v.valueless_by_exception() == false ;
   }
 std::variant_npos の値は -1 だ。
4.1.9 swap
```

4.1 variant: 型安全发

```
a.swap(b);
std::swap(a, b);
}
```

#### 4.1.10 variant\_size<T>: variant が保持できる型の数を取得

std::variant\_size<T>は、T に variant 型を渡すと、variant が保持できるを返してくれる。

```
using t1 = std::variant<char>;
  using t2 = std::variant<char, short>;
  using t3 = std::variant<char, short, int>;
  // 1
  constexpr std::size_t t1_size = std::variant_size<t1>::size ;
  constexpr std::size_t t2_size = std::variant_size<t2>::size ;
  constexpr std::size_t t2_size = std::variant_size<t3>::size ;
 variant_size は integral_constant を基本クラスに持つクラスなので、ラ
ト構築した結果をユーザー定義変換することでも値を取り出せる。
  using type = std::variant<char, short, int>;
  constexpr std::size_t size = std::variant_size<type>{} ;
 variant_size を以下のようにラップした変数テンプレートも用意されてい
  template <class T>
      inline constexpr size_t variant_size_v = variant_size<T>::va
 これを使えば、以下のようにも書ける。
  using type = std::variant<char, short, int>;
  constexpr std::size_t size = std::variant_size_v<type> ;
```

第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

## **4.1.11** variant\_alternative<I, T>: インデックスから型を返す

using type = std::variant< char, short, int > ;

std::variant\_alternative<I, T> は T 型の variant の保持できる型のうち、目の型をネストされた型名 type で返す。

```
// char
   using t0 = std::variant_alternative< 0, type >::type ;
   // short
   using t1 = std::variant_alternative< 1, type >::type ;
   // int
   using t2 = std::variant_alternative< 2, type >::type ;
 variant_alternative_t というテンプレートエイリアスが以下のように定義され
いる。
   template <size_t I, class T>
      using variant_alternative_t
          = typename variant_alternative<I, T>::type ;
 これを使えば、以下のようにも書ける。
   using type = std::variant< char, short, int > ;
   // char
   using t0 = std::variant_alternative_t< 0, type > ;
   using t1 = std::variant_alternative_t< 1, type > ;
   // int
   using t2 = std::variant_alternative_t< 2, type > ;
```

# **4.1.12 holds\_alternative: variant** が指定した型の値を保持しているかどうな確認

holds\_alternative<T>(v) は、variant vがT型の値を保持しているかどうかなする。保持しているのであれば true を、そうでなければ false を返す。

```
{ // int 刑の値を構築
```

int main()

// true

```
4.1 variant: 型安全な
```

```
bool has_int = std::holds_alternative<int>(v) ;
      // false
      bool has_double = std::holds_alternative<double>(v) ;
   }
 型 T は実引数に与えられた variant が保持できる型でなければならない。
ようなコードはエラーとなる。
   int main()
   {
      std::variant< int > v ;
      // エラー
      std::holds_alternative<double>(v) ;
   }
4.1.13 get<l>(v): インデックスから値の取得
 get<I>(v) は、variant v の型のインデックスから I 番目の型の値を返す
デックスは0ベースだ。
   int main()
   {
      // 0: int
      // 1: double
      // 2: std::string
      std::variant< int, double, std::string > v(42) ;
      // int, 42
      auto a = std::get<0>(v);
      v = 3.14;
      // double, 3.14
      auto b = std::get<1>(v);
      v = "hello";
      // std::string, "hello"
```

auto c = std::get<2>(v);

// int &&

}

第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

Iがインデックスの範囲を超えているとエラーとなる。

```
int main()
      // インデックスは 0, 1, 2 まで
      std::variant< int, double, std::string > v ;
      // エラー、範囲外
      std::get<3>(v);
   }
 もし、variant が値を保持していない場合、つまり v.index()!= I の場合
std::bad_variant_access が throw される。
   int main()
      // int 型の値を保持
      std::variant< int, double > v( 42 );
      try {
         // double 型の値を要求
          auto d = std::get<1>(v);
      } catch ( std::bad_variant_access & e )
          // double は保持していなかった
   }
 get の実引数に渡す variant が lvalue の場合は、戻り値は lvalue リファレン
rvalue の場合は戻り値は rvalue リファレンスになる。
   int main()
   {
      std::variant< int > v ;
      // int &
      decltype(auto) a = std::get<0>(v) ;
```

decltype(auto) b = std::get<0>( std::move(v) ) ;

4.1 variant: 型安全为

get の実引数に渡す variant が CV 修飾されている場合、戻り値の型も実見 じく CV 修飾される。

```
int main()
{
    std::variant< int > const cv;
    std::variant< int > volatile vv;
    std::variant< int > const volatile cvv;

    // int const &
    decltype(auto) a = std::get<0>( cv );
    // int volatile &
    decltype(auto) b = std::get<0>( vv );
    // int const volatile &
    decltype(auto) c = std::get<0>( cvv );
}
```

## 4.1.14 get<T>(v):型から値の取得

get<T>(v) は、variant vの保有する型Tの値を返す。型Tの値を保持して場合、std::bad\_variant\_access が throw される。

```
int main()
{
    std::variant< int, double, std::string > v( 42 ) ;

    // int
    auto a = std::get<int>( v ) ;

    v = 3.14 ;
    // double
    auto b = std::get<double>( v ) ;

    v = "hello" ;
    // std::string
    auto c = std::get<std::string>( v ) ;
}
```

その他はすべて get<I> と同じ。

int main()

第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

## **4.1.15** get\_if: 値を保持している場合に取得

get\_if<I>(vp) と get\_if<T>(vp) は、variant へのポインター vp を実引数に取\*vp がインデックス I, もしくは型 T の値を保持している場合、その値へのポインを返す。

```
std::variant< int, double, std::string > v( 42 ) ;
      // int *
      auto a = std::get_if<int>( &v ) ;
      v = 3.14;
      // double *
      auto b = std::get_if<1>( &v ) ;
      v = "hello" ;
      // std::string
      auto c = std::get_if<2>( &v );
  }
 もし、vpが nullptr の場合、もしくは *vp が指定された値を保持していないが
は、nullptr を返す。
   int main()
   {
      // int 型の値を保持
      std::variant< int, double > v( 42 );
      // nullptr
      auto a = std::get_if<int>( nullptr ) ;
      // nullptr
      auto a = std::get_if<double>( &v ) ;
   }
```

4.1 variant: 型安全发

#### 4.1.16 variant の比較

variant は比較演算子がオーバーロードされているため比較できる。variaの比較は、一般のプログラマーは自然だと思う結果になるように実装されてい

#### 同一性の比較

variant の同一性の比較のためには、variant のテンプレート実引数に与え自分自身と比較可能でなければならない。

つまり、variant v, w に対して、式 get<i>(v) == get<i>(w) がすべての : て妥当でなければならない。

variant v,wの同一性の比較は、v == wの場合、以下のように行われる。

- 1. v.index() != w.index() ならば、false
- 2. それ以外の場合、v.value\_less\_by\_exception() ならば、true
- 3. それ以外の場合、get<i>(v) == get<i>(w)。 ただし i は v.index()

2つの variant が別の型を保持している場合は等しくない。ともに値なしのあれば等しい。それ以外は保持している値同士が比較される。

たとえば operator == は以下のような実装になる。

template <class... Types>

```
constexpr bool
operator == (const variant<Types...>& v, const variant<Types...>
```

#### 第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

```
return false;
else if (v.valueless_by_exception())
return true;
else
return std::visit(
[](auto && a, auto && b){ return a == b; },
v, w);
}
operator != はこの逆だと考えてよい。
```

#### 大小比較

variant の大小の比較のためには、variant のテンプレート実引数に与える型に分自身と比較可能でなければならない。

つまり、operator < の場合、variant v, w に対して、式 get<i>(v) < get<i>

がすべてのiに対して妥当でなければならない。

variant v,wの大小比較は、v < wの場合、以下のように行われる。

- 1. w.valueless\_by\_exception() ならば、false
- 2. それ以外の場合、v.valueless\_by\_exception() ならば、true
- 3. それ以外の場合、v.index() < w.index() ならば、true
- 4. それ以外の場合、v.index() > w.index() ならば、false
- 5. それ以外の場合、get<i>(v) < get<i>(w)。ただしiは v.index()

値なしの variant は最も小さいとみなされる。インデックスの小さいほうが小とみなされる。どちらも同じ型の値があるのであれば、値同士の比較となる。

```
int main()
{
    std::variant< int, double > a(0), b(0);

    // false
    // 同じ型の同じ値を比較
    a < b;
    a = 1.0;

    // false
    // インデックスによる比較</pre>
```

4.1 variant: 型安全な

```
// インデックスによる比較
     b < a ;
 }
operator < は以下のような実装になる。
 template <class... Types>
 constexpr bool
 operator<(const variant<Types...>& v, const variant<Types...>& w
 {
     if ( w.valueless_by_exception() )
         return false ;
     else if ( v.valueless_by_exception() )
         return true ;
     else if ( v.index() < w.index() )</pre>
         return true ;
     else if ( v.index() > w.index() )
         return false ;
     else
         return std::visit(
             []( auto && a, auto && b){ return a < b; },
             v, w);
 }
```

残りの大小比較も同じ方法で比較される。

#### **4.1.17 visit: variant** が保持している値を受け取る

std::visit は、variant の保持している型を実引数に関数オブジェクトを叩れるライブラリだ。

```
第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ
```

```
// visitor(3.14,42) が呼ばれる
      std::visit( visitor, w, v );
  }
 このように、variant にどの型の値が保持されていても扱うことができる。
 std::visit は以下のように宣言されている。
  template < class Visitor, class... Variants >
  constexpr auto visit( Visitor&& vis, Variants&&... vars ) ;
 第一引数に関数オブジェクトを渡し、第二引数以降に variant を渡す。する
vis(get<i>(vars)...)のように呼ばれる。
  int main()
   ₹
      std::variant<int> a(1), b(2), c(3);
      // (1)
      std::visit( []( auto x ) {}, a );
      // (1, 2, 3)
      std::visit([]( auto x, auto y, auto z ) {}, a, b, c );
  }
```

## 4.2 any: どんな型の値でも保持できるクラス

#### 4.2.1 使い方

ヘッダーファイル <any> で定義されている std::any は、ほとんどどんな型のも保持できるクラスだ。

```
#include <any>
int main()
{
    std::any a ;
    a = 0 ; // int
    a = 1.0 ; // double
    a = "hello" ; // char const *
```

4.2 any: どんな型の値でも保持できる

```
std::vector<int> v;
a = v; // std::vector<int>

// 保持している std::vector<int>のコピー
auto value = std::any_cast< std::vector<int> >( a );
}
any が保持できない型は、コピー構築できない型だ。
```

#### 4.2.2 any の構築と破棄

クラス any はテンプレートではない。そのため宣言は単純だ。

```
int main()
{
    // 値を保持しない
    std::any a;
    // int 型の値を保持する
    std::any b(0);
    // double 型の値を保持する
    std::any c(0.0);
}
```

any が保持する型を事前に指定する必要はない。

クラス any を破棄すると、そのとき保持していた値が適切に破棄される。

#### 4.2.3 in\_place\_type コンストラクター

any のコンストラクターで emplace をするために in\_place\_type が使える。

```
struct X
{
      X( int, int ) { }
};
int main()
{
      // 型 X を X(1, 2) で構築した結果の値を保持する
      std::any a( std::in_place_type<X>, 1, 2 );
}
```

第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

#### 4.2.4 any への代入

any への代入も普通のプログラマーの期待どおりの動きをする。

```
int main()
{
    std::any a;
    std::any b;

    // a は int 型の値 42 を保持する
    a = 42;
    // b は int 型の値 42 を保持する
    b = a;
}
```

template <class T, class... Args>

#### **4.2.5** any のメンバー関数

#### emplace

```
decay_t<T>& emplace(Args&&... args);

any は emplace メンバー関数をサポートしている。

struct X
{
        X( int, int ) { }
};

int main()
{
        std::any a;

        // 型 X を X(1, 2) で構築した結果の値を保持する
        a.emplace<X>(1, 2);
}
```

#### reset: 値の破棄

4.2 any: どんな型の値でも保持できる

any の reset メンバー関数は、any の保持してある値を破棄する。reset をした後の any は値を保持しない。

```
int main()
  {
      // a は値を保持しない
      std::any a ;
      // a は int 型の値を保持する
      a = 0;
      // a は値を保持しない
      a.reset();
  }
swap: スワップ
 any は swap メンバー関数をサポートしている。
  int main()
      std::any a(0);
      std::any b(0.0);
      // a は int 型の値を保持
      // b は double 型の値を保持
      a.swap(b);
      // a は double 型の値を保持
      // bは int 型の値を保持
  }
```

# has\_value:値を保持しているかどうか調べる

bool has\_value() const noexcept;

any の has\_value メンバー関数は any が値を保持しているかどうかを調べる 保持しているならば true を、保持していないならば false を返す。

```
int main()
{
```

// false

a = 0 ;
// true

第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

bool b1 = a.has\_value() ;

```
bool b2 = a.has_value();

a.reset();
// false
bool b3 = a.has_value();
}

type: 保持している型の type_info を得る
const type_infoを type() const noexcept;

type メンバー関数は、保持している型 T の typeid(T) を返す。値を保持してい場合、typeid(void)を返す。
int main()
{
std::any a;
// typeid(void)
auto & t1 = a.type();

a = 0;
// typeid(int)
```

## **4.2.6** any のフリー関数

}

a = 0.0;

make\_any<T>: T 型の any を作る

// typeid(double)
auto & t3 = a.type() ;

auto & t2 = a.type() ;

4.2 any: どんな型の値でも保持できる

```
any make_any(Args&& ...args);
   template <class T, class U, class... Args>
   any make_any(initializer_list<U> il, Args&& ...args);
 make_any<T>( args... ) は T 型をコンストラクター実引数 args... で構築
を保持する any を返す。
   struct X
   {
      X( int, int ) { }
   };
   int main()
   {
       // int 型の値を保持する any
       auto a = std::make_any<int>( 0 ) ;
       // double 型の値を保持する any
       auto b = std::make_any<double>( 0.0 ) ;
       // X 型の値を保持する any
       auto c = std::make_any<X>(1, 2);
   }
any_cast: 保持している値の取り出し
   template<class T> T any_cast(const any& operand);
   template<class T> T any_cast(any& operand);
   template<class T> T any_cast(any&& operand);
 any_cast<T>(operand) は operand が保持している値を返す。
   int main()
   {
       std::any a(0);
       int value = std::any_cast<int>(a) ;
   }
```

any\_cast<T> で指定した T 型が、any が保持している型ではないstd::bad\_any\_cast が throw される。

{

try {

```
第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ
```

std::any\_cast<int>(a) ;
} catch( std::bad\_any\_cast e )

std::any a ;

std::any a(42);

// nullptr

// int 型の値を参照するポインター

int \* p1 = std::any\_cast<int>( &a ) ;

# 4.3 optional: 値を保有しているか、していないクラス

double \* p2 = std::any\_cast<double>( &a ) ;

#### 4.3.1 使い方

}

ヘッダーファイル <optional> で定義されている optional<T> は、T 型の値を しているか、保有していないライブラリだ。

条件次第で値が用意できない場合が存在する。たとえば割り算の結果の値を返っ 数を考える。

4.3 optional: 値を保有しているか、していない

ゼロで除算はできないので、bの値が0の場合、この関数は値を用意するこ きない。問題は、int型のすべての値は通常の除算結果として使われるので、 であることを示す特別な値を返すこともできない。

このような場合にエラーや値を通知する方法として、過去にさまざまな方法 された。たとえば、ポインターやリファレンスを実引数として受け取る方法、 バル変数を使う方法、例外だ。

optional はこのような値が用意できない場合に使える共通の方法を提供す

```
std::optional<int> divide( int a, int b )
   if (b == 0)
       return {};
   else
       return { a / b };
}
int main()
{
   auto result = divide( 10, 2 );
   // 値の取得
   auto value = result.value() ;
   // ゼロ除算
   auto fail = divide( 10, 0 );
   // false、値を保持していない
   bool has_value = fail.has_value() ;
   // throw bad_optional_access
   auto get value anyway = fail value() .
```

第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

## 4.3.2 optional のテンプレート実引数

optional<T> はT型の値を保持するか、もしくは保持しない状態を取る。

```
int main()
{
    // int 型の値を保持するかしない optional
    using a = std::optional<int>;
    // double 型の値を保持するかしない optional
    using b = std::optional<double>;
}
```

## 4.3.3 optional の構築

int main()

optional をデフォルト構築すると、値を保持しない optional になる。

```
// 値を保持しない
std::optional<int> a;
}

コンストラクターの実引数に std::nullopt を渡すと、値を保持
```

コンストラクターの実引数に std::nullopt を渡すと、値を保持しない optionaなる。

```
int main()
{
    // 値を保持しない
    std::optional<int> a( std::nullopt );
}
```

optional<T> のコンストラクターの実引数に T 型に変換できる型を渡すと、T 値に型変換して保持する。

```
int main()
{
    // int 型の値 42 を保持する
    std::optional<int> a(42);

    // double 型の値 1.0 を保持する
    std::optional<double> b( 1.0 );
```

}

4.3 optional: 値を保有しているか、していない

```
// int 型の値 1 を保持する
std::optional<int> c ( 1.0 );
}

T 型 から U 型 に 型 変 換 できるとき、optional<T> の コンストラ
に optional<U> を渡すと U から T に型変換されて T 型の値を保持する opti
なる。
int main()
{
    // int 型の値 42 を保持する
    std::optional<int> a( 42 );
```

// int から double への型変換が行われる

// long 型の値 42 を保持する std::optional<long> b ( a );

optional のコンストラクターの第一引数に std::in\_place\_type<T> を渡る続の引数を使って T 型のオブジェクトが emplace 構築される。

```
struct X
{
      X( int, int ) { }
};
int main()
{
      // X(1, 2)
      std::optional<X> o( std::in_place_type<X>, 1, 2 );
}
```

## 4.3.4 optional の代入

通常のプログラマーの期待どおりの挙動をする。std::nullopt を代入する保持しない optional になる。

#### 4.3.5 optional の破棄

optional が破棄されるとき、保持している値があれば、適切に破棄される

```
第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ
```

```
{
   ~X() { }
} ;
int main()
{
   {
      // 値を保持する
      std::optional<X> o ( X{} ) ;
      // X のデストラクターが呼ばれる
   }
   {
      // 値を保持しない
      std::optional<X> o ;
      // X のデストラクターは呼ばれない
   }
}
```

## 4.3.6 swap

```
optional は swap に対応している。
```

```
int main()
{
    std::optional<int> a(1), b(2);
    a.swap(b);
}
```

#### **4.3.7** has\_value: 値を保持しているかどうか確認する

```
constexpr bool has_value() const noexcept;
```

has\_value メンバー関数は optional が値を保持している場合、true を返す。

```
int main()
{
    std::optional<int> a;
    // false
```

4.3 optional: 値を保有しているか、していない

```
std::optional<int> b(42) ;
// true
bool b2 = b.has_value() ;
}
```

#### 4.3.8 operator bool: 値を保持しているかどうか確認する

constexpr explicit operator bool() const noexcept;

optional を文脈上 bool に変換すると、値を保持している場合にのみ true 評価される。

```
int main()
{

    std::optional<bool> a = some_function();
    // OK、文脈上bool に変換
    if ( a )
    {
            // 値を保持
    }
    else
    {
            // 値を不保持
    }

    // 匹ラー、暗黙の型変換は行われない
    bool b1 = a;
    // OK、明示的な型変換
    bool b2 = static_cast<bool>(a);
}
```

#### **4.3.9 value**: 保持している値を取得

```
constexpr const T& value() const&;
constexpr T& value() &;
constexpr T&& value() &&;
constexpr const T&& value() const&&;
```

#### 第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

value メンバー関数は optional が値を保持している場合、値へのリファレンに返す。値を保持していない場合、std::bad\_optional\_access が throw される。

```
int main()
{
    std::optional<int> a(42);

    // OK
    int x = a.value ();

    try {
        std::optional<int> b;
        int y = b.value();
    } catch(std::bad_optional_access e)
    {
        // 値を保持していなかった
    }
}
```

#### **4.3.10 value\_or**: 値もしくはデフォルト値を返す

```
template <class U> constexpr T value_or(U&& v) const&;
template <class U> constexpr T value_or(U&& v) &&;
```

value\_or(v) メンバー関数は、optional が値を保持している場合はその値を、 $\ell$ していない場合は  $\nu$  を返す。

```
int main()
{
    std::optional<int> a( 42 ) ;

    // 42
    int x = a.value_or(0) ;

    std::optional<int> b ;

    // 0
    int x = b.value_or(0) ;
}
```

4.3 optional: 値を保有しているか、していない

## **4.3.11 reset**: 保持している値を破棄する

reset メンバー関数を呼び出すと、保持している値がある場合破棄する。r ンバー関数を呼び出した後の optional は値を保持しない状態になる。

```
int main()
{
    std::optional<int> a( 42 );

    // true
    bool b1 = a.has_value();

    a.reset();

    // false
    bool b2 = a.has_value();
}
```

## 4.3.12 optional 同士の比較

optional<T> を比較するためには、T 型のオブジェクト同士が比較できるある。

#### 同一性の比較

値を保持しない 2 つの optional は等しい。片方のみが値を保持している o は等しくない。両方とも値を保持している optional は値による比較になる。

```
int main()
{
    std::optional<int> a, b;

    // true
    // どちらも値を保持しない optional
    bool b1 = a == b;

a = 0;

    // false
    // a のみ値を保持
    bool b2 = a == b;
```

第4章 C++17の型安全な値を格納するライブラリ

```
b = 1 ;

// false
// どちらも値を保持。値による比較
bool b3 = a == b ;
}
```

#### 大小比較

optional 同士の大小比較は、a < b の場合

- 1. b が値を保持していなければ false
- 2. それ以外の場合で、aが値を保持していなければ true
- 3. それ以外の場合、a と b の保持している値同士の比較

となる。

```
int main()
{
    std::optional<int> a, b;

    // false
    // bが値なし
    bool b1 = a < b;

    b = 0;

    // true
    // bは値ありで a が値なし
    bool b2 = a < b;

    a = 1;

    // false
    // どちらとも値があるので値同士の比較
    // 1 < 0 は false
    bool b3 = a < b;
}</pre>
```

4.3 optional: 値を保有しているか、していない

## 4.3.13 optional と std::nullopt との比較

optional と std::nullopt との比較は、std::nullopt が値を持っていない o として扱われる。

## 4.3.14 optional<T>と T の比較

optional<T>とT型の比較では、optional<t>が値を保持していない場合が返る。それ以外の場合、optionalの保持している値とTが比較される。

```
int main()
{
    std::optional<int> o(1);

    // true
    bool b1 = ( o == 1 );
    // false
    bool b2 = ( o == 0 );

    // o は値を保持しない
    o.reset();

    // T の値にかかわらず false
    // false
    bool b3 = ( o == 1 );
    // false
    bool b4 = ( o == 0 );
}
```

# 4.3.15 make\_optional<T>: optional<T>を返す

```
template <class T>
constexpr optional<decay_t<T>> make_optional(T&& v);
make_optional<T>(T t) は optional<T>(t) を返す。
int main()
{
    // std::optional<int>、値は 0
```

auto o1 = std::make optional( 0 );

```
第 4 章 C++17 の型安全な値を格納するライブラリ
```

```
// std::optional<double>、値は0.0
auto o2 = std::make_optional(0.0);
```

# 4.3.16 make\_optional<T, Args ... >: optional<T> を in\_place\_type 構築 て返す

make\_optional の第一引数が T 型ではない場合、in\_place\_type 構築するオールロード関数が選ばれる。

```
struct X
{
      X( int, int ) { }
};
int main()
{
      // std::optional<X>( std::in_place_type<X>, 1, 2 )
      auto o = std::make_optional<X>( 1, 2 );
}
```

# 第5章

# string\_view: 文字列ラッパー

string\_view は、文字型 (char, wchar\_t, char16\_t, char32\_t) の連続した表現された文字列に対する共通の文字列ビューを提供する。文字列は所有した

## 5.1 使い方

連続した文字型の配列を使った文字列の表現方法にはさまざまある。C++ も基本的な文字列の表現方法として、null 終端された文字型の配列がある。

```
char str[6] = { 'h', 'e', 'l', 'l', 'o', '\0' };
```

あるいは、文字型の配列と文字数で表現することもある。

```
// size は文字数
std::size_t size
char * ptr ;
```

このような表現をいちいち管理するのは面倒なので、クラスで包むこともお

```
class string_type
{
    std::size_t size;
    char *ptr
};
```

このように文字列を表現する方法はさまざまある。これらのすべてに対応し と、表現の数だけ関数のオーバーロードが追加されていくことになる。

```
// null 終端文字列用
void process_string( char * ptr );
```

```
第5章 string_view:文字列ラッパー
  void process_string( char * ptr, std::size_t size ) ;
  // std::string クラス
  void process_string( std::string s ) ;
  // 自作の string_type クラス
  void process_string( string_type s ) ;
   // 自作の my_string_type クラス
  void process_string( my_string_type s ) ;
 string_view はさまざまな表現の文字列に対して共通の view を提供すること
この問題を解決できる。もう関数のオーバーロードを大量に追加する必要はない。
   // 自作の string_type
   struct string_type
   {
      std::size_t size ;
      char * ptr ;
      // string_view に対応する変換関数
      operator std::string_view() const noexcept
          return std::string_view( ptr, size ) ;
      }
  }
   // これ1つだけでよい
   void process_string( std::string_view s ) ;
   int main()
   {
      // OK
      process_string( "hello" ) ;
      // OK
      process_string( { "hello", 5 } );
```

std::string str( "hello" ) ;
process\_string( str ) ;

string\_type st{5, "hello"} ;

process\_string( st ) ;

## 5.2 basic\_string\_view

std::string が std::basic\_string< CharT, Traits > に対するbasic\_string<char> であるように、std::string\_view も、その実態にbasic\_string\_viewの特殊化へのtypedef名だ。

```
template<class charT, class traits = char_traits<charT>> class basic_string_view ;

// それぞれの文字型のtypedef名
using string_view = basic_string_view<char>;
using u16string_view = basic_string_view<char16_t>;
using u32string_view = basic_string_view<char32_t>;
using wstring_view = basic_string_view<wchar_t>;
```

なので、通常は basic\_string\_view ではなく、string\_view とか u16stri などの typedef 名を使うことになる。本書では string\_view だけを解説する。他の typedef 名も文字型が違うだけで同じだ。

# 5.3 文字列の所有、非所有

string\_view は文字列を所有しない。所有というのは、文字列を表現するスジの確保と破棄に責任を持つということだ。所有しないことの意味を説明すた、まず文字列を所有するライブラリについて説明する。

std::string は文字列を所有する。std::string 風のクラスの実装は、たる下のようになる。

```
class string
{
    std::size_t size;
    char * ptr;

public:
    // 文字列を表現するストレージの動的確保
    string ( char const * str )
    {
```

```
第5章 string_view:文字列ラッパー
```

```
ptr = new char[size+1] ;
       std::strcpy( ptr, str ) ;
   }
   // コピー
   // 別のストレージを動的確保
    string ( string const & r )
       : size( r.size ), ptr ( new char[size+1] )
   {
       std::strcpy( ptr, r.ptr );
   }
   // ムーブ
   // 所有権の移動
   string ( string && r )
       : size( r.size ), ptr( r.ptr )
   {
       r.size = 0;
       r.ptr = nullptr ;
   }
    // 破棄
    // 動的確保したストレージを解放
   ~string()
    {
       delete[] ptr ;
   }
} ;
```

std::string は文字列を表現するストレージを動的に確保し、所有する。コピー別のストレージを確保する。ムーブするときはストレージの所有権を移す。デスクターは所有しているストレージを破棄する。

std::string\_view は文字列を所有しない。std::string\_view 風のクラスの気は、たとえば以下のようになる。

```
class string_view
{
    std::size_t size ;
    char const * ptr ;
```

```
public :
     // 所有しない
     // str の参照先の寿命は呼び出し側が責任を持つ
     string_view( char const * str ) noexcept
         : size( std::strlen(str) ), ptr( str )
     { }
     // コピー
     // メンバーごとのコピーだけでよいので default 化するだけでよい
     string_view( string_view const & r ) noexcept = default ;
     // ムーブはコピーと同じ
     // 所有しないので所有権の移動もない
     // 破棄
     // 何も解放するストレージはない
     // デストラクターもトリビアルでよい
  } ;
 string_viewに渡した連続した文字型の配列へのポインターの寿命は、渡し
責任を持つ。つまり、以下のようなコードは間違っている。
  std::string_view get_string()
     char str[] = "hello" ;
     // エラー
     // str の寿命は関数の呼び出し元に戻った時点で尽きている
```

# 5.4 string\_view の構築

return str ;

}

string\_view の構築には4種類ある。

- デフォルト構築
- null 終端された文字型の配列へのポインター
- 文字型の配列へのポインターと文字数

第5章 string\_view:文字列ラッパー

#### 5.4.1 デフォルト構築

```
constexpr basic_string_view() noexcept;
string_view のデフォルト構築は、空の string_view を作る。
int main()
{
    // 空の string_view std::string_view s ;
}
```

#### 5.4.2 null 終端された文字型の配列へのポインター

constexpr basic\_string\_view(const charT\* str);

この string\_view のコンストラクターは、null 終端された文字型へのポインを受け取る。

```
int main()
{
    std::string_view s( "hello" ) ;
}
```

#### 5.4.3 文字型へのポインターと文字数

constexpr basic\_string\_view(const charT\* str, size\_type len);

この string\_view のコンストラクターは、文字型の配列へのポインターと文字を受け取る。ポインターは null 終端されていなくてもよい。

```
int main()
{
    char str[] = {'h', 'e', 'l', 'l', 'o'};
    std::string_view s( str, 5 );
}
```

## 5.5 文字列クラスからの変換関数

他の文字列クラスから string\_view を作るには、変換関数を使う。string\_ コンストラクターは使わない。

std::string は string\_view への変換関数をサポートしている。独自のプラスを string\_view に対応させるにも変換関数を使う。たとえば以下のようする。

```
class string
{
    std::size_t size;
    char * ptr;

public:
    operator std::string_view() const noexcept
    {
        return std::string_view( ptr, size );
    }
};

これにより、std::string から string_view への変換が可能になる。
int main()
{
    std::string s = "hello";
    std::string_view sv = s;
}

コレと同じ方法を使えば、独自の文字列クラスも string view に対応
```

コレと同じ方法を使えば、独自の文字列クラスも string\_view に対応させるできる。

std::string は string\_view を受け取るコンストラクターを持ってい string\_view から string への変換もできる。

```
int main()
{
  std::string_view sv = "hello" ;
  // コピーされる
  std::string s = sv ;
```

第5章 string\_view:文字列ラッパー

# 5.6 string\_view の操作

string\_view は既存の標準ライブラリの string とほぼ同じ操作性を提供していたとえばイテレーターを取ることができるし、operator [] で要素にアクセスでし、size() で要素数が返るし、find() で検索もできる。

```
template < typename T >
void f( T t )
    for ( auto c : t )
        std::cout << c ;
    }
    if (t.size() > 3)
    {
        auto c = t[3];
    }
    auto pos = t.find( "fox" ) ;
}
int main()
{
    std::string s("quick brown fox jumps over the lazy dog.") ;
    f(s);
    std::string_view sv = s ;
    f(sv);
}
```

 $string\_view$  は文字列を所有しないので、文字列を書き換える方法を提供しない。

```
std::string s = "hello" ;
```

int main()

```
s[0] = 'H' ;
     s += ",world" ;
     std::string_view sv = s ;
    // エラー
     // string_view は書き換えられない
    sv[0] = 'h';
    s += ".\n";
 }
string_view は文字列を所有せず、ただ参照しているだけだからだ。
 int main()
 {
     std::string s = "hello" ;
    std::string_view sv = s ;
    // "hello"
    std::cout << sv ;
     s = "world" ;
     // "world"
    // string_view は参照しているだけ
    std::cout << sv ;
 }
```

string\_view は string とほぼ互換性のあるメンバーを持っているが、一部列を変更するメンバーは削除されている。

## 5.6.1 remove\_prefix/remove\_suffix: 先頭、末尾の要素の削除

string\_view は先頭と末尾から n 個の要素を削除するメンバー関数を扱いる。

```
constexpr void remove_prefix(size_type n);
constexpr void remove_suffix(size_type n);
```

string\_viewにとって、先頭と末尾からn個の要素を削除するのは、ポインn個ずらすだけなので、これは文字列を所有しないstring\_viewでも行える投

```
{
    std::string s = "hello";
    std::string_view s1 = s;

    // "lo"
    s1.remove_prefix(3);

    std::string_view s2 = s;

    // "he"
    s2.remove_suffix(3);
}

このメンバー関数は既存の std::string にも追加されている。
```

第5章 string\_view: 文字列ラッパー

## 5.7 ユーザー定義リテラル

```
std::string と std::string_view にはユーザー定義リテラルが追加されている
string operator""s(const char* str, size_t len);
u16string operator""s(const char16_t* str, size_t len);
u32string operator""s(const char32_t* str, size_t len);
wstring operator""s(const wchar_t* str, size_t len);

constexpr string_view
operator""sv(const char* str, size_t len) noexcept;

constexpr u16string_view
operator""sv(const char16_t* str, size_t len) noexcept;

constexpr u32string_view
operator""sv(const char32_t* str, size_t len) noexcept;

constexpr wstring_view
operator""sv(const wchar_t* str, size_t len) noexcept;

以下のように使う。
int main()
```

```
// std::string
auto s = "hello"s;

// std::string_view
auto sv = "hello"sv;
}
```

## 第6章

## メモリーリソース: 動的ストレージ確保ライブラリ

ヘッダーファイル <memory\_resource> で定義されているメモリーリソース 的ストレージを確保するための C++17 で追加されたライブラリだ。その特征のとおり。

- アロケーターに変わる新しいインターフェースとしてのメモリーリソー
- ポリモーフィックな振る舞いを可能にするアロケーター
- 標準で提供されるさまざまな特性を持ったメモリーリソースの実装

## **6.1** メモリーリソース

メモリーリソースはアロケーターに変わる新しいメモリー確保と解放のためターフェースとしての抽象クラスだ。コンパイル時に挙動を変える静的ポリモズム設計のアロケーターと違い、メモリーリソースは実行時に挙動を変える動モーフィズム設計となっている。

```
void f( memory_resource * mem )
{
    // 10 バイトのストレージを確保
    auto ptr = mem->allocate( 10 );
    // 確保したストレージを解放
    mem->deallocate( ptr );
}
```

クラス std::pmr::memory\_resource の宣言は以下のとおり。

```
第6章 メモリーリソース:動的ストレージ確保ライブラリ
```

クラス memory\_resource は std::pmr 名前空間スコープの中にある。

#### 6.1.1 メモリーリソースの使い方

true を返す。

memory\_resource を使うのは簡単だ。memory\_resource のオブジェクトを確何たら、メンバー関数 allocate(bytes, alignment)でストレージを確保する。バー関数 deallocate(p, bytes, alignment)でストレージを解放する。

```
void f( std::pmr::memory_resource * mem )
{
    // 100 パイトのストレージを確保
    void * ptr = mem->allocate( 100 );
    // ストレージを解放
    mem->deallocate( ptr, 100 );
}
```

2つの memory\_resource のオブジェクト a, b があるとき、一方のオブジェクトな 保したストレージをもう一方のオブジェクトで解放できるとき、a.is\_equal(b)

```
void f( std::pmr::memory_resource * a, std::pmr::memory_resouce * b
```

```
// a で確保したストレージは b で解放できるか?
     if ( a->is_equal( *b ) )
     {// できる
        b->deallocate( ptr, 1 );
     }
     else
     {// できない
        a->deallocate( ptr, 1 );
     }
 }
is_equal を呼び出す operator == と operator != も提供されている。
 void f( std::pmr::memory_resource * a, std::pmr::memory_resource
 {
     bool b1 = ( *a == *b ) ;
     bool b2 = ( *a != *b ) ;
 }
```

## 6.1.2 メモリーリソースの作り方

独自のメモリーアロケーターを memory\_resouce のインターフェースに て作るには、memory\_resource から派生した上で、do\_allocate, do\_deal do\_is\_equal の3つの private 純粋 virtual メンバー関数をオーバーライドで

要に応じてデストラクターもオーバーライドする。

const noexcept = 0;

```
class memory_resource {
    // 非公開
    static constexpr size_t max_align = alignof(max_align_t);
public:
    virtual ~ memory_resource();
private:
    virtual void* do_allocate(size_t bytes, size_t alignment) =
    virtual void do_deallocate( void* p, size_t bytes,
                                size_t alignment) = 0;
    virtual bool do_is_equal(const memory_resource& other)
```

```
第6章 メモリーリソース:動的ストレージ確保ライブラリ
```

do\_allocate(bytes, alignment) は少なくとも alignment バイトでアライメこされた bytes バイトのストレージへのポインターを返す。ストレージが確保できかった場合は、適切な例外を throw する。

do\_deallocate(p, bytes, alignment) は事前に同じ \*this から呼び出され allocate(bytes, alignment) で返されたポインターpを解放する。すでに知されたポインターpを渡してはならない。例外は投げない。

do\_is\_equal(other) は、\*this と other が互いに一方で確保したストレージ; う一方で解放できる場合に true を返す。

たとえば、malloc/free を使った memory\_resouce の実装は以下のとおり。

```
// malloc/free を使ったメモリーリソース
class malloc_resource : public std::pmr::memory_resource
public :
   //
    ~malloc_resource() { }
private :
   // ストレージの確保
    // 失敗した場合 std::bad_alloc を throw する
   virtual void *
   do_allocate( std::size_t bytes, std::size_t alignment ) override
       void * ptr = std::malloc( bytes ) ;
       if ( ptr == nullptr )
       { throw std::bad_alloc{} ; }
       return ptr ;
   }
   // ストレージの解放
   virtual void
   do_deallocate( void * p, std::size_t bytes,
                   std::size_t alignment ) override
   {
       std::free( p );
   }
    virtual bool
   do_is_equal( const memory_resource & other )
```

#### 6.2 polymorphic\_allocator:動的ポリモーフィズムを実現するアログ

ジを解放する。メモリーリソースで0バイトのストレージを確保しようとした規定はないので、malloc の挙動に任せる。malloc は0バイトのメモリーを係うとしたとき、C11 では規定がない。POSIX では null ポインターを返すた

do\_allocate は malloc でストレージを確保し、do\_deallocate は free でご

do\_is\_equal は、malloc\_resource でさえあればどのオブジェクトから確保ストレージであっても解放できるので、\*this が malloc\_resource であるかとdynamic\_cast で確認している。

# **6.2 polymorphic\_allocator**: 動的ポリモーフィズムを実現すロケーター

std::pmr::polymorphic\_allocator はメモリーリソースを動的ポリモーフ・

で解放可能な何らかのアドレスを返すものとしている。

して振る舞うアロケーターにするためのライブラリだ。 従来のアロケーターは、静的ポリモーフィズムを実現するために設計され

従来のアロケーターは、静的ボリモーフィズムを実現するために設計されたとえば独自の custom\_int\_allocator 型を使いたい場合は以下のように書く

std::vector< int, custom\_int\_allocator > v ;

std::pmr::polymorphic\_allocator が追加された。

コンパイル時に使うべきアロケーターが決定できる場合はこれでいいのだが 時にアロケーターを選択したい場合、アロケーターをテンプレート引数に取る 問題になる。

そのため、C++17 ではメモリーリソースをコンストラクター引数に取り リーリソースからストレージを確保する実行時ポリモーフィックの振る舞V

たとえば、標準入力から true か false が入力されたかによって、システフォルトのメモリーリソースと、monotonic\_buffer\_resource を実行時に切りには、以下のように書ける。

int main()

```
第6章 メモリーリソース:動的ストレージ確保ライブラリ
```

```
bool b;
     std::cin >> b ;
     std::pmr::mempry_resource * mem ;
     std::unique_ptr< memory_resource > mono ;
     if (b)
     { // デフォルトのメモリーリソースを使う
        mem = std::pmr::get_default_resource() ;
     }
     else
     { // モノトニックバッファーを使う
        mono = std::make_unique< std::pmr::monotonic_buffer_resource</pre>
                ( std::pmr::get_default_resource() );
        mem = mono.get() ;
     }
     std::vector< int, std::pmr::polymorphic_allocator<int> >
        v( std::pmr::polymorphic_allocator<int>( mem ) );
 }
std::pmr::polymorphic_allocator は以下のように宣言されている。
 namespace std::pmr {
 template <class T>
 class polymorphic_allocator ;
 }
テンプレート実引数には std::allocator<T> と同じく、確保する型を与える。
```

#### 6.2.1 コンストラクター

```
polymorphic_allocator() noexcept;
polymorphic_allocator(memory_resource* r);
```

std::pmr::polymorphic\_allocator のデフォルトコンストラクターは、メモリーソースを std::pmr::get\_default\_resource() で取得する。

memory resource \* を引数に取るコンストラクターは 渡されたメモリーリソ

へのポインターは妥当なものでなければならない。

```
int main()
{
    // p1( std::pmr::get_default_resource () ) と同じ
    std::pmr::polymorphic_allocator<int> p1 ;

    std::pmr::polymorphic_allocator<int> p2(
        std::pmr::get_default_resource() ) ;
}
```

後は通常のアロケーターと同じように振る舞う。

## 6.3 プログラム全体で使われるメモリーリソースの取得

C++17 では、プログラム全体で使われるメモリーリソースへのポインターすることができる。

## 6.3.1 new\_delete\_resource()

```
memory_resource* new_delete_resource() noexcept ;
```

関数 new\_delete\_resource はメモリーリソースへのポインターを返す。 るメモリーリソースは、ストレージの確保に ::operator new を使い、ストレ 解放に ::operator delete を使う。

```
int main()
{
    auto mem = std::pmr::new_delete_resource() ;
}
```

## 6.3.2 null\_memory\_resource()

```
memory_resource* null_memory_resource() noexcept ;
```

関数 null\_memory\_resource はメモリーリソースへのポインターを返す。 れるメモリーリソースの allocate は必ず失敗し、std::bad\_alloc を thro deallocate は何もしない。

このメモリーリソースは、ストレージの確保に失敗した場合のコードをテス

第6章 メモリーリソース:動的ストレージ確保ライブラリ

#### **6.3.3** デフォルトリソース

```
memory_resource* set_default_resource(memory_resource* r) noexcept ;
memory_resource* get_default_resource() noexcept ;
```

デフォルト・メモリーリソース・ポインターとは、メモリーリソースを明示的は

定することができない場合に、システムがデフォルトで利用するメモリーリソーのポインターのことだ。初期値は new\_delete\_resource() の戻り値となっている現在のデフォルト・メモリーリソース・ポインターと取得するためには、「get\_default\_resource を使う。デフォルト・メモリーリソース・ポインターを多のメモリーリソースに差し替えるには、関数 set default\_resource を使う。

```
int main()
{
    // 現在のデフォルトのメモリーリソースへのポインター
    auto init_mem = std::pmr::get_default_resource();

    std::pmr::synchronized_pool_resource pool_mem;

    // デフォルトのメモリーリソースを変更する
    std::pmr::set_default_resource(&pool_mem);

    auto current_mem = std::pmr::get_default_resource();

    // true
    bool b = current_mem == pool_mem;
}
```

### 6.4 標準ライブラリのメモリーリソース

標準ライブラリはメモリーリソースの実装として、プールリソースとモノトニーリソースを提供している。このメモリーリソースの詳細は後に解説するが、ここそのための事前知識として、汎用的なメモリーアロケーター一般の解説をする。 プログラマーはメモリーを気軽に確保している。たとえば 47 バイトとか 151 / 2 に

トのような中途半端なサイズのメモリーを以下のように気軽に確保している。

int main()

```
auto mem = std::get_default_resource();
auto p1 = mem->allocate( 47 );
auto p2 = mem->allocate( 151 );
mem->deallocate( p1 );
mem->deallocate( p2 );
}
```

しかし、残念ながら現実のハードウェアや OS のメモリー管理は、このようにはできていない。たとえば、あるアーキテクチャーと OS では、メモリーはサイズと呼ばれる単位でしか確保できない。そして最小のページサイズです。イトであったりする。もしシステムの低級なメモリー管理を使って上のコートしようとすると、47 バイト程度のメモリーを使うのに 3K バイト超の無駄がことになる。

他にもアライメントの問題がある。アーキテクチャーによってはメモリーでが適切なアライメントに配置されていないとメモリーアクセスができないか、パフォーマンスが落ちることがある。

malloc や operator new などのメモリーアロケーターは、低級なメモリー管 匿し、小さなサイズのメモリー確保を効率的に行うための実装をしている。

一般的には、大きな連続したアドレス空間のメモリーを確保し、その中に管 データ構造を作り、メモリーを必要なサイズに切り出す。

#### // 実装イメージ

```
// ストレージを分割して管理するためのリンクリストデータ構造
struct alignas(std::max_align_t) chunk
{
    chunk * next ;
    chunk * prev ;
    std::size_t size ;
} ;

class memory_allocator : public std::pmr::memory_resource
{
    chunk * ptr ; // ストレージの先頭へのポインター
    std::size_t size ; // ストレージのサイズ
    std::mutex m ; // 同期用
```

```
第6章 メモリーリソース:動的ストレージ確保ライブラリ
```

```
public :
   memory_allocator()
   {
       // 大きな連続したストレージを確保
   }
   virtual void *
   do_allocate( std::size_t bytes, std::size_t alignment ) override
       std::scoped_lock lock( m ) ;
       // リンクリストをたどり、十分な大きさの未使用領域を探し、リンクリス
       // 構築して返す
       // アライメント要求に注意
   }
   virtual void *
   do_allocate( std::size_t bytes, std::size_t alignment ) override
       std::scoped_lock lock( m ) ;
      // リンクリストから該当する部分を削除
   }
   virtual bool
   do_is_equal( const memory_resource & other )
       const noexcept override
   // *this と other で相互にストレージを解放できるかどうか返す
   }
} ;
```

### 6.5 プールリソース

プールリソースは C++17 の標準ライブラリが提供しているメモリーリソー 実装だ。synchronized\_pool\_resource と unsynchronized\_pool\_resource の  $2^{-7}$  ある。

#### 6.5.1 アルゴリズム

• プールリソースのオブジェクトが破棄されるとき、そのオブジェクトから a で確保したストレージは、明示的に deallocate を呼ばずとも解放される。

```
void f()
{
    std::pmr::synchronized_pool_resource mem ;
    mem.allocate(10);

    // 確保したストレージは破棄される
}
```

• プールリソースの構築時に、上流メモリーリソースを与えることができる ルリソースは上流メモリーリソースからチャンクのためのストレージを確

```
int main()
{
    // get_default_resource() が使われる
    std::pmr::synchronized_pool_resource m1;

    // 独自の上流メモリーリソースを指定
    custom_memory_resource mem;
    std::pmr::synchronized_pool_resource m2( &mem );
}
```

 プールリソースはストレージを確保する上流メモリーリソースから、プー ばれる複数のストレージを確保する。プールは複数のチャンクを保持し チャンクは複数の同一サイズのブロックを保持している。プールリソース る do\_allocate(size, alignment) は、少なくとも size バイトのブロック のプールのいずれかのチャンクのブロックが割り当てられる。 もし、最大のブロックサイズを超えるサイズのストレージを確保しようと 合、上流メモリーリソースから確保される。

```
// 実装イメージ
```

```
namespace std::pmr {
```

}

第6章 メモリーリソース:動的ストレージ確保ライブラリ

```
template < size_t block_size >
class chunk
   blocks<block_size> b ;
}
// プールの実装
template < size_t block_size >
class pool : public memory_resource
   chunks<block_size> c ;
} ;
class pool_resource : public memory_resource
{
   // それぞれのブロックサイズのプール
   pool<8> pool_8bytes ;
   pool<16> pool_16bytes ;
   pool<32> pool_32bytes ;
   // 上流メモリーリソース
   memory_resource * mem ;
   virtual void * do_allocate( size_t bytes, size_t alignment ) ove
       // 対応するブロックサイズのプールにディスパッチ
       if ( bytes <= 8 )
           return pool_8bytes.allocate( bytes, alignment );
       else if ( bytes <= 16 )
           return pool_16bytes.allocate( bytes, alignment );
       else if ( bytes < 32 )
           return pool_32bytes.allocate( bytes, alignment );
       else
       // 最大ブロックサイズを超えたので上流メモリーリソースにディスパッチ
           return mem->allocate( bytes, alignment );
   }
};
```

- プールリソースは構築時に pool\_options を渡すことにより、最大ブロックと最大チャンクサイズを設定できる。
- マルチスレッドから呼び出しても安全な同期を取る synchronized\_pool\_r と、同期を取らない unsynchronized pool resource がある。

### 6.5.2 synchronized/unsynchronized\_pool\_resource

プールリソースには、synchronized\_pool\_resource と unsynchroniz \_resourceがある。どちらもクラス名以外は同じように使える。た synchronized\_pool\_resource は複数のスレッドから同時に実行しても使える内部で同期が取られているのに対し、unsynchronized\_pool\_resource は同類ない。unsyncrhonized\_pool\_resource は複数のスレッドから同時に呼び出る

#### // 実装イメージ

できない。

```
namespace std::pmr {
class synchronized_pool_resource : public memory_resource
    std::mutex m ;
   virtual void *
   do_allocate( size_t size, size_t alignment ) override
        // 同期する
        std::scoped_lock l(m) ;
       return do_allocate_impl( size, alignment );
    }
};
class unsynchronized_pool_resource : public memory_resource
   virtual void *
   do_allocate( size_t size, size_t alignment ) override
    {
        // 同期しない
       return do_allocate_impl( size, alignment );
    }
```

第6章 メモリーリソース:動的ストレージ確保ライブラリ

}

## 6.5.3 pool\_options

pool\_options はプールリソースの挙動を指定するためのクラスで、以下のよっ定義されている。

```
namespace std::pmr {
struct pool_options {
    size_t max_blocks_per_chunk = 0;
    size_t largest_required_pool_block = 0;
};
```

このクラスのオブジェクトをプールリソースのコンストラクターに与えること プールリソースの挙動を指定できる。ただし、pool\_options による指定はあくま も目安で、実装には従う義務はない。

max\_blocks\_per\_chunk は、上流メモリーリソースからプールのチャンクを補こる際に一度に確保する最大のブロック数だ。この値がゼロか、実装の上限より大き場合、実装の上限が使われる。実装は指定よりも小さい値を使うことができるし、

largest\_required\_pool\_block はプール機構によって確保される最大のストレーのサイズだ。この値より大きなサイズのストレージを確保しようとすると、上流、リーストレージから直接確保される。この値がゼロか、実装の上限よりも大きい合、実装の上限が使われる。実装は指定よりも大きい値を使うこともできる。

#### 6.5.4 プールリソースのコンストラクター

たプールごとに別の値を使うこともできる。

プールリソースの根本的なコンストラクターは以下のとおり。synchronized unsynchronized どちらも同じだ。

pool\_resource(const pool\_options& opts, memory\_resource\* upstream);
pool\_resource()

```
: pool_resource(pool_options(), get_default_resource()) {}
explicit pool_resource(memory_resource* upstream)
```

```
explicit pool_resource(const pool_options& opts)
   : pool_resource(opts, get_default_resource()) {}
 pool_options と memory_resource * を指定する。指定しない場合はデファ
が使われる。
6.5.5 プールリソースのメンバー関数
release()
  void release();
 確保したストレージすべてを解放する。たとえ明示的に deallocate を呼び
ていないストレージも解放する。
  int main()
  {
      synchronized_pool_resource mem ;
      void * ptr = mem.allocate( 10 ) ;
      // ptr は解放される
      mem.release();
  }
upstream_resource()
  memory_resource* upstream_resource() const;
 構築時に渡した上流メモリーリソースへのポインターを返す。
options()
```

### 6.6 モノトニックバッファーリソース

pool\_options options() const;

モノトニックバッファーリソースは C++17 で標準ライブラリに追加され リーリソースの実装だ。クラス名は monotonic\_buffer\_resource。

構築時に渡した pool\_options オブジェクトと同じ値を返す。

第6章 メモリーリソース:動的ストレージ確保ライブラリ

う用途に特化した特殊な設計をしている。モノトニックバッファーリソースは、 リー解放をせず、メモリー使用量がモノトニックに増え続けるので、この名前が ている。

たとえばゲームで1フレームを描画する際に大量に小さなオブジェクトのためのトレージを確保し、その後確保したストレージをすべて解放したい場合を考える。 常のメモリーアロケーターでは、メモリー片を解放するためにメモリー全体に構 れたデータ構造をたどり、データ構造を書き換えなければならない。この処理は

つく。すべてのメモリー片を一斉に解放してよいのであれば、データ構造をいちいたどったり書き換えたりする必要はない。メモリーの管理は、単にポインターだいよい。

#### // 実装イメージ

```
namespace std::pmr {
class monotonic_buffer_resource : public memory_resource
    // 連続した長大なストレージの先頭へのポインター
   void * ptr ;
    // 現在の未使用ストレージの先頭へのポインター
    std::byte * current ;
   virtual void *
   do_allocate( size_t bytes, size_t alignment ) override
       void * result = static_cast<void *>(current) ;
       current += bytes ; // 必要であればアライメント調整
       return result ;
   }
   virtual void
   do_deallocate( void * ptr, size_t bytes, size_t alignment ) over
       // 何もしない
   }
public :
```

~monotonic buffer resource()

{

```
}
};
}
```

このように、基本的な実装としては、do\_allocate はポインターを加算してるだけだ。なぜならば解放処理がいらないため、個々のストレージ片を管理でのデータ構造を構築する必要がない。do\_deallocate は何もしない。デストにはストレージ全体を解放する。

## 6.6.1 アルゴリズム

int main()

モノトニックバッファーリソースは以下のような特徴を持つ。

• deallocate 呼び出しは何もしない。メモリー使用量はリソースが破棄され モノトニックに増え続ける。

```
int main()
{
    std::pmr::monotonic_buffer_resource mem ;

    void * ptr = mem.allocate(10);
    // 何もしない
    // ストレージは解放されない
    mem.deallocate(ptr);

    // mem が破棄される際に確保したストレージはすべて破棄される
}
```

• メモリー確保に使う初期バッファーを与えることができる。ストレージ確に、初期バッファーに空きがある場合はそこから確保する。空きがない場流メモリーリソースからバッファーを確保して、バッファーから確保する。

```
{
    std::byte initial_buffer[10] ;
    std::pmr::monotonic_buffer_resource
        mem( initial_buffer, 10, std::pmr::get_default_resource(
```

}

#### 第6章 メモリーリソース:動的ストレージ確保ライブラリ

```
mem.allocate(1);
// 上流メモリーリソースからストレージを確保して切り出して確保mem.allocate(100);
// 前回のストレージ確保で空きがあればそこから
// なければ新たに上流から確保して切り出す
mem.allocate(100);
```

- 1 つのスレッドから使うことを前提に設計されている。allocate と deallocat 同期しない。
- メモリーリソースが破棄されると確保されたすべてのストレージも解放され 明示的に deallocate を呼ばなくてもよい。

#### **6.6.2** コンストラクター

monotonic\_buffer\_resource()

モノトニックバッファーリソースには以下のコンストラクターがある。

```
explicit monotonic_buffer_resource(memory_resource *upstream);
 monotonic_buffer_resource( size_t initial_size,
                            memory_resource *upstream);
 monotonic_buffer_resource( void *buffer, size_t buffer_size,
                            memory_resource *upstream);
 monotonic_buffer_resource()
     : monotonic_buffer_resource(get_default_resource()) {}
 explicit monotonic_buffer_resource(size_t initial_size)
     : monotonic_buffer_resource(initial_size,
                                get_default_resource()) {}
 monotonic_buffer_resource(void *buffer, size_t buffer_size)
     : monotonic_buffer_resource(buffer, buffer_size,
                                get_default_resource()) {}
初期バッファーを取らないコンストラクターは以下のとおり。
 explicit monotonic_buffer_resource(memory_resource *upstream);
 monotonic_buffer_resource( size_t initial_size,
                            memory resource *upstream);
```

initial\_size は、上流メモリーリソースから最初に確保するバッファーの (初期サイズ) のヒントとなる。実装はこのサイズか、あるいは実装依存のサバッファーとして確保する。

デフォルトコンストラクターは上流メモリーリソースに std::pmr\_get\_de resource()を与えたのと同じ挙動になる。

size\_t1 つだけを取るコンストラクターは、初期サイズだけを与えて後はテトの扱いになる。

初期バッファーを取るコンストラクターは以下のとおり。

初期バッファーは先頭アドレスを void \* 型で渡し、そのサイズを size 渡す。

#### 6.6.3 その他の操作

#### release()

```
void release() ;
```

メンバー関数 release は、上流リソースから確保されたストレージをすべてる。明示的に deallocate を呼び出していないストレージも解放される。

```
int main()
{
    std::pmr::monotonic_buffer_resource mem;
    mem.allocate(10);

// ストレージはすべて解放される
    mem.release();
```

第6章 メモリーリソース:動的ストレージ確保ライブラリ

## upstream\_resource()

memory\_resource\* upstream\_resource() const;

メンバー関数 uptream\_resource は、構築時に与えられた上流メモリーリソーをのポインターを返す。

## 第7章

## 並列アルゴリズム

true を返す。それ以外の場合は false を返す。

並列アルゴリズムは  $C_{++17}$  で追加された新しいライブラリだ。このライン既存の **<algorithm>** に、並列実行版を追加する。

## 7.1 並列実行について

C++11 では、スレッドと同期処理が追加され、複数の実行媒体が同時に多るという概念が C++ 標準規格に入った。

C++17では、既存のアルゴリズムに、並列実行版が追加された。

たとえば、all\_of(first, last, pred) というアルゴリズムは、[first,] 区間が空であるか、すべてのイテレーターiに対して pred(\*i) が true を返

すべての値が100未満であるかどうかを調べるには、以下のように書く。

```
第7章 並列アルゴリズム
```

```
std::cout << "result : " << result << std::endl ;
  }
 本書の執筆時点では、コンピューターはマルチコアが一般的になり、同時に複数
スレッドを実行できるようになった。さっそくこの処理を2つのスレッドで並列を
てみよう。
  template < typename Container >
  bool double_is_all_of_less_than_100( Container const & input )
      auto first = std::begin(input) ;
      auto last = first + (input.size()/2) ;
      auto r1 = std::async( [=]
      {
         return std::all_of( first, last,
                          [](auto x) { return x < 100; });
      });
      first = last;
      last = std::end(input) ;
      auto r2 = std::async( [=]
         return std::all_of( first, last,
                          [](auto x) { return x < 100; });
      });
      return r1.get() && r2.get();
  }
 なるほど、とてもわかりにくいコードだ。
 筆者のコンピューターの CPU は2つの物理コア、4つの論理コアを持っている
```

で、4スレッドまで同時に並列実行できる。読者の使っているコンピューターは、り高性能でさらに多くのスレッドを同時に実行可能だろう。実行時に最大の効率

すようにできるだけ頑張ってみよう。

```
template < typename Container >
bool parallel_is_all_of_less_than_100( Container const & input )
{
```

```
cores = std::min( input.size(), cores ) ;
    std::vector< std::future<bool> > futures( cores ) ;
    auto step = input.size() / cores ;
    auto remainder = input.size() % cores ;
    auto first = std::begin(input) ;
    auto last = first + step + remainder ;
    for ( auto & f : futures )
    {
        f = std::async( [=]
            return std::all_of( first, last,
                                 [](auto x){ return x < 100; })
        });
        first = last ;
        last = first + step ;
    }
    for ( auto & f : futures )
    {
        if ( f.get() == false )
           return false ;
    }
    return true ;
}
```

このような並列化をそれぞれのアルゴリズムに対して自前で実装するのはそこで、C++17では標準で並列実行してくれる並列アルゴリズム(Parallel 追加された。

## 7.2 使い方

もうわけがわからない。

並列アルゴリズムは既存のアルゴリズムのオーバーロードとして追加されて以下は既存のアルゴリズムである all\_of の宣言だ。

#### 第7章 並列アルゴリズム

template <class InputIterator, class Predicate>
bool all\_of(InputIterator first, InputIterator last, Predicate pred)

並列アルゴリズム版の all\_of は以下のような宣言になる。

並列アルゴリズムには、テンプレート仮引数として ExecutionPolicy が追加されて第一引数に取る。これを実行時ポリシーと呼ぶ。

実行時ポリシーは <execution> で定義されている関数ディスパッチ用のタグ型 std::execution::seq, std::execution::par, std::execution::par\_unseq がある 複数のスレッドによる並列実行を行うには、std::execution::par を使う。

std::execution::seq を渡すと既存のアルゴリズムと同じシーケンャル実行になる。std::execution::par を渡すとパラレル実行になstd::execution::par\_unseq は並列実行かつベクトル実行になる。

C++17には実行ポリシーを受け取るアルゴリズムのオーバーロード関数が追加れている。

## 7.3 並列アルゴリズム詳細

## 7.3.1 並列アルゴリズム

ズムに対応している。

並列アルゴリズム (parallel algorithm) とは、ExecutionPolicy (実行 シー) というテンプレートパラメーターのある関数テンプレートのことだ。  $\mathbb P$  の <algorithm> と  $\mathbb C$ ++14 で追加された一部の関数テンプレートが、並列アルコ

並列アルゴリズムはイテレーター、仕様上定められた操作、ユーザーの提供する

て、オブジェクトにアクセスする。そのような関数群を、要素アクセス関数(access functions)と呼ぶ。

たとえば、std::sort は以下のような要素アクセス関数を持つ。

- テンプレート実引数で与えられたランダムアクセスイテレーター
- 要素に対する swap 関数の適用
- ユーザー提供された Compare 関数オブジェクト

並列アルゴリズムが使う要素アクセス関数は、並列実行に伴うさまざまな特たさなければならない。

#### 7.3.2 ユーザー提供する関数オブジェクトの制約

並列アルゴリズムのうち、テンプレートパラメーター名が、Pre BinaryPredicate, Compare, UnaryOperation, BinaryOperation, BinaryOperation BinaryOperation となってるものは、関数オブジェクトとしてユーザーがアズムに提供するものである。このようなユーザー提供の関数オブジェクトに

- 実引数で与えられたオブジェクトを直接、間接に変更してはならない
- 実引数で与えられたオブジェクトの一意性に依存してはならない
- データ競合と同期

アルゴリズムに渡す際の制約がある。

一部の特殊なアルゴリズムには例外もあるが、ほとんどの並列アルゴリズムの制約を満たさなければならない。

#### 実引数で与えられたオブジェクトを直接、間接に変更してはならない

ユーザー提供の関数オブジェクトは実引数で与えられたオブジェクトを直接に変更してはならない。

つまり、以下のようなコードは違法だ。

```
int main()
{
    std::vector<int> c = { 1,2,3,4,5 } ;
    std::all_of( std::execution::par, std::begin(c), std::end(c)
        [](auto & x){ ++x ; return true ; } );
    // エラー
}
```

これは、ユーザー提供の関数オブジェクトが実引数を lyalue リファレンス

```
第7章 並列アルゴリズム
```

std::for\_each はイテレーターが変更可能な要素を返す場合、ユーザー提供のトオブジェクトが実引数を変更することが可能だ。

```
int main()
{
    std::vector<int> c = { 1,2,3,4,5 } ;
    std::for_each( std::execution::par, std::begin(c), std::end(c),
        [](auto & x){ ++x ; } );
    // OK
}
```

これは、for\_each は仕様上そのように定められているからだ。

#### 実引数で与えられたオブジェクトの一意性に依存してはならない

存してはならない。 これはどういうことかというと、たとえげ宝引数で渡されたオブジェクトのフ

ユーザー提供の関数オブジェクトは実引数で与えられたオブジェクトの一意性に

これはどういうことかというと、たとえば実引数で渡されたオブジェクトのアスを取得して、そのアドレスがアルゴリズムに渡したオブジェクトのアドレスと「であることを期待するようなコードを書くことができない。

これはなぜかというと、並列アルゴリズムはその並列処理の一環として、要素 ピーを作成し、そのコピーをユーザー提供の関数オブジェクトに渡すかもしれない らだ。

```
// 実装イメージ
```

```
template < typename ExecutionPolicy,</pre>
            typename ForwardIterator,
            typename Predicate >
bool all of(
                ExecutionPolicy && exec,
                ForwardIterator first, ForwardIterator last,
                Predicate pred )
{
    if constexpr (
        std::is_same_v< ExecutionPolicy,
                         std::execution::parallel_policy >
    )
    {
        std::vector c( first, last ) ;
        do_all_of_par( std::begin(c), std::end(c), pred ) ;
    }
}
```

このため、オブジェクトの一意性に依存したコードを書くことはできない。

## データ競合と同期

なければならない。

std::execution::sequenced\_policy を渡した並列アルゴリズムによる要素ス関数の呼び出しは呼び出し側スレッドで実行される。パラレル実行ではないstd::execution::parallel\_policy を渡した並列アルゴリズムによる要素で関数の呼び出しは、呼び出し側スレッドか、ライブラリ側で作られたスレットれた実行される。それぞれの更素アクセス関数の呼び出しの同期は定められ

れかで実行される。それぞれの要素アクセス関数の呼び出しの同期は定められい。そのため、要素アクセス関数はデータ競合やデッドロックを起こさない。

以下のコードはデータ競合が発生するのでエラーとなる。

```
int main()
{
   int sum = 0;
   std::vector<int> c = { 1,2,3,4,5 };
   std::for_each( std::execution::par, std::begin(c), std::end(
        [&]( auto x ) { sum += x ; } );
```

// 十二 二 万益人

第7章 並列アルゴリズム

なぜならば、ユーザー提供の関数オブジェクトは複数のスレッドから同時に呼びされるかもしれないからだ。

std::execution::parallel\_unsequenced\_policy の実行は変わっている。未見のスレッドから同期されない実行が許されている。これは、パラレルベクトルで想定している実行媒体がスレッドのような強い実行保証のある実行媒体ではなSIMD や GPGPU のような極めて軽い実行媒体であるからだ。

その結果、要素アクセス関数は通常のデータ競合やデッドロックを防ぐためのすら取れなくなる。なぜならば、スレッドは実行の途中に中断して別の処理をしてするからだ。

たとえば、以下のコードは動かない。

```
int main()
{
    int sum = 0;
    std::mutex m;

std::vector<int> c = { 1,2,3,4,5 };

std::for_each(
    std::execution::par_unseq,
    std::begin(c), std::end(c),
    [&]( auto x ) {
        std::scoped_lock l(m);
        sum += x;
    });
    // エラー
}
```

このコードは parallel\_policy ならば、非効率的ではあるが問題なく同期され データ競合なく動くコードだ。しかし、parallel\_unsequenced\_policy では動かい。なぜならば、mutex の lock という同期をする関数を呼び出すからだ。

C++では、ストレージの確保解放以外の同期する標準ライブラリの関数をすべべクトル化非安全(vectorization-unsafe)に分類している。ベクトル化非安全を数は std::execution::parallel\_unsequenced\_policy の要素アクセス関数内で関出すことはできない。

#### 7.3.3 例外

並列アルゴリズムの実行中に、一時メモリーの確保が必要になったが確保できた。

並列アルゴリズムの実行中に、要素アクセス関数の外に例外が投げられ std::terminate が呼ばれる。

### 7.3.4 実行ポリシー

実行ポリシーはヘッダーファイル <execution> で定義されている。その気下のようになっている。

```
namespace std {
template<class T> struct is_execution_policy;
template<class T> inline constexpr bool
    is_execution_policy_v = is_execution_policy<T>::value;
}
namespace std::execution {
class sequenced_policy;
class parallel_policy;
class parallel_unsequenced_policy;
inline constexpr sequenced_policy seq{ };
inline constexpr parallel_policy par{ };
inline constexpr parallel_unsequenced_policy par_unseq{ };
}
```

#### is\_execution\_policy traits

std::is\_execution\_policy<T> は T が実行ポリシー型であるかどうかtraits だ。

// false
constexpr bool b1 = std::is\_execution\_policy\_v<int>;

// true
constexpr bool b2 =

std::is\_execution\_policy\_v<std::execution::sequenced\_policy>

#### シーケンス実行ポリシー

namespace std::execution {

#### 第7章 並列アルゴリズム

```
inline constexpr sequenced_policy seq { } ;
}
```

シーケンス実行ポリシーは、並列アルゴリズムにパラレル実行を行わせないた。 ポリシーだ。この実行ポリシーが渡された場合、処理は呼び出し元のスレッドだし 行われる。

#### パラレル実行ポリシー

```
namespace std::execution {
class parallel_policy ;
inline constexpr parallel_policy par { } ;
}
```

パラレル実行ポリシーは、並列アルゴリズムにパラレル実行を行わせるための:シーだ。この実行ポリシーが渡された場合、処理は呼び出し元のスレッドと、ラーラリが作成したスレッドを用いる。

## パラレル非シーケンス実行ポリシー

```
namespace std::execution {
class parallel_unsequenced_policy ;
inline constexpr parallel_unsequenced_policy par_unseq { } ;
```

パラレル非シーケンス実行ポリシーは、並列アルゴリズムにパラレル実行かつ・トル実行を行わせるためのポリシーだ。この実行ポリシーが渡された場合、処理(数のスレッドと、SIMDや GPGPUのようなベクトル実行による並列化を行う。

#### 実行ポリシーオブジェクト

}

```
namespace std::execution {
inline constexpr sequenced_policy seq{ };
inline constexpr parallel_policy par{ };
```

}

実行ポリシーの型を直接書くのは面倒だ。

```
std::for_each( std::execution::parallel_policy{}, ... ) ;
```

そのため、標準ライブラリは実行ポリシーのオブジェクトを用意している。 par  $^{2}$   $^{2}$  par\_unseq がある。

```
std::for_each( std::execution::par, ... ) ;
```

並列アルゴリズムを使うには、このオブジェクトを並列アルゴリズムの第-渡すことになる。

### 第8章

# 数学の特殊関数群

C++17 では数学の特殊関数群 (mathematical special functions) がヘッタイル <cmath> に追加された。

数学の特殊関数は、いずれも実引数を取って、規定の計算をし、結果を浮動 数型の戻り値として返す。

数学の特殊関数は double, float, long double 型の 3 つのオーバーロード それぞれ、関数名の最後に、何もなし、f, 1 というサフィックスで表現される

double function\_name(); // 何もなし float function\_namef(); // f long double function\_namel(); // l

数学の特殊関数の説明は、関数の宣言、効果、戻り値、注意がある。

もし、数学の特殊関数に渡した実引数が NaN(Not a Number)である場合

の戻り値も NaN になる。ただし定義域エラーは起こらない。 それ以外の場合で、関数が定義域エラーを返すべきときは、

- 関数の戻り値の記述で、定義域が示されていて実引数が示された定義が るとき
- 実引数に対応する数学関数の結果の値が非ゼロの虚数部を含むとき
- 実引数に対応する数学関数の結果の値が数学的に定義されていないと

別途示されていない場合、関数はすべての有限の値、負の無限大、正の無限っても定義されている。

数学関数が与えられた実引数の値に対して定義されているというとき、それのいずれかである。

• 実引数の値の集合に対して明示的に定義されている

第8章 数学の特殊関数群

ある関数の効果が実装定義 (implementation-defined) である場合、その効果 C++ 標準規格で定義されず、C++ 実装はどのように実装してもよいという意味

### 8.1 ラゲール多項式 (Laguerre polynomials)

double laguerre(unsigned n, double x);
float laguerref(unsigned n, float x);
long double laguerrel(unsigned n, long double x);

効果:実引数 n, x に対するラゲール多項式 (Laguerre polynomials) を計算する戻り値:

$$\mathsf{L}_n(x) = \frac{e^x}{n!} \frac{\mathsf{d}^n}{\mathsf{d}x^n} (x^n e^{-x}), \quad \text{for } x \ge 0$$

 $n \in n, x \in x \cup t = 0$ 

注意: n >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。

# 8.2 ラゲール陪多項式 (Associated Laguerre polynomials)

double assoc\_laguerre(unsigned n, unsigned m, double x);
float assoc\_laguerref(unsigned n, unsigned m, float x);
long double assoc\_laguerrel(unsigned n, unsigned m, long double x);

効果:実引数 n, m, x に対するラゲール陪多項式(Associated Laguerre polynomi

を計算する。 戻り値:

$$\mathsf{L}_n^m(x) = (-1)^m \frac{\mathsf{d}^m}{\mathsf{d}x^m} \, \mathsf{L}_{n+m}(x), \quad \text{for } x \ge 0$$

n を n, m を m, x を x とする。

注意: n >= 128 もしくは m >= 128 のときの関数呼び出しの効果は実装定ある。

# 8.3 ルジャンドル多項式 (Legendre polynomials)

double legendre(unsigned 1, double x);
float legendref(unsigned 1, float x);
long double legendrel(unsigned 1, long double x);

効果・宝引数 1 ェビ対するルジャンドル多項式 (Legendre polynomials) を計算す

8.4 ルジャンドル陪関数 (Associated Legendre fund

戻り値:

$$P_{\ell}(x) = \frac{1}{2^{\ell} \ell!} \frac{d^{\ell}}{dx^{\ell}} (x^2 - 1)^{\ell}, \text{ for } |x| \le 1$$

 $l \in 1$ .  $x \in x$  とする。

注意: 1 >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。

# 8.4 ルジャンドル陪関数 (Associated Legendre functions)

double assoc\_legendre(unsigned 1, unsigned m, double x);
float assoc\_legendref(unsigned 1, unsigned m, float x);
long double assoc\_legendrel(unsigned 1, unsigned m, long double

効果:実引数 1, m, x に対するルジャンドル陪関数 (Associated Legendre fur を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{P}_{\ell}^{m}(x) = (1 - x^{2})^{m/2} \frac{\mathsf{d}^{m}}{\mathsf{d}x^{m}} \mathsf{P}_{\ell}(x), \quad \text{for } |x| \leq 1$$

 $l \in 1, m \in m, x \in x \in S$ 

注意: 1>=128 のときの関数呼び出しの効果は実装定義である。

# 8.5 球面ルジャンドル陪関数 (Spherical associated Legend functions)

double sph\_legendre( unsigned 1, unsigned m, double theta float sph\_legendref( unsigned 1, unsigned m, float theta) long double sph\_legendrel( unsigned 1, unsigned m,

long double theta);

効果: 実引数 1, m, theta (theta の単位はラジアン) に対する球面ルジャン ) 数 (Spherical associated Legendre functions) を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{Y}^m_\ell(\theta,0)$$

このとき、

$$\mathsf{Y}_{\ell}^{m}(\theta,\phi) = (-1)^{m} \left[ \frac{(2\ell+1)}{4\pi} \frac{(\ell-m)!}{(\ell+m)!} \right]^{1/2} \mathsf{P}_{\ell}^{m}(\cos\theta) e^{im\phi}, \quad \text{for } |m| \le 1$$

第8章 数学の特殊関数群

#include <cmath>

球面調和関数(Spherical harmonics)  $\mathbf{Y}_{\ell}^m(\theta,\phi)$  は、以下のような関数を定義ことによって計算できる。

```
#include <complex>
std::complex<double>
spherical_harmonics(unsigned 1, unsigned m, double theta, double ph:
{
    return std::sph_legendre(1, m, theta) * std::polar(1.0, m * phi)
```

ルジャンドル陪関数も参照。

}

# 8.6 エルミート多項式 (Hermite polynomials)

double hermite(unsigned n, double x);
float hermitef(unsigned n, float x);
long double hermitel(unsigned n, long double x);

効果:実引数 n, x に対するエルミート多項式 (Hermite polynomials) を計算する 戻り値:

$$H_n(x) = (-1)^n e^{x^2} \frac{d^n}{dx^n} e^{-x^2}$$

 $n \in \mathbf{n}, x \in \mathbf{x} \subset \mathbf{t}$ 

注意: n>=128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。

### 8.7 ベータ関数 (Beta function)

double beta(double x, double y);
float betaf(float x, float y);
long double betal(long double x, long double y);

効果:実引数 x, y に対するベータ関数(Beta function)を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{B}(x,y) = \frac{\Gamma(x)\,\Gamma(y)}{\Gamma(x+y)}, \quad \text{for } x > 0, \ y > 0$$

 $x \in x, y \in y \ge t \le s$ .

8.8 第1種完全楕円積分 (Complete elliptic integral of the first

# 8.8 第1種完全楕円積分(Complete elliptic integral of the kind)

double comp\_ellint\_1(double k);
float comp\_ellint\_1f(float k);
long double comp\_ellint\_11(long double k);

効果:実引数 k に対する第1種完全楕円積分 (Complete elliptic integral of kind) を計算する。

戻り値:

$$K(k) = F(k, \pi/2), \text{ for } |k| \le 1$$

kをkとする。

第1種不完全楕円積分も参照。

# 8.9 第 2 種完全楕円積分(Complete elliptic integral of the second kind)

double comp\_ellint\_2(double k);
float comp\_ellint\_2f(float k);
long double comp\_ellint\_2l(long double k);

効果:実引数 k に対する第2種完全楕円積分 (Complete elliptic integral second kind) を計算する。

戻り値:

$$E(k) = E(k, \pi/2), \text{ for } |k| \le 1$$

kをkとする。

第2種不完全楕円積分も参照。

# 8.10 第 3 種完全楕円積分(Complete elliptic integral of the third kind)

double comp\_ellint\_3(double k, double nu);
float comp\_ellint\_3f(float k, float nu);
long double comp\_ellint\_3l(long double k, long double nu);

第8章 数学の特殊関数群

効果:実引数 k, nu に対する第3種完全楕円積分 (Complete elliptic integral of third kind) を計算する。

戻り値:

$$\Pi(\nu, k) = \Pi(\nu, k, \pi/2), \text{ for } |k| \le 1$$

 $k \in \mathbf{k}, \nu \in \mathbf{nu} \ \mathsf{Ltd}$ 

第3種不完全楕円積分も参照。

# **8.11** 第 1 種不完全楕円積分(Incomplete elliptic integral of th first kind)

double ellint\_1(double k, double phi);
float ellint\_1f(float k, float phi);
long double ellint\_11(long double k, long double phi);

効果:実引数 k, phi (phi の単位はラジアン) に対する第 1 種不完全楕円積分 complete elliptic integral of the first kind) を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{F}(k,\phi) = \int_0^\phi \frac{\mathsf{d}\theta}{\sqrt{1 - k^2 \sin^2 \theta}}, \quad \text{for } |k| \le 1$$

 $k \in \mathbf{k}, \phi \in \mathbf{phi} \ \texttt{L}$  to 3.

# 8.12 第 2 種不完全楕円積分(Incomplete elliptic integroal of t second kind)

double double ellint\_2(double k, double phi);
float ellint\_2f(float k, float phi);
long double ellint\_2l(long double k, long double phi);

効果: 実引数 k, phi (phi の単位はラジアン) に対する第 2 種不完全楕円積分 complete elliptic integral of the second kind) を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{E}(k,\phi) = \int_0^\phi \sqrt{1 - k^2 \sin^2 \theta} \, \mathsf{d}\theta, \quad \text{for } |k| \le 1$$

8.13 第3種不完全楕円積分 (Incomplete elliptic integral of the third

# 8.13 第 3 種不完全楕円積分(Incomplete elliptic integral of third kind)

効果: 実引数 k, nu, phi (phi の単位はラジアン) に対する第3種不完全権 (Incomplete elliptic integral of the third kind) を計算する。

戻り値:

戻り値:

$$\Pi(\nu, k, \phi) = \int_0^{\phi} \frac{\mathrm{d}\theta}{(1 - \nu \sin^2 \theta) \sqrt{1 - k^2 \sin^2 \theta}}, \quad \text{for } |k| \le 1$$

 $\nu$   $\varepsilon$  nu, k  $\varepsilon$  k,  $\phi$   $\varepsilon$  phi  $\varepsilon$  phi  $\varepsilon$ 

# 8.14 第1種ベッセル関数 (Cylindrical Bessel functions of first kind)

double cyl\_bessel\_j(double nu, double x);
float cyl\_bessel\_jf(float nu, float x);
long double cyl\_bessel\_jl(long double nu, long double x);

効果:実引数 nu, k に対する第 1 種ベッセル関数(Cylindrical Bessel function first kind, Bessel functions of the first kind)を計算する。

$$\mathsf{J}_{\nu}(x) = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^k (x/2)^{\nu+2k}}{k! \Gamma(\nu+k+1)}, \quad \text{for } x \ge 0$$

 $\nu$   $\varepsilon$  nu, x  $\varepsilon$  x  $\varepsilon$   $\varepsilon$   $\varepsilon$   $\varepsilon$   $\varepsilon$ 

注意: nu >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。

# B.15 ノイマン関数(Cylindrical Neumann functions)

double cyl\_neumann(double nu, double x);
float cyl\_neumannf(float nu, float x);

第8章 数学の特殊関数群

効果:実引数 nu, x に対するノイマン関数 (Cylindrical Neumann functions, N mann functions)、またの名を第2種ベッセル関数 (Cylindrical Bessel function the second kind, Bessel functions of the second kind) を計算する。

戻り値:

$$\mathsf{N}_{\nu}(x) = \left\{ \begin{array}{ll} \frac{\mathsf{J}_{\nu}(x)\cos\nu\pi - \mathsf{J}_{-\nu}(x)}{\sin\nu\pi}, & \text{for } x \geq 0 \text{ and non-integral } \nu \\ \\ \lim_{\mu \to \nu} \frac{\mathsf{J}_{\mu}(x)\cos\mu\pi - \mathsf{J}_{-\mu}(x)}{\sin\mu\pi}, & \text{for } x \geq 0 \text{ and integral } \nu \end{array} \right.$$

 $\nu \in \text{nu}, x \in x$  とする。

注意: nu >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。 第1 種ベッセル関数も参照。

# 8.16 第1種変形ベッセル関数(Regular modified cylindrical Bessel functions)

double cyl\_bessel\_i(double nu, double x);
float cyl\_bessel\_if(float nu, float x);
long double cyl\_bessel\_il(long double nu, long double x);

効果:実引数 nu, x に対する第 1 種変形ベッセル関数 (Regular modified cylindr Bessel functions, Modified Bessel functions of the first kind) を計算する。 戻り値:

$$\mathsf{I}_{\nu}(x) = \mathrm{i}^{-\nu} \mathsf{J}_{\nu}(\mathrm{i} x) = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(x/2)^{\nu+2k}}{k! \; \Gamma(\nu+k+1)}, \quad \text{for } x \geq 0$$

 $\nu$   $\varepsilon$  nu, x  $\varepsilon$  x  $\varepsilon$   $\varepsilon$   $\varepsilon$   $\varepsilon$ 

注意: nu >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。 第1種ベッセル関数も参照。

# 8.17 第 2 種変形ベッセル関数(Irregular modified cylindrical Bessel functions)

効果・宇己粉 m. r に対する第9種変形が w わ ル関数 (Irrogular modified cylindr

8.18 第1種球ベッセル関数 (Spherical Bessel functions of the first

#### 戻り値:

$$\begin{split} \mathsf{K}_{\nu}(x) &= (\pi/2)\mathrm{i}^{\nu+1}(\mathsf{J}_{\nu}(\mathrm{i}x) + \mathrm{i}\mathsf{N}_{\nu}(\mathrm{i}x)) \\ &= \left\{ \begin{array}{c} \frac{\pi}{2}\frac{\mathsf{I}_{-\nu}(x) - \mathsf{I}_{\nu}(x)}{\sin\nu\pi}, & \text{for } x \geq 0 \text{ and non-integral } \nu \\ \\ \frac{\pi}{2}\lim_{\mu\to\nu}\frac{\mathsf{I}_{-\mu}(x) - \mathsf{I}_{\mu}(x)}{\sin\mu\pi}, & \text{for } x \geq 0 \text{ and integral } \nu \end{array} \right. \end{split}$$

 $\nu \in \text{nu}, x \in x \text{ } \text{cts}$ .

注意: nu >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。 第1種変形ベッセル関数、第1種ベッセル関数、ノイマン関数も参照。

# 8.18 第1種球ベッセル関数 (Spherical Bessel functions of first kind)

double sph\_bessel(unsigned n, double x);
float sph\_besself(unsigned n, float x);
long double sph\_bessell(unsigned n, long double x);

効果: 実引数 n, x に対する第 1 種球ベッセル関数 (Spherical Bessel function first kind) を計算する。

#### 戻り値:

$$j_n(x) = (\pi/2x)^{1/2} J_{n+1/2}(x), \text{ for } x \ge 0$$

注意: n>=128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。 第1種ベッセル関数も参照。

# 8.19 球ノイマン関数 (Spherical Neumann functions)

double sph\_neumann(unsigned n, double x);
float sph\_neumannf(unsigned n, float x);
long double sph\_neumannl(unsigned n, long double x);

効果:実引数 n, x に対する球ノイマン関数 (Spherical Neumann functions の名を第 2 種球ベッセル関数 (Spherical Bessel functions of the second kin 算する。

戻り値:

$$\mathsf{n}_n(x) = (\pi/2x)^{1/2} \mathsf{N}_{n+1/2}(x), \quad \text{for } x \ge 0$$

第8章 数学の特殊関数群

注意: n >= 128 のときの関数の呼び出しの効果は実装定義である。 ノイマン関数も参照。

### 8.20 指数積分 (Exponential integral)

double expint(double x);
float expintf(float x);
long double expintl(long double x);

効果:実引数 x に対する指数積分(Exponential integral)を計算する。

戻り値:

$$\operatorname{Ei}(x) = -\int_{-x}^{\infty} \frac{e^{-t}}{t} \, \mathrm{d}t$$

xをxとする。

### 8.21 リーマンゼータ関数 (Riemann zeta function)

double riemann\_zeta(double x);
float riemann\_zetaf(float x);
long double riemann\_zetal(long double x);

効果: 実引数 x に対するリーマンゼータ関数 (Riemann zeta function) を計算す戻り値:

$$\zeta(x) = \begin{cases} \sum_{k=1}^{\infty} k^{-x}, & \text{for } x > 1 \\ \frac{1}{1 - 2^{1-x}} \sum_{k=1}^{\infty} (-1)^{k-1} k^{-x}, & \text{for } 0 \le x \le 1 \\ 2^x \pi^{x-1} \sin(\frac{\pi x}{2}) \Gamma(1-x) \zeta(1-x), & \text{for } x < 0 \end{cases}$$

xをxとする。

### 第9章

# その他の標準ライブラリ

この章では C++17 で追加された細かいライブラリをまとめて解説する。

#### 9.1 ハードウェア干渉サイズ(キャッシュライン)

C++17 にはハードウェアの干渉サイズを取得するライブラリが入った。ウェアの干渉サイズとは、俗にキャッシュライン(cache line)とも呼ばれて念だ。

残念ながら、この 2017 年では、メモリーは極めて遅い。そのため、プロセはより高速にアクセスできるキャッシュメモリーを用意している。メモリーにキャッシュはある程度のまとまったバイト数単位で行われる。この単位が何んあるのかは実装依存だ。C++17 にはこのサイズを取得できるライブラリが入

ハードウェア干渉サイズを知りたい理由は2つある。2つのオブジェクトを

局所性を持つキャッシュに載せたくない場合と載せたい場合だ。

2つのオブジェクトのうち、一方は頻繁に変更し、もう一方はめったに変見場合で、2つのオブジェクトが同じ局所性を持つキャッシュに載っている場合変更するオブジェクトを変更しただけで、めったに変更しないオブジェクトもリーとの同期が発生する。

```
struct Data
{
    int counter;
    int status;
};
```

ここで、counter は頻繁に変更するが、status はめったに変更しない場合、 と status の間に適切なパディングを挿入することで、2 つのオブジェクトな

```
第9章 その他の標準ライブラリ
```

```
この場合には、std::hardware_destructive_interference_size が使える。
   struct Data
      int counter;
      std::byte padding[
          std::hardware_destructive_interference_size - sizeof(int)
      int status ;
   } ;
 反対に、2つのオブジェクトを同一の局所性を持つキャッシュに載せたい場
std::hardware_constructive_interference_size が使える。
 ハードウェア干渉サイズは <new> ヘッダーで以下のように定義されている。
   namespace std {
      inline constexpr size_t
         hardware_destructive_interference_size = 実装依存 ;
      inline constexpr size_t
         hardware_constructive_interference_size = 実装依存 ;
   }
```

# 9.2 std::uncaught\_exceptions

C++14 までは、まだ catch されていない例外がある場合は、bool st uncaught\_exception()で判定することができた。

```
};
  int main()
         Xx;
      }// 通常の破棄
         Xx;
         throw 0;
      }// スタックアンワインディング中
  }
 bool std::uncaught_exception() は、C++17 では非推奨扱いになった。
廃止される見込みだ。
 廃止の理由としては、単に以下のような例で役に立たないからだ。
  struct X
      ~X()
      {
         try {
            bool b = std::uncaught_exception() ;
         } catch( ... ) { }
      }
  };
 このため、int std::uncaught_exceptions() が新たに追加された。この関
在 catch されていない例外の個数を返す。
  struct X
  {
      ~X()
      {
         try {
            if ( int x = std::uncaught_exceptions() ; x > 1 )
                // ネストされた例外
```

例:

```
第 9 章 その他の標準ライブラリ

} catch( ... )

}
```

### 9.3 apply: tuple の要素を実引数に関数を呼び出す

```
template <class F, class Tuple>
constexpr decltype(auto) apply(F&& f, Tuple&& t);

std::apply は tuple のそれぞれの要素を順番に実引数に渡して関数を呼び出いパー関数だ。
ある要素数 N の tuple t と関数オブジェクト f に対して、apply(f, t) f(get<0>(t), get<1>(t), ..., get<N-1>(t)) のように f を関数呼び出しする
```

```
template < typename ... Types >
void f( Types ... args ) { }

int main()
{
    // int, int, int
    std::tuple t1( 1,2,3 ) ;

    // f( 1, 2, 3 ) の関数呼び出し
    std::apply( f, t1 ) ;

    // int, double, const char *
    std::tuple t2( 123, 4.56, "hello" ) ;

    // f( 123, 4.56, "hello" ) の関数呼び出し
    std::apply( f, t2 ) ;
}
```

#### 9.4 Searcher: 検索

C++17では <functional> に searcher というライブラリが追加された。順序のあるオブジェクトの集合に、ある部分集合 (パターン) が含まれているかを検索するためのライブラリだ。その最も一般的な応用例は文字列検索とないを検索するためのライブラリだ。その最も一般的な応用例は文字列検索とないを全体素したい部分集合 (パターン)を与え、operator ()で部分集合れているかを検索したい集合を与える。

この設計のライブラリが追加された理由は、パターンの検索のために何られ の準備を状態として保持しておきたい検索アルゴリズムを実装するためだ。

#### 9.4.1 default\_searcher

```
クラス std::default_searcher は以下のように宣言されている。
```

template < class ForwardIterator1,

```
class BinaryPredicate = equal_to<> >
class default_searcher {
public:
    // コンストラクター
    default_searcher(
        ForwardIterator1 pat_first, ForwardIterator1 pat_last
        , BinaryPredicate pred = BinaryPredicate() );

    // operator ()
    template <class ForwardIterator2>
    pair<ForwardIterator2, ForwardIterator2>
    operator()(ForwardIterator2 first, ForwardIterator2 last) co
};

コンストラクターで部分集合を受け取る。operator ()で集合を受け取り、
```

合(パターン)と一致した場所をイテレーターのペアで返す。見つからない場合

int main()
{
 std::string pattern("fox") ;

以下のように使う。

テレーターのペアは [last, last) になっている。

default\_searcher の検索は、内部的に std::search が使われる。

#### 9.4.2 boyer\_moore\_searcher

ターンが長い場合は効果的だ。

できる汎用的な設計になっている。

std::boyer\_moore\_searcher は Boyer-Moore 文字列検索アルゴリズムを使って 分集合の検索を行う。

Boyer-Moore 文字列検索アルゴリズムは極めて効率的な文字列検索のアルゴムだ。Boyer-Moore アルゴリズムは Bob Boyer と Strother Moore によって発われ、1977 年の Communications of the ACM で発表された。その内容は以下のして読むことができる。

http://www.cs.utexas.edu/~moore/publications/fstrpos.pdf

愚直に実装した文字列検索アルゴリズムは検索すべき部分文字列(パターン)。 索対象の文字列(コーパス)から探す際、パターンの先頭の文字をコーパスの先頭 ら順に探していき、見つかれば2文字目以降も一致するかどうかを調べる。

Boyer-Moore アルゴリズムはパターンの末尾の文字から調べる。文字が一致りければ、パターンから絶対に不一致であるとわかっている長さだけの文字を比較けに読み飛ばす。これによって効率的な文字列検索を実現している。

Boyer-Moore アルゴリズムは事前にパターンのどの文字が不一致ならば何文学 較せずに読み飛ばせるかという情報を計算した 2 つのテーブルを生成する必要でる。このため、Boyer-Moore アルゴリズムはメモリー使用量と検索前の準備時にいうコストがかかる。そのコストは、より効率的な検索により相殺できる。特に、

C++17に入る Boyer-Moore アルゴリズムに基づく検索は、テンプレートを た汎用的な char 型のような状態数の少ない型に対しての実装だけではなく、 シュを使ったハッシュマップのようなデータ構造を使うことにより、任意の型に

クラス boyer\_moore\_searcher は以下のように宣言されている。

```
class RandomAccessIterator1,
      class Hash = hash<
          typename iterator_traits<RandomAccessIterator1>::value_t
      class BinaryPredicate = equal_to<> >
   class boyer_moore_searcher {
   public:
      // コンストラクター
      boyer_moore_searcher(
          RandomAccessIterator1 pat_first,
          RandomAccessIterator1 pat_last,
          Hash hf = Hash(),
          BinaryPredicate pred = BinaryPredicate() );
      // operator ()
      template <class RandomAccessIterator2>
      pair<RandomAccessIterator2, RandomAccessIterator2>
      operator()( RandomAccessIterator2 first,
                 RandomAccessIterator2 last) const;
   } ;
 boyer_moore_searcher は、文字列以外にも適用できる汎用的な設計のため
シュ関数を取る。char 型のような取りうる状態数の少ない型以外が渡され
は、std::unordered map のようなメモリー使用量を削減できる何らかのデー
を使ってテーブルを構築する。
 使い方は default_searcher とほとんど変わらない。
   int main()
      std::string pattern("fox") ;
      std::boyer_moore_searcher
          fox_searcher( std::begin(pattern), std::end(pattern) );
      std::string corpus = "The quick brown fox jumps over the laz
      auto[first, last] = fox_searcher( std::begin(corpus),
          std::end(corpus) ) ;
      std::string fox( first, last );
   }
```

#### 9.4.3 boyer\_moore\_horspool\_searcher

std::boyer\_moore\_horspool\_searcher は Boyer-Moore-Horspool 検索アルジズムを使って部分集合の検索を行う。Boyer-Moore-Horspool アルゴリズムは N Horspool によって 1980 年に発表された。

参考: "Practical fast searching in strings" 1980

Boyer-Moore-Horspool アルゴリズムは内部テーブルに使うメモリー使用量 減しているが、最悪計算量の点でオリジナルの Boyer-Moore アルゴリズムには ている。つまり、実行時間の増大を犠牲にしてメモリー使用量を削減したトレー フなアルゴリズムと言える。

クラス boyer\_moore\_horspool\_searcher の宣言は以下のとおり。

```
template <
     class RandomAccessIterator1,
     class Hash = hash<
         typename iterator_traits<RandomAccessIterator1>::value_type>
     class BinaryPredicate = equal_to<> >
 class boyer_moore_horspool_searcher {
 public:
     // コンストラクター
     boyer_moore_horspool_searcher(
         RandomAccessIterator1 pat_first,
         RandomAccessIterator1 pat_last,
         Hash hf = Hash(),
         BinaryPredicate pred = BinaryPredicate() );
     // operator ()
     template <class RandomAccessIterator2>
     pair<RandomAccessIterator2, RandomAccessIterator2>
     operator()( RandomAccessIterator2 first,
                 RandomAccessIterator2 last) const;
 };
使い方は boyer moore horspool searcher と変わらない。
 int main()
     std::string pattern("fox") ;
```

}

9.5 sample: 乱択アルコ

### **9.5** sample: 乱択アルゴリズム

```
SampleIterator sample(
    PopulationIterator first, PopulationIterator last,
    SampleIterator out,
    Distance n, UniformRandomBitGenerator&& g);
```

C++17で <algorithm> に追加された std::sample は、標本を確率的に選抜めの乱択アルゴリズムだ。

[first, last) は標本を選択する先の集合を指すイテレーター。out は標準する先のイテレーター。n は選択する標本の個数。g は標本を選択するのに使生成器。戻り値は out。

ある要素の集合から、n個の要素を確率的に公平に選択したい場合に使うさきる。

#### 9.5.1 乱択アルゴリズム

std::sample を使う前に、まず正しい乱択アルゴリズムについて学ぶ必要 乱択アルゴリズムについて詳しくは、Donald E. Knuth の *The Arf of Co Programming* (以下 TAOCP、邦訳はアスキードワンゴから同名の書名でき ている)を参照。

ユーザーからの入力、計測した気象情報のデータ、サーバーへのアクセラン、世の中には膨大な量のデータが存在する。これらの膨大なデータをすべてるのではなく、標本を採取することによって、統計的にそれなりに信頼できる。

正しい全体のデータを推定することができる。そのためには n 個の標本を/ がかからない方法で選択する必要がある。バイアスのかからない方法で n f

はならない。それはバイアスがかかっている。

ある値の集合から、バイアスのかかっていないn個の標本を得るには、集合のての値が等しい確率で選ばれた上でn個を選択しなければならない。いったいすればいいのだろうか。

std::sample を使えば、100 個の値から 10 個の標本を得るのは、以下のようはくことが可能だ。

```
int main()
{
   // 100 個の値の集合
   std::vector<int> pop(100);
   std::iota( std::begin(pop), std::end(pop), 0 );
   // 標本を格納するコンテナー
   std::vector<int> out(10);
   // 乱数生成器
    std::array<std::uint32_t, sizeof(std::knuth_b)/4> a ;
    std::random_device r ;
    std::generate(std::begin(a), std::end(a), [&]{ return r(); } )
    std::seed_seq seed( std::begin(a), std::end(a) );
    std::knuth_b g( seed ) ;
    // 10 個の標本を得る
    sample( std::begin(pop), std::end(pop), std::begin(out), 10, g )
    // 標本を出力
    std::copy( std::begin(out), std::end(out),
               std::ostream_iterator<int>(std::cout, ", ") );
```

集合に含まれる値の数が N 個だとわかっているならば、それぞれの値につい n/m の確率で選ぶというのはどうだろうか。 100 個中 10 個を選ぶのであれば、1 の確率でそれぞれの値を標本として選択することになる。

この考えに基づく乱択アルゴリズムは以下のようになる。

- 1. 集合の要素数を N、選択すべき標本の数を n, i を 0 とする。
- 2. 0 ベースインデックスで i 番目の値を n/m の確率で標本として選択する。

}

このアルゴリズムをコードで書くと以下のようになる。

```
template < class PopulationIterator, class SampleIterator,
           class Distance, class UniformRandomBitGenerator >
SampleIterator sample(
   PopulationIterator first, PopulationIterator last,
   SampleIterator out,
   Distance n, UniformRandomBitGenerator&& g)
{
   auto N = std::distance( first, last ) ;
   // 確率 n/N で true を返すベルヌーイ分布
   double probability = double(n)/double(N) ;
   std::bernoulli_distribution d( probability ) ;
   // それぞれの値に対して
   std::for_each( first, last,
        [&] ( auto && value )
        ₹
           if ( d(g) )
           {// n/N の確率で標本として選択する
               *out = value ;
               ++out ;
           }
       });
   return out ;
}
```

残念ながらこのアルゴリズムは正しく動かない。この例では、100 個の値のら 10 個の標本を選択したい。しかし、選ばれる標本の数はプログラムの実行異なる。このアルゴリズムは、標本の数が平均的に 10 個選ばれることが期待が、運が悪いと 0 個や 100 個の標本が選ばれてしまう可能性がある。

ちなみに、TAOCP Vol. 2 によれば、このとき選ばれる標本数の標は  $\sqrt{n(1-n/N)}$  になる。

正しいアルゴリズムは、要素の集合のうちの (t+1) 番目の要素は、すでに要素が標本として選ばれたとき、(n-m)(N-t) の確率で選ぶものだ。

# 9.5.2 アルゴリズム S: 選択標本、要素数がわかっている集合からの標本の選択

Knuth の TAOCP Vol. 2 では、アルゴリズム S と称して、要素数のわかってい集合から標本を選択する方法を解説している。

アルゴリズムSは以下のとおり。

0 < n < N のとき、N 個の集合から n 個の標本をランダムに選択する。

- 1. t, m を 0 とする。t はこれまでに処理した要素数、m は標本として選択した素数とする。
- 2. 0 < U < N t の範囲の乱数 U を生成する。
- 3.  $U \ge n m$  であれば goto 5.
- 4. 次の要素を標本として選択する。m と t をインクリメントする。m < n れば、goto 2。そうでなければ標本は完了したのでアルゴリズムは終了する。
- 5. 次の要素を標本として選択しない。tをインクリメントする。goto 2。

実装は以下のようになる。

```
template < class PopulationIterator, class SampleIterator,</pre>
            class Distance, class UniformRandomBitGenerator >
SampleIterator
sample_s(
    PopulationIterator first, PopulationIterator last,
    SampleIterator out,
    Distance n, UniformRandomBitGenerator&& g)
{
    // 1.
    Distance t = 0;
    Distance m = 0;
    const auto N = std::distance( first, last ) ;
    auto r = [\&]{
        std::uniform_int_distribution<> d(0, N-t) ;
        return d(g);
    } ;
    while ( m < n && first != last )</pre>
    {
        // 2. 3.
```

if (r() >= n - m)

9.5 sample: 乱択アルコ

```
++t;
    ++first;
}
else { // 4.
    *out = *first;
    ++first; ++out;
    ++m; ++t;
}
return out;
}
```

# 9.5.3 アルゴリズム R:保管標本、要素数がわからない集合からの標本の選

アルゴリズム S は集合の要素数が N 個であるとわかっている場合に、n 们を選択するアルゴリズムだ。では、もし N がわからない場合はどうすればいろうか。

現実には N がわからない状況がよくある。

ユーザーからの入力

た既存の標本と置き換える。

- シーケンシャルアクセスしか提供しておらず全部読み込まなければ要素からないテープデバイスからの入力
- ガイガーカウンターからの入力

このような要素数のわからない入力にアルゴリズム S を適用するには、また 部入力を得て、全体の要素数を確定させた上で、全要素に対してアルゴリズム 用させるという 2 段階の方法を使うことができる。

しかし、1段階の要素の巡回だけで済ませたい。要素数のわからない入力を て、その時点で公平に選択された標本を得たい。

アルゴリズム R はそのような状況で使えるアルゴリズムだ。

アルゴリズム R では、要素数のわからない要素の集合からn 個の標本を選そのために標本として選択した要素を保管しておき、新しい入力が与えられた、標本として選択するかどうかの判断をし、選択をするのであれば、保管し

アルゴリズム R は以下のとおり(このアルゴリズムは Knuth 本とは違う) n>0 のとき、 $size \geq n$  である未確定の size 個の要素数を持つ入力から、 m なることが n に選択する。 m なることが n に選択する。 m なることが n に

- 1. 入力から最初のn個を標本として選択し、保管する。 $1 \le j \le n$ の範囲で にj番目の標本を保管する。tの値をnとする。I[1], ..., I[n]は現在の を指す。 t は現在処理した入力の個数を指す。
- 2. 入力の終わりであればアルゴリズムを終了する。
  - $3. \ t$  をインクリメントする。 $1 \leq M \leq t$  の範囲の乱数 M を生成する。M
  - 4. 次の入力を I[M] に保管する。goto 2。
- 5. 次の入力を保管しない。goto 2。

実装は以下のようになる。

{

ならば goto 5。

```
template < class PopulationIterator, class SampleIterator,
```

```
class Distance, class UniformRandomBitGenerator >
SampleIterator sample_r(
    PopulationIterator first, PopulationIterator last,
    SampleIterator out,
    Distance n, UniformRandomBitGenerator&& g)
{
    Distance t = 0;
    auto result = out ;
    for ( ; (first != last) && (t != n) ; ++first, ++t, ++result )
        out[t] = *first ;
    }
    if ( t != n )
        return result ;
    auto I = [&](Distance j) -> decltype(auto) { return out[j-1] ; ]
    while ( first != last )
```

++t; std::uniform\_int\_distribution<Distance> d( 1, t ) ; auto M = d(g);

```
if ( M > n )
{
          ++first;
}
else {
          I(M) = *first;
          ++first;
}
return result;
}
```

#### 9.5.4 $C++ \mathcal{O}$ sample

ここまで説明したように、乱択アルゴリズムには 2 種類ある。入力の要素かっている場合のアルゴリズム S (選択標本) と、入力の要素数がわからないアルゴリズム R (保管標本) だ。

しかし、C++ に追加された乱択アルゴリズムの関数テンプレートの宣言にめに説明したように以下の1つしかない。並列アルゴリズムには対応していた。

```
template<
```

class PopulationIterator, class SampleIterator,
class Distance, class UniformRandomBitGenerator >

SampleIterator

生成器。戻り値は out。

sample(
 PopulationIterator first, PopulationIterator last,

SampleIterator out,

Distance n, UniformRandomBitGenerator&& g);

[first, last] は標本を選択する先の集合を指すイテレーター。out は標準する先のイテレーター。n は選択する標本の個数。g は標本を選択するのに使

sample は PopulationIterator と SampleIterator のイテレーターカテニよって、どちらのアルゴリズムを使うべきか判断している。

アルゴリズム S (選択標本)を使う場合、PopulationIterator は前方イテレ SampleIterator は出力イテレーターを満たさなければならない。

アルゴリズム R (保管標本) を使う場合、PopulationIterator は入力イテレ

}

第9章 その他の標準ライブラリ

PopulationIterator [first, last) から要素数を得る必要があり、そのたには PopulationIterator は前方イテレーターを満たしていなければならない。の場合、選択した標本はそのままイテレーターに出力すればいいので、出力な SampleIterator は出力イテレーターを満たすだけでよい。

場合は PopulationIterator の [first, last) から要素数を得ることができないで、要素数がわからないときに使えるアルゴリズム R (保管標本) を選択せざるない。その場合、入力を処理するに連れて、新たに選択した標本が既存の標本をきするので、出力先の SampleIterator はランダムアクセスイテレーターである。がある。

もし入力元の PopulationIterator が入力イテレーターしか満たさない場合、、

```
int main()
   std::vector<int> input ;
   std::knuth_b g ;
   // PopulationIterator は前方イテレーターを満たす
   // SampleIterator は出力イテレーターでよい
   std::sample(
                  std::begin(input), std::end(input),
                  std::ostream_iterator<int>(std::cout), 100
                  g);
   std::vector<int> sample(100);
   // PopulationIterator は入力イテレーターしか満たさない
   // SampleIterator にはランダムアクセスイテレーターが必要
   std::sample(
       std::istream_iterator<int>(std::cin),
       std::istream_iterator<int>{},
       std::begin(sample), 100, g );
```

注意が必要なこととして、C++ の sample は入力元の PopulationIterator がドイテレーター以上を満たす場合は、かならずアルゴリズム S (選択標本)を使ううことだ。これはつまり、要素数を得るために std::distance(first, last) がわるということを意味する。もしこの処理が非効率的なイテレーターを渡した場

必要以上に非効素的なコードになってしまう

9.5 sample: 乱択アルコ

```
int main()
      std::list<int> input(10000);
      std::list<int> sample(100) ;
      std::knuth_b g ;
      std::sample(
                     std::begin(input), std::end(input),
                     std::begin(sample), 100, g );
   }
以下のような意味を持つ。
   int main()
   {
      std::list<int> input(10000);
      std::list<int> sample(100) ;
      std::knuth_b g ;
      std::size_t count = 0;
      // 要素数の得るためにイテレーターを回す
      // 非効率的
      for( auto && e : input )
      { ++count ; }
      // 標本の選択のためにイテレーターを回す
      for ( auto && e : input )
      {/* 標本の選択 */}
   }
```

std::list のメンバー関数 size は定数時間であることが保証されているたのコードにおけるイテレーターを回すループは1回に抑えられる。しかし、std:は要素数を渡す実引数がないために要素数がイテレーターを全走査しなくてもている場合でも、非効率的な処理を行わなければならない。

もしランダムアクセスイテレーター未満、前方イテレーター以上のイテレーテゴリーのイテレーターの範囲から標本を選択したい場合で、イテレーターの指す要素数があらかじめわかっている場合は、自前でアルゴリズムSを実装しが効率がよい。

template < class PopulationIterator, class SampleIterator,

```
SampleIterator
sample_s(
    PopulationIterator first, PopulationIterator last,
    Distance size,
    SampleIterator out,
    Distance n, UniformRandomBitGenerator&& g)
{
    // 1.
    Distance t = 0;
    Distance m = 0;
    const auto N = size ;
    auto r = [\&]{
        std::uniform_int_distribution<> d(0, N-t) ;
        return d(g);
    };
    while ( m < n && first != last )
       // 2. 3.
        if (r() >= n - m)
        {// 5.
            ++t ;
            ++first;
        }
        else { // 4.
            *out = *first ;
            ++first ; ++out ;
            ++m ; ++t ;
        }
    }
    return out ;
}
```

# 9.6 shared\_ptr<T[]>: 配列に対する shared\_ptr

C++17 では、 $shared_ptr$  が配列に対応した。

```
{
    // 配列対応の shared_ptr
    std::shared_ptr< int [] > ptr( new int[5] );

    // operator [] で配列に添字アクセスできる
    ptr[0] = 42;

    // shared_ptr のデストラクターが delete[] を呼び出す
}
```

# 9.7 as\_const: const 性の付与

as\_const はヘッダーファイル <utility> で定義されている。

```
template <class T> constexpr add_const_t<T>& as_const(T& t) noex
{
    return t;
}
```

as\_const は引数として渡した lvalue リファレンスを const な lvalue リフスにキャストする関数だ。const 性を付与する手軽なヘルパー関数として使うできる。

```
// 1
template < typename T >
void f(T&) {}
// 2、こちらを呼び出したい
template < typename T >
void f(T const &) { }

int main()
{
   int x{};
   f(x); // 1

   // const を付与する冗長な方法
   int const & ref = x;
   f(ref); // 2
```

}

```
第9章 その他の標準ライブラリ
```

```
// 簡潔
f(std::as_const(x)); // 2
```

# **9.8** make\_from\_tuple: tuple の要素を実引数にコンストラクタ

#### を呼び出す

のオブジェクトを返す。

make\_from\_tuple はヘッダーファイル <tuple> で定義されている。

```
template <class T, class Tuple>
constexpr T make_from_tuple(Tuple&& t);
```

apply は tuple の要素を実引数に関数を呼び出すライブラリだが、make\_from\_tu は tuple の要素を実引数にコンストラクターを呼び出すライブラリだ。

ある型 T と要素数 N の tuple t に対して、make\_from\_tuple<T>(t) は、T  $\underline{t}$  T( get<0>(t), get<1>(t), ..., get<N-1>(t) ) のように構築して、構築した

```
class X
{
    template < typename ... Types >
    T( Types ... ) { }
} ;
int main()
{
    // int, int, int
    std::tuple t1(1,2,3);
    // X(1,2,3)
    X x1 = std::make_from_tuple<X>( t1 )
    // int, double, const char *
    std::tuple t2( 123, 4.56, "hello" );
    // X(123, 4.56, "hello")
    X x2 = std::make_from_tuple<X>( t2 ) ;
}
```

9.9 invoke: 指定した関数を指定した実引数で呼

### 9.9 invoke: 指定した関数を指定した実引数で呼び出す

invoke はヘッダーファイル <functional> で定義されている。

```
template <class F, class... Args>
invoke_result_t<F, Args...> invoke(F&& f, Args&&... args)
noexcept(is_nothrow_invocable_v<F, Args...>);
```

invoke(f, t1, t2, ..., tN)は、関数fをf(a1, a2, ..., aN)  $\sigma$  呼び出す。

より正確には、C++ 標準規格の INVOKE(f, t1, t2, ..., tN) と同じ規則出す。これにはさまざまな規則があり、たとえばメンバー関数へのポインタータメンバーへのポインター、またその場合に与えるクラスへのオブジェクトガレンスかポインターか reference\_wrapper かによっても異なる。その詳細に

INVOKE は std::function や std::bind でも使われている規則なので、標準ラリと同じ挙動ができるようになると覚えておけばよい。

#### 例:

は解説しない。

```
void f( int ) { }

struct S
{
    void f( int ) ;
    int data ;
};

int main()
{
    // f( 1 )
    std::invoke( f, 1 ) ;

S s ;

    // (s.*&S::f)(1)
    std::invoke( &S::f, s, 1 ) ;
    // ((*&s).*&S::f)(1)
```

}

```
第9章 その他の標準ライブラリ
```

```
// s.*&S::data
std::invoke( &S::data, s ) ;
```

# **9.10 not\_fn**: 戻り値の否定ラッパー

not\_fn はヘッダーファイル <functional> で定義されている。

template <class F> unspecified not\_fn(F&& f);

関数オブジェクト f に対して  $not_fn(f)$  を呼び出すと、戻り値として何らかの「オブジェクトが返ってくる。その関数オブジェクトを呼び出すと、実引数を f になて f を関数呼び出しして、戻り値を operator ! で否定して返す。

```
int main()
{
    auto r1 = std::not_fn( []{ return true ; } ) ;
    r1() ; // false
    auto r2 = std::not_fn( []( bool b ) { return b ; } ) ;
    r2(true) ; // false
}
```

すでに廃止予定になった not1, not2 の代替品。

### 9.11 メモリー管理アルゴリズム

C++17 ではヘッダーファイル <memory> にメモリー管理用のアルゴリズムが された。

### 9.11.1 addressof

template <class T> constexpr T\* addressof(T& r) noexcept;

addressof は C++17 以前からもある。addressof(r) は r のポインターを取行

#### 9.11.2 uninitialized\_default\_construct

template <class ForwardIterator>

[](void \* ptr){ ::operator delete(ptr) ; } );

std::string \* ptr = static cast<std::string \*>( raw ptr.get(

```
std::uninitialized_default_construct_n( ptr, 10 );
       std::destroy_n( ptr, 10 );
   }
9.11.3 uninitialized_value_construct
   template <class ForwardIterator>
   void uninitialized_value_construct(
       ForwardIterator first, ForwardIterator last);
   template <class ForwardIterator, class Size>
   ForwardIterator uninitialized_value_construct_n(
       ForwardIterator first, Size n);
 使い方は uninitialized_default_construct と同じ。ただし、こちらはデフェ
ト初期化ではなく値初期化する。
9.11.4 uninitialized_copy
   template <class InputIterator, class ForwardIterator>
   ForwardIterator
   uninitialized_copy( InputIterator first, InputIterator last,
                      ForwardIterator result):
   template <class InputIterator, class Size, class ForwardIterator>
   ForwardIterator
   uninitialized_copy_n(
                          InputIterator first, Size n,
                          ForwardIterator result):
  [first, last] の範囲、もしくは first から n 個の範囲の値を、result の指
初期化のメモリーにコピー構築する。
   int main()
       std::vector<std::string> input(10, "hello") ;
       std::shared_ptr<void> raw_ptr
           ::operator new( sizeof(std::string) * 10 ),
```

[](void \* ptr){ ::operator delete(ptr) ; } );

```
std::uninitialized_copy_n( std::begin(input), 10, ptr );
std::destroy_n( ptr, 10 );
}
```

#### 9.11.5 uninitialized\_move

使い方はuninitialized\_copy と同じ。ただしこちらはコピーではなくムー

ForwardIterator result);

#### 9.11.6 uninitialized\_fill

```
template <class ForwardIterator, class T>
void uninitialized_fill(
    ForwardIterator first, ForwardIterator last,
    const T& x);

template <class ForwardIterator, class Size, class T>
ForwardIterator uninitialized_fill_n(
    ForwardIterator first, Size n,
    const T& x);
```

[first, last] の範囲、もしくは first から n 個の範囲の未初期化のメモコンストラクターに実引数 x を与えて構築する。

#### **9.11.7 destory**

```
template <class T>
void destroy_at(T* location);
```

```
template <class ForwardIterator>
void destroy(ForwardIterator first, ForwardIterator last);

template <class ForwardIterator, class Size>
ForwardIterator destroy_n(ForwardIterator first, Size n);
```

[first, last] の範囲、もしくは first から n 個の範囲に destroy\_at を呼び出

## 9.12 shared\_ptr::weak\_type

C++17 では shared\_ptr に weak\_type というネストされた型名が追加された。れは shared\_ptr に対する weak\_ptr の typedef 名となっている。

```
namespace std {
   template < typename T >
   class shared_ptr
       using weak_type = weak_ptr<T> ;
   } ;
   }
使い方:
   template < typename Shared_ptr >
   void f( Shared_ptr sptr )
       // C++14
       auto wptr1 = std::weak_ptr<
                       typename Shared_ptr::element_type
                   >( sptr ) ;
       // C++17
       auto wptr2 = typename Shared_ptr::weak_type( sptr ) ;
   }
```

# 9.13 void\_t

ヘッダーファイル <type\_traits> で定義されている void\_t は以下のようにれている。

```
namespace std {

template < class ... >
using void_t = void;
}
```

void\_t は任意個の型をテンプレート実引数として受け取る void 型だ。このテンプレートメタプログラミングにおいてとても便利なので、標準ライブラリされた。

# 9.14 bool\_constant

```
ヘッダーファイル <type_traits> に bool_constant が追加された。
```

```
template <bool B>
using bool_constant = integral_constant<bool, B>;
using true_type = bool_constant<true>;
using false_type = bool_constant<false>;
```

今まで integral\_constant を使っていた場面で特に bool だけが必要な場 C++17 以降は単に std::true\_type か std::false\_type と書くだけでよくな

# 9.15 type\_traits

C++17 では <type\_traits> に機能追加が行われた。

## **9.15.1** 変数テンプレート版 traits

C++17 では、既存の traits に変数テンプレートを利用した \_v 版が追加さたとえば、is\_integral<T>::value と書く代わりに is\_integral\_v<T> と書

```
template < typename T >
void f(Tx)
{
    constexpr bool b1 = std::is_integral<T>::value ; // データメンパー
    constexpr bool b2 = std::is_integral_v<T> ; // 変数テンプレート
    constexpr bool b3 = std::is_integral<T>{} ; // operator bool()
}
```

### 9.15.2 論理演算 traits

C++17 ではクラステンプレート conjunction, disjunction, negation が追加た。これはテンプレートメタプログラミングで論理積、論理和、否定を手軽に扱めの traits だ。

### conjunction: 論理積

}

template<class... B> struct conjunction;

クラステンプレート conjunction<B1, B2, ..., BN> はテンプレート実引数 B1, ..., BN に論理積を適用する。conjunction はそれぞれのテンプレート実引数 Bi して、bool(Bi::value) が false となる最初の型を基本クラスに持つか、あるいし後の BN を基本クラスに持つ。

```
int main()
{
    using namespace std;

    // is_void<void>を基本クラスに持つ
    using t1 =
        conjunction<
            is_same<int, int>, is_integral<int>,
        is_void<void>>;

    // is_integral<double>を基本クラスに持つ
    using t2 =
        conjunction<
        is_same<int, int>, is_integral<double>,
        is_soid<void>>;
```

```
disjunction: 論理和
   template<class... B> struct disjunction;
 クラステンプレート disjunction<B1, B2, ..., BN>はテンプレート実引数
..., BN に論理和を適用する。disjunction はそれぞれのテンプレート実引数
して、bool(Bi::value)が true となる最初の型を基本クラスに持つか、ある
後の BN を基本クラスに持つ。
   int main()
   {
      using namespace std;
      // is_same<int,int>を基本クラスに持つ
      using t1 =
         disjunction<
             is_same<int, int>, is_integral<int>,
             is_void<void> > ;
      // is_void<int>を基本クラスに持つ
      using t2 =
         disjunction<
             is_same<int, double>, is_integral<double>,
             is_void<int> > ;
   }
negation: 否定
   template<class B> struct negation;
 クラステンプレート negation<B> は B に否定を適用する。negation は基本
として bool_constant<!bool(B::value)> を持つ。
   int main()
   {
      using namespace std;
```

// false
constexpr bool b1 = negation< true\_type >::value ;
// true
constexpr bool b2 = negation

#### 9.15.3 is\_invocable: 呼び出し可能か確認する traits

```
template <class Fn, class... ArgTypes>
struct is_invocable;

template <class R, class Fn, class... ArgTypes>
struct is_invocable_r;

template <class Fn, class... ArgTypes>
struct is_nothrow_invocable;

template <class R, class Fn, class... ArgTypes>
struct is_nothrow_invocable_r;
```

is\_invocable はテンプレート実引数で与えられた型 Fn がパラメーターパッArgTypes をパック展開した結果を実引数に関数呼び出しできるかどうか、そしての戻り値は R へ暗黙変換できるかどうかを確認する traits だ。呼び出せるのでは true\_type, そうでなければ false\_type を基本クラスに持つ。

is\_invocable は関数呼び出しした結果の戻り値の型については問わない。

 $is_{invocable_r}$  は呼び出し可能性に加えて、関数呼び出しした結果の戻り値の  $is_{invocable_r}$  は呼び出しず  $is_{invocable_r}$  は呼び出しず  $is_{invocable_r}$  は呼び出しまない。

is\_nothrow\_invocable と is\_nothrow\_invocable\_r は、関数呼び出し(および) 値型 R への暗黙変換)が無例外保証されていることも確認する。

```
int f( int, double ) ;
int main()
{
    // true
    constexpr bool b1 =
        std::is_invocable< decltype(&f), int, double >{};
    // true
    constexpr bool b2 =
        std::is_invocable< decltype(&f), int, int >{};

    // false
    constexpr bool b3 =
        std::is_invocable< decltype(&f), int >{};
```

```
std::is_invocable< decltype(&f), int, std::string >{} ;

// true
constexpr bool b5 =
std::is_invocable_r< int, decltype(&f), int, double >{}

// false
constexpr bool b6 =
std::is_invocable_r< double, decltype(&f), int, double >
}

9.15.4 has_unique_object_representations: 同値の内部表現が同一か存
traits
template <class T>
```

has\_unique\_object\_representations<T> は、T型がトリビアルにコピー可能でする2つのオブジェクトの内部表現が同じ場合に、trueを返falseを返す例としては、オブジェクトがパディング(padding)と呼ばれイメント調整などのための値の表現に影響しないストレージ領域を持つ場合

ディングビットの値は同値に影響しないので、false を返す。 たとえば以下のようなクラス X は、

struct has\_unique\_object\_representations ;

```
struct X
{
    std::uint8_t a;
    std::uint32_t b;
};
```

ある実装においては、4 バイトにアライメントする必要があり、そのオブジェ本当のレイアウトは以下のようになっているかもしれない。

```
struct X
{
    std::uint8_t a ;
    std::byte unused_padding[3] ;
    std::uint32 t b ;
```

この場合、unused\_padding の値には意味がなく、クラス X の同値比較には用いれない。この場合、std::has\_unique\_representations\_v<X> は false になる。

### 9.15.5 is\_nothrow\_swappable: 無例外 swap 可能か確認する traits

```
template <class T>
struct is_nothrow_swappable;

template <class T, class U>
struct is_nothrow_swappable_with;
```

is\_nothrow\_swappable<T> は T 型が swap で例外を投げないときに true を返す is\_nothrow\_swappable\_with<T, U> は、T 型と U 型を相互に swap するときに を投げないときに true を返す。

## 9.16 コンテナーで不完全型のサポート

注意:この説明は上級者向けだ。

C++17 では以下のコードが合法になった。このコードの挙動は C++14 までい 装依存であった。

```
struct X
{
    std::vector<X> v ;
    std::list<X> l ;
    std::forward_list<X> f ;
} ;
```

クラスはクラス定義の終了である } を持って完全型となる。クラススコープに入されたクラス名は、クラス定義の中ではまだ完全型ではない。不完全型をコ

ナーの要素型に指定した場合の挙動は、C++14までは規定されていなかった。 C++17では、vector, list, forward\_listに限り、要素型に一時的に不完全!

許すようになった。実際にコンテナーを使う際には完全型になっていなければない。

## 9.17 emplace の戻り値

C++17 ではシーケンスコンテナーの emplace front/emplace back queue

```
そのため、C++14では以下のように書いていたコードが、
int main()
{
    std::vector<int> v;
    v.emplace_back(0); // void
    int value = v.back();
}
以下のように書けるようになった。
int main()
{
    std::vector<int> v;
    int value = v.emplace_back(0);
}
```

# 9.18 map と unordered\_map の変更

map と unordered\_map に、try\_emplace と insert\_or\_assign という 2 つの に関数が入った。このメンバー関数は multi\_map と unordered\_multi\_map になれていない。

### 9.18.1 try\_emplace

```
template <class... Args>
pair<iterator, bool>
try_emplace(const key_type& k, Args&&... args);

template <class... Args>
iterator
try_emplace(
    const_iterator hint,
    const key_type& k, Args&&... args);
```

従来の emplace は、キーに対応する要素が存在しない場合、要素が ar emplace 構築されて追加される。もし、キーに対応する要素が存在する場合、

```
第9章 その他の標準ライブラリ
である。
  int main()
      std::map< int, std::unique_ptr<int> > m ;
      // すでに要素が存在する
      m[0] = nullptr;
      auto ptr = std::make_unique<int>(0) ;
      // emplace は失敗する
      auto [iter, is_emplaced] = m.emplace( 0, std::move(ptr) ) ;
      // 結果は実装により異なる
      // ptr はムーブされているかもしれない
      bool b = ( ptr != nullptr ) ;
  }
 この場合、実際に map に要素は追加されていないのに、ptr はムーブされてしま
かもしれない。
 このため、C++17では、要素が追加されなかった場合 args はムーブされない
とが保証される try_emplace が追加された。
  int main()
  {
      std::map< int, std::unique_ptr<int> > m ;
      // すでに要素が存在する
      m[0] = nullptr ;
      auto ptr = std::make_unique<int>(0) ;
      // emplace は失敗する
      auto [iter, is_emplaced] = m.emplace( 0, std::move(ptr) ) ;
      // true であることが保証される
      // ptr はムーブされていない
      bool b = ( ptr != nullptr ) ;
```

}

template <class M>
pair<iterator, bool>

```
insert_or_assign(const key_type& k, M&& obj);
   template <class M>
   iterator
   insert_or_assign(
      const_iterator hint,
      const key_type& k, M&& obj);
 insert_or_assign は key に連想された要素が存在する場合は要素を代入し
しない場合は要素を追加する。operator [] との違いは、要素が代入されたな
れたかが、戻り値の pair の bool でわかるということだ。
   int main()
   {
      std::map< int, int > m ;
      m[0] = 0 ;
          // 代入
          // is_inserted は false
          auto [iter, is_inserted] = m.insert_or_assign( 0, 1 );
      }
      {
          // 追加
          // is_inserted は true
          auto [iter, is_inserted] = m.insert_or_assign( 1, 1 );
      }
```

# **9.19** 連想コンテナーへの splice 操作

}

C++17 では、連想コンテナーと非順序連想コンテナーで splice 操作がせ された。

対象のコンテナーは map, set, multimap, multiset, unordered\_map, unordered\_multimap, unordered\_multiset だ。

ジェクトの要素をストレージと所有権ごと別のオブジェクトに移動する機能だ。

```
int main()
{
    std::list<int> a = {1,2,3};
    std::list<int> b = {4,5,6};

    a.splice( std::end(a), b, std::begin(b) );

    // a は{1,2,3,4}
    // b は{5,6}

    b.splice( std::end(b), a );

    // a は{}
    // b は{5,6,1,2,3,4}
}
```

連想コンテナーでは、ノードハンドルという仕組みを用いて、コンテナーのジジェクトから要素の所有権をコンテナーの外に出す仕組みで、splice 操作を行う

# 9.19.1 merge

すべての連想コンテナーと非順序連想コンテナーは、メンバー関数 merge を持いる。コンテナー a, b がアロケーター互換のとき、a.merge(b) は、コンテナー 要素の所有権をすべてコンテナー a に移す。

```
int main()
{
    std::set<int> a = {1,2,3};
    std::set<int> b = {4,5,6};

    // bの要素をすべてaに移す
    a.merge(b);

    // aは{1,2,3,4,5,6}
    // bは{}
}
```

もし、キーの重複を許さないコンテナーの場合で、値が重複した場合、重複した

int main()

```
std::set<int> a = {1,2,3} ;
      std::set<int> b = \{1,2,3,4,5,6\};
      a.merge(b);
      // a \ tx\{1,2,3,4,5,6\}
      // bは{1,2,3}
  }
 merge によって移動された要素を指すポインターとイテレーターは、要素の
も妥当である。ただし、所属するコンテナーのオブジェクトが変わる。
  int main()
  {
      std::set<int> a = {1,2,3} ;
      std::set < int > b = \{4,5,6\};
      auto iterator = std::begin(b) ;
      auto pointer = &*iterator ;
      a.merge(b);
      // iterator と pointer はまだ妥当
      // ただし要素は a に所属する
  }
```

#### 9.19.2 ノードハンドル

ノードハンドルとは、コンテナーオブジェクトから要素を構築したストレー 有権を切り離す機能だ。

ノードハンドルの型は、各コンテナーのネストされた型名 node\_type となる えば std::set<int> のノードハンドル型は、std::set<int>::node\_type とな

ノードハンドルは以下のようなメンバーを持っている。

```
class node_handle
{
```

int main()

#### 第9章 その他の標準ライブラリ

```
// ネストされた型名
                            // set 限定、要素型
    using value_type = ...;
    using key_type = ...;
                              // map 限定、キー型
    using mapped_type = ...;
                              // map 限定、マップ型
                              // アロケーターの型
    using allocator_type = ...;
    // デフォルトコンストラクター
    // ムーブコンストラクター
    // ムーブ代入演算子
    // 値へのアクセス
    value_type & value() const ; // set 限定
    key_type & key() const ; // map 限定
    mapped_type & mapped() const ; // map 限定
    // アロケーターへのアクセス
    allocator_type get_allocator() const ;
    // 空かどうかの判定
    explicit operator bool() const noexcept ;
    bool empty() const noexcept ;
    void swap( node_handle & ) ;
 } ;
set のノードハンドルはメンバー関数 value で値を得る。
 int main()
 {
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    auto n = c.extract(2) ;
    // n.value() == 2
    // cは{1,3}
 }
map のノードハンドルはメンバー関数 key と mapped でそれぞれの値を得る。
```

```
std::map< int, int > m =
        {1,1}, {2,2}, {3,3}
     } :
     auto n = m.extract(2);
     // n.key() == 2
     // n.mapped() == 2
     // m は{{1,1},{3,3}}
  }
 ノードハンドルはノードをコンテナーから切り離し、所有権を得る。そ
ノードハンドルによって得たノードは、元のコンテナーから独立し、元のコン
オブジェクトの破棄の際にも破棄されない。ノードハンドルのオブジェクトの
に破棄される。このため、ノードハンドルはアロケーターのコピーも持つ。
  int main()
  {
     std::set<int>::node_type n ;
     {
        std::set<int> c = { 1,2,3 } ;
        // 所有権の移動
        n = c.extract( std::begin(c) );
        // c が破棄される
     }
     // OK
     // ノードハンドルによって所有権が移動している
     int x = n.value();
     // n が破棄される
  }
```

#### **9.19.3 extract**: ノードハンドルの取得

```
node_type extract( const_iterator position ) ;
```

```
連想コンテナーと非順序連想コンテナーのメンバー関数 extract は、ノードハンルを取得するためのメンバー関数だ。
```

メンバー関数 extract(position) は、イテレーターの position が指す要素を、 ンテナーから除去して、その要素を所有するノードハンドルを返す。

```
int main()
{
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    auto n1 = c.extract( std::begin(c) ) ;

    // c は{2,3}
    auto n2 = c.extract( std::begin(c) ) ;

    // c は{3}
}
```

メンバー関数 extract(x) は、キーx がコンテナーに存在する場合、その要素・ンテナーから除去して、その要素を所有するノードハンドルを返す。存在しない合、空のノードハンドルを返す。

```
int main()
{
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    auto n1 = c.extract( 1 ) ;
    // cは{2,3}
    auto n2 = c.extract( 2 ) ;
    // cは{3}

    // キー4は存在しない
    auto n3 = c.extract( 4 ) ;
    // cは{3}
    // n3.empty() == true
}
```

キーの重複を許すコンテナーの場合、複数あるうちの1つの所有権が解放され

{

```
std::multiset<int> c = \{1,1,1\};
      auto n = c.extract(1) ;
      // cは{1,1}
  }
9.19.4 insert: ノードハンドルから要素の追加
  // キーの重複を許さないコンテナーの場合
  insert_return_type insert(node_type&& nh);
  // キーの重複を許すmulti コンテナーの場合
  iterator insert(node_type&& nh);
  // ヒント付きの insert
  iterator
                    insert(const_iterator hint, node_type&& nh);
 ノードハンドルをコンテナーのメンバー関数 insert の実引数に渡すと、
ンドルから所有権をコンテナーに移動する。
  int main()
  {
      std::set<int> a = {1,2,3} ;
      std::set<int> b = {4,5,6} ;
      auto n = a.extract(1) ;
      b.insert( std::move(n) ) ;
      // n.empty() == true
  }
 ノードハンドルが空の場合、何も起こらない。
  int main()
  {
      std::set<int> c ;
      std::set<int>::node_type n ;
      // 何も起こらない
```

c.insert( std::move(n) ) ;

キーの重複を許さないコンテナーに、すでにコンテナーに存在するキーと等しい を所有するノードハンドルを insert しようとすると、insert は失敗する。

```
int main()
{
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    auto n = c.extract(1) ;
    c.insert( 1 ) ;

    // 失敗する
    c.insert( std::move(n) ) ;
}
```

第一引数にイテレーター hint を受け取る insert の挙動は、従来の insert と「だ。要素が hint の直前に追加されるのであれば償却定数時間で処理が終わる。

ノードハンドルを実引数に受け取る insert の戻り値の型は、キーの重複です multi コンテナーの場合 iterator。キーの重複を許さないコンテナーの場insert\_return\_type となる。

multi コンテナーの場合、戻り値は追加した要素を指すイテレーターとなる。

```
int main()
{
    std::multiset<int> c { 1,2,3 } ;
    auto n = c.extract( 1 ) ;
    auto iter = c.insert( n ) ;
    // cは{1,2,3}
    // iterは1を指す
}
```

キーの重複を許さないコンテナーの場合、コンテナーにネストされ型名 insert\_return\_type が戻り値の型となる。たとえば set<int>の場 set<int>::insert\_return\_type となる。

insert\_return\_type の具体的な名前は規格上規定されていない。insert\_retutypeは以下のようなデータメンバーを持つ型となっている。

struct insert return type

```
iterator position;
      bool inserted;
      node_type node ;
   } ;
 position は insert によってコンテナーに所有権を移動して追加された要素
イテレーター、inserted は要素の追加が行われた場合に true となる bool、
要素の追加が失敗したときにノードハンドルの所有権が移動されるノードハン
なる。
 insert に渡したノードハンドルが空のとき、inserted は false, position に
node は空になる。
   int main()
   {
      std::set<int> c = {1,2,3} ;
      std::set<int>::node_type n ; // 空
      auto [position, inserted, node] = c.insert( std::move(n) );
      // inserted == false
      // position == c.end()
      // node.empty() == true
  }
 insert が成功したとき、inserted は true, position は追加された要素
node は空になる。
   int main()
   {
      std::set < int > c = \{1,2,3\};
      auto n = c.extract(1) ;
      auto [position, inserted, node] = c.insert( std::move(n) ) ;
      // inserted == true
      // position == c.find(1)
```

insert が失敗したとき、つまりすでに同一のキーがコンテナーに存在し

// node.empty() == true

}

```
第9章 その他の標準ライブラリ
```

コンテナーの中の追加しようとしたキーに等しい要素を指す。insert に渡したドハンドルは未規定の値になる。

```
int main()
{
    std::set<int> c = {1,2,3} ;
    auto n = c.extract(1) ;
    c.insert(1) ;

auto [position, inserted, node] = c.insert( std::move(n) ) ;

// n は未規定の値
    // inserted == false
    // node は insert( std::move(n) ) を呼び出す前の n の値
    // position == c.find(1)
```

## 9.19.5 ノードハンドルの利用例

}

ノードハンドルの典型的な使い方は以下のとおり。

## ストレージの再確保なしに、コンテナーの一部の要素だけ別のコンテナーに移す

```
int main()
{
    std::set<int> a = {1,2,3} ;
    std::set<int> b = {4,5,6} ;

    auto n = a.extract(1) ;
    b.insert( std::move(n) ) ;
}
```

### コンテナーの寿命を超えて要素を存続させる

```
int main()
{
    std::set<int>::node_type n ;
```

```
{
    std::set<int> c = {1,2,3};
    n = c.extract(1);
    // cが破棄される
}

// コンテナーの破棄後も存続する
int value = n.value();
}
```

### map のキーを変更する

map ではキーは変更できない。キーを変更したければ、元の要素は削除しい要素を追加する必要がある。これには動的なストレージの解放と確保なる。

ノードハンドルを使えば、既存の要素のストレージに対して、所有権を map き剥がした上で、キーを変更して、もう一度 map に差し戻すことができる。

## 9.20 コンテナーアクセス関数

ヘッダーファイル <iterator> に、コンテナーアクセス関数として、フリー

```
第9章 その他の標準ライブラリ
```

```
呼び出す。
    int main()
{
        std::vector<int> v;
        std::size(v); // v.size()
        std::empty(v); // v.empty()
        std::data(v); // v.data()
}

このフリー関数は配列や std::initializer_list<T> にも使える。
    int main()
{
        int a[10];
        std::size(a); // 10
        std::empty(a); // 常に false
        std::data(a); // a
}
```

# 9.21 clamp

```
template<class T>
constexpr const T&
clamp(const T& v, const T& lo, const T& hi);
template<class T, class Compare>
constexpr const T&
clamp(const T& v, const T& lo, const T& hi, Compare comp);

ヘッダーファイル <algorithm> に追加された clamp(v, lo, hi) は値 v が lo かさい場合は lo を、hi より高い場合は hi を、それ以外の場合は v を返す。
int main()
{
```

std::clamp( 5, 0, 10 ); // 5 std::clamp( -5, 0, 10 ); // 0 std::clamp( 50, 0, 10 ); // 10 comp を実引数に取る clamp は comp を値の比較に使う clamp には浮動小数点数も使えるが、NaN は渡せない。

# 9.22 3 次元 hypot

```
float hypot(float x, float y, float z);
double hypot(double x, double y, double z);
long double hypot(long double x, long double y, long double z);
ヘッダーファイル <cmath> に 3 次元の hypot が追加された。
```

### 戻り値:

$$\sqrt{x^2 + y^2 + z^2}$$

# 9.23 atomic<T>::is\_always\_lock\_free

```
template < typename T >
struct atomic
{
    static constexpr bool is_always_lock_free = ...;
};
```

C++17 で <atomic> に追加された atomic<T>::is\_always\_lock\_fr atomic<T> の実装がすべての実行においてロックフリーであるとコンパイル間できる場合、true になる static constexpr な bool 型のデータメンバーだ。 atomic には、他にも bool を返すメンバー関数 is\_lock\_free があるが、こ行時にロックフリーであるかどうかを判定できる。is\_always\_lock\_free はこ

# 9.24 scoped\_lock:可变長引数 lock\_guard

ル時にロックフリーであるかどうかを判定できる。

```
std::scoped_lock クラス <T ...> は可変長引数版の lock_guard だ。
int main()
```

std::scoped\_lock のコンストラクターは複数のロックのオブジェクトのリフンスを取り、それぞれにデッドロックを起こさない方法でメンバー関数 lock を即出す。デストラクターはメンバー関数 unlock を呼び出す。

## 9.25 std::byte

C++17ではバイトを表現する型として std::byte がライブラリに追加された。 れは、コア言語の一部であり、別項で詳しく解説を行っている。

# 9.26 最大公約数 (gcd) と最小公倍数 (lcm)

C++17 ではヘッダーファイル <numeric> に最大公約数 (gcd) と最小公倍数 (1が追加された。

### 9.26.1 gcd: 最大公約数

template <class M, class N>

constexpr std::common type t<M.N> gcd(M m. N n)

9.26 最大公約数 (gcd) と最小公倍数

```
if ( n == 0 )
     return m ;
else
    return gcd( n, std::abs(m) % std::abs(n) ) ;
}
```

gcd(m, n) は m と n がともにゼロの場合ゼロを返す。それ以外の場合、|n| の最大公約数(Greatest Common Divisor)を返す。

### 9.26.2 lcm: 最小公倍数

```
template <class M, class N>
constexpr std::common_type_t<M,N> lcm(M m, N n)
{
   if ( m == 0 || n == 0 )
      return 0;
   else
      return std::abs(m) / gcd( m, n ) * std::abs(n) ;
}
```

lcm(m,n) は、m と n のどちらかがゼロの場合ゼロを返す。それ以外の場合、|n| の最小公倍数(Least Common Multiple)を返す。

## 第10章

# ファイルシステム

ヘッダーファイル <filesystem> で定義されている標準ライブラリのファイテムは、ファイルやディレクトリーとその属性を扱うためのライブラリだ。

一般に「ファイルシステム」といった場合、たとえば Linux の ext4, M Windows の FAT や NTFS, Apple Mac の HFS+ や APFS といったファイの属性を表現するためのストレージ上のデータ構造を意味する。C++ の標準ラリのファイルシステムとは、そのようなファイルシステムを実現するデータ操作するライブラリではない。ファイルシステムというデータ構造で抽象化ファイルやディレクトリーとその属性、それに付随する要素、たとえばパスペルやディレクトリーを操作するためのライブラリのことだ。

また、ファイルシステムライブラリでは、「ファイル」という用語は単に通常イルのみならず、ディレクトリー、シンボリックリンク、FIFO(名前付き/ソケットなどの特殊なファイルも含む。

本書ではファイルシステムライブラリのすべてを詳細に解説していない。こシステムライブラリは量が膨大なので、特定の関数の意味については、C++イラーに付属のリファレンスマニュアルなどを参照するとよい。

## 10.1 名前空間

ファイルシステムライブラリは std::filesystem 名前空間スコープの下にれている。

```
int main()
{
    std::filesystem::path p("/bin") ;
}
```

第 10 章 ファイルシステム

この名前空間は長いので、ファイルシステムライブラリを使うときは、関数のロックスコープ単位で using ディレクティブを使うか、名前空間エイリアスを使短い別名を付けるとよい。

```
void using_directive()
{
    // using ディレクティブ
    using namespace std::filesystem;

path p("/etc");
}

void namespace_alias()
{
    // 名前空間エイリアス
    namespace fs = std::filesystem;

fs::path p("/usr");
}
```

## 10.2 POSIX 準拠

C++ のファイルシステムのファイル操作の挙動は、POSIX 規格に従う。実 よっては POSIX に規定された挙動を提供できない場合もある。その場合は制限 囲内で、できるだけ POSIX に近い挙動を行う。実装がどのような意味のある挙

## 10.3 ファイルシステムの全体像

提供できない場合、エラーが通知される。

ファイルシステムライブラリの全体像を簡単に箇条書きすると以下のとおり。

- クラス path でファイルパス文字列を扱う
- 例外クラス filesystem\_error とクラス error\_code でエラー通知
- クラス file\_status でファイルの情報とパーミッションの取得、設定
- クラス directory\_entry でディレクトリーの情報の取得、設定
- クラス directory\_iterator でディレクトリー構造をイテレーターとして

### 10.4 エラー処理

ファイルシステムライブラリでエラーが発生した場合、エラーの通知方法に 類の方法がある。例外を使う方法と、ヘッダーファイル <system\_error> で気 ているエラー通知用のクラス std::error\_code へのリファレンスを実引数と してエラー内容を受け取る方法だ。

エラー処理の方法は、エラーの起こる期待度によって選択できる。一般に、 がめったに起こらない場合、エラーが起こるのは予期していない場合、エラー は例外を使ったほうがよい。エラーが頻繁に起こる場合、エラーが起こること できる場合、エラー処理には例外を使わないほうがよい。

#### 10.4.1 例外

{

ファイルシステムライブラリの関数のうち、std::error code & 型を実引数 ない関数は、以下のようにエラー通知を行う。

- OS によるファイルシステム操作においてエラーが発生した std::filesystem::filesystem\_error 型の例外が throw される。 path を実引数に取る関数の場合、filesystem\_error のメンバー関数
  - で実引数の path が得られる。2 つの path を実引数に取る関数の filesystem\_error のメンバー関数 path1, path2 で第一、第二引数がそ
- ストレージの確保に失敗した場合、既存の例外による通知が行われる

得られる。filesystem\_error はエラー内容に応じた error\_code を持つ

デストラクターは例外を投げない

例外を使ったエラー処理は以下のとおり。

```
int main()
   using namespace std::filesystem;
   try {
       // ファイル名から同じファイル名へのコピーによるエラー
       path file("foobar.txt") ;
       std::ofstream{ file } ;
       copy_file( file, file ) ;
```

#### 第 10 章 ファイルシステム

```
auto path1 = e.path1(); // 第一引数
         auto path2 = e.path2(); // 第二引数
         auto error_code = e.code() ; // error_code
         std::cout
             << "error number: " << error_code.value ()</pre>
             << "\nerror message: " << error_code.message()</pre>
             << "\npath1: " << path1
             << "\npath2: " << path2 << '\n';</pre>
     }
 }
filesystem_error は以下のようなクラスになっている。
 namespace std::filesystem {
     class filesystem_error : public system_error {
     public:
         // 第一引数
         const path& path1() const noexcept;
         // 第二引数
         const path& path2() const noexcept;
         // エラー内容を人間が読める null 終端文字列で返す
         const char* what() const noexcept override;
     };
 }
```

#### 10.4.2 非例外

ファイルシステムライブラリの関数のうち、std::error\_code & 型を実引数に 関数は、以下のようにエラー通知を行う。

• OS によるファイルシステム操作においてエラーが発生した場合、error\_code の実引数がエラー内容に応じて設定される。エラーがない場合、error\_code を

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

// ファイル名から同じファイル名へのコピーによるエラー
```

の実引数に対してメンバー関数 clear() が呼ばれる。

```
std::ofstream{ file };
std::error_code error_code;
copy_file( file, file, error_code );

if ( error_code )
{ // エラーの場合
    auto path1 = file ; // 第一引数
    auto path2 = file ; // 第二引数

std::cout
    << "error number: " << error_code.value ()
    << "\nerror message: " << error_code.message()
    << "\npath1: " << path1
    << "\npath2: " << path2 << '\n';
}
```

# 10.5 path: ファイルパス文字列クラス

std::filesystem::path はファイルパスを文字列で表現するためのクラスケ列を表現するクラスとして C++ にはすでに std::string があるが、ファイルいう文字列を表現するために、別の専用クラスが作られた。

クラス path は以下の機能を提供する。

- ファイルパス文字列の表現
- ファイルパス文字列の操作

path はファイルパス文字列の表現と操作だけを提供するクラスで、物理プシステムへの変更のコミットはしない。

ファイルパス文字列がどのように表現されているかは実装により異なる。 環境では文字型を char 型として UTF-8 エンコードで表現する OS が

Microsoft Windows で本書執筆現在、文字型を wchar\_t として UTF-16 エンで表現する慣習になっている。

また、OS によってはラテンアルファベットの大文字小文字を区別しなか区別はするが無視されたりする実装もある。

クラス path はそのようなファイルパス文字列の差異を吸収してくれる。 クラス path には以下のようなネストされた型名がある。

#### 第 10 章 ファイルシステム

```
class path {
public:
    using value_type = see below ;
    using string_type = basic_string<value_type>;
    static constexpr value_type preferred_separator = see below ;
} ;
```

value\_type と string\_type は path が内部でファイルパス文字列を表現するのじう文字と文字列の型だ。preferred\_separator は、推奨されるディレクトリー区で文字だ。たとえば POSIX 互換環境では / が用いられるが、Microsoft Window は \ が使われている。

## **10.5.1 path**: ファイルパスの文字列

ファイルパスは文字列で表現する。C++ の文字列のエンコードには以下のもである。

- char: ネイティブナローエンコード
- wchar\_t: ネイティブワイドエンコード
- char: UTF-8 エンコード
- char16\_t: UTF-16 エンコード
- char32\_t: UTF-32 エンコード

path::value\_type がどの文字型を使い、どの文字列エンコードを使っているが 実装依存だ。path はどの文字列エンコードが渡されても、path::value\_type の 型と文字エンコードになるように自動的に変換が行われる。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

    // ネイティブナローエンコード
    path p1( "/dev/null" );

    // ネイティブワイドエンコード
    path p2( L"/dev/null" );

    // UTF-16 エンコード
    path p3( u"/dev/null" );

    // UTF-32 エンコード
    path p4( U"/dev/null" );
```

なので、どの文字列エンコードで渡しても動く。

C++ では UTF-8 エンコードの文字型は char で、これはネイティブナロコードの文字型と同じなので、型システムによって区別できない。そのため、文字列リテラルを渡すと、ネイティブナローエンコードとして認識される。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

// ネイティブナローエンコードとして解釈される
    path p( u8"ファイル名" );
}
```

このコードは、ネイティブナローエンコードが UTF-8 ではない場合、動くない移植性の低いコードだ。UTF-8 エンコードを移植性の高い方法でファイとして使いたい場合、u8path を使うとよい。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

// UTF-8 エンコードとして解釈される
    // 実装の使う文字エンコードに変換される
    path = u8path( u8"ファイル名" );
}
```

u8path(Source) は Source を UTF-8 エンコードされた文字列として扱うの常の文字列リテラルを渡すと、ネイティブナローエンコードが UTF-8 ではでは問題になる。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

// UTF-8 エンコードとして解釈される
    // ネイティブナローエンコードが UTF-8 ではない場合、問題になる
    path = u8path( "ファイル名" );
}
```

u8path を使う場合は、文字列は必ず UTF-8 エンコードしなければならない

#### 第 10 章 ファイルシステム

環境によっては、ファイルパスに使える文字に制限があり、また特定の文字列に別な意味を持つ予約語になっていることもあるので、移植性の高いプログラムの作に当たってはこの点でも注意が必要だ。たとえば、環境によっては大文字小文字に別をしないかもしれない。また、CON や AUX のような文字列が特別な意味を持つにしれない。

path に格納されているファイルパス文字列を取得する方法は、環境依存の文学エンコードとファイルパスの表現方法の差異により、さまざまな方法が用意される。

ファイルパス文字列のフォーマットには以下の2つがある。

- ネイティブ: 実装依存のフォーマット
- ジェネリック:汎用的な標準のフォーマット

POSIX 準拠の環境においては、ネイティブとジェネリックはまったく同じ POSIX 準拠ではない環境では、ネイティブとジェネリックは異なるフォーマッ 持つ可能性がある。

たとえば、Microsoft Windows では、ネイティブのファイルパス文字列はデクトリーの区切り文字に POSIX 準拠の / ではなく \ を使っている。

まずメンバー関数 native と c\_str がある。

これはクラス path が内部で使っている実装依存のネイティブな文字列型をそのま返すものだ。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

path p = current_path();

// 実装依存の basic_string の特殊化
path::string_type str = p.native();
```

public :

std::string string() const;

```
path::value_type const * ptr = p.c_str() ;
  }
 このメンバー関数を使うコードは移植性に注意が必要だ。
 strの型は path::string_type で、ptrの型は実装依存の path::value_typ
* だ。path::value_type と path::string_type は、char や wchar_t, std:
や std::wstring のような C++ が標準で定義する型ではない可能性がある。
 そして、path::string_type への変換関数 operator string_type() がある
  int main()
  {
      using namespace std::experimental::filesystem ;
      auto p = current_path() ;
      // 暗黙の型変換
      path::string_type str = p ;
  }
 path の operator string_type() は、ネイティブの文字列型を既存のファ
トリームライブラリでオープンできる形式に変換して返す。たとえば空白ス
むファイルパスのために、二重引用符で囲まれている文字列に変換されるた
ない。
  int main()
  {
      using namespace std::filesystem;
      path name("foo bar.txt") ;
      std::basic_ofstream<path::value_type> file( name ) ;
     file << "hello" ;
  }
 ネイティブのファイルパス文字列を string, wstring, u16string, u32stri
換して取得するメンバー関数に以下のものがある。
  class path {
```

#### 第 10 章 ファイルシステム

```
std::u16string u16string() const;
      std::u32string u32string() const;
  } ;
 このうち、メンバー関数 string はネイティブナローエンコードされた std::str
メンバー関数 u8string は UTF-8 エンコードされた std::string を返す。
   int main()
   {
      using namespace std::filesystem;
      path name("hello.txt") ;
      std::ofstream file( name.string() );
      file << "hello" ;
  }
 ファイルパス文字列をジェネリックに変換して返す generic_string()系の
バー関数がある。
   class path {
  public :
      std::string generic_string() const;
      std::wstring generic_wstring() const;
      std::string generic_u8string() const;
      std::u16string generic_u16string() const;
```

使い方はネイティブな文字列を返す string()系のメンバー関数と同じだ。

ファイルパスの文字列の文字型と文字列エンコードは環境ごとに異なるので、\* 性の高いコードを書くときには注意が必要だ。

現実的には、モダンな POSIX 準拠の環境では、文字型は char, 文字列類 std::string, エンコードは UTF-8 になる。

std::u32string generic\_u32string() const

Microsoft Windows の Win32 サブシステムと MSVC は POSIX 準拠ではな本書執筆時点では、歴史的経緯により、文字型は wchar\_t, 文字列型は std::wstrエンコードは UTF-16 となっている。

### 10.5.2 ファイルパスの操作

} ;

クラス path はファイルパス文字列の操作を提供している。std::string とは違

```
10.5 path: ファイルパス文字列
```

```
作を提供している。
 operator /, operator /= はセパレーターで区切ったファイルパス文字列の
行う。
   int main()
      using namespace std::filesystem;
      path p("/") ;
      // "/usr"
      p /= "usr" ;
      // "usr/local/include"
      p = p / "local" / "include" ;
   }
 operator += は単なる文字列の結合を行う。
   int main()
   {
      using namespace std::filesystem;
      path p("/") ;
      // "/usr"
      p += "usr" ;
      // "/usrlocal"
      p += "local" ;
      // "/usrlocalinclude"
      p += "include" ;
   }
 operator / と違い、operator + は存在しない。
 その他にも、path はさまざまなファイルパス文字列に対する操作を提供し
以下はその一例だ。
   int main()
   {
      using namespace std::filesystem;
```

path p( "/home/cpp/src/main.cpp" ) :

#### 第 10 章 ファイルシステム

```
// "main.cpp"
path filename = p.filename();
// "main"
path stem = p.stem();
// ".cpp"
path extension = p.extension();
// "/home/cpp/src/main.o"
p.replace_extension("o");
// "/home/cpp/src/"
p.remove_filename();
}
```

path はファイルパス文字列に対してよく行う文字列処理を提供している。ためばファイル名だけ抜き出す処理、拡張子だけ抜き出す処理、拡張子を変える処理とだ。

## 10.6 file\_status

クラス file\_status はファイルのタイプとパーミッションを保持するクラスだ。ファイルのタイプとパーミッションはファイルパス文字列を指定して取得する法が別途あるが、その方法では毎回物理ファイルシステムへのアクセスが発生すfile\_status はファイルのタイプとパーミッション情報を保持するクラスとして、わばキャッシュの役割を果たす。

file\_status は物理ファイルシステムへの変更のコミットはしない。

file\_status クラスは status(path) もしくは status(path, error\_code) できる。あるいは、directory\_entry のメンバー関数 status() から取得できる。

タイプというのは、ファイルが種類を表す enum 型 file\_type で、通常のファク・ やディレクトリーやシンボリックリンクといったファイルの種類を表す。

パーミッションというのは、ファイルの権限を表すビットマスクの enum 型 peで、ファイルの所有者とグループと他人に対す読み込み、書き込み、実行のそれの権限を表している。この値は POSIX の値と同じになっている。

ファイルのタイプとパーミッションを取得するメンバー関数は以下のとおり。

```
class file_type {
public :
    file_type type() const noexcept;
    perms permissions() const noexcept;
```

```
以下のように使う。
 int main()
     using namespace std::filesystem;
     directory_iterator iter("."), end ;
     int regular_files = 0 ;
     int execs = 0;
     std::for_each( iter, end, [&]( auto entry )
         auto file_status = entry.status() ;
         // is_regular_file( file_status ) でも可
         if (file_status.type() == file_type::regular )
             ++regular_files;
         constexpr auto exec_bits =
             perms::owner_exec | perms::group_exec | perms::other
         auto permissions = file_status.permissions();
         if ( ( permissions != perms::unknown) &&
                 (permissions & exec_bits) != perms::none )
             ++execs ;
     });
     std::cout
         << "Current directory has "
         << regular_files
         << " regular files.\n" ;
         << execs
         << " files are executable.\n" ;
 }
```

このプログラムは、カレントディレクトリーにある通常のファイルの数と、 能なファイルの数を表示する。

ファイルパーミッションを表現する enum 型 perms は、パーミッションがった。 この値は OxFFFF なのでビット演算をする場合にが必要だ。

で、明示的なキャストが必要だ。

```
// エラー
std::filesystem::perms a = 0755;

// OK
std::filesystem::perms b = std::filesystem::perms(0755);

ファイルのタイプとパーミッションを書き換えるメンバー関数は以下のとおり。
```

void type(file\_type ft) noexcept; void permissions(perms prms) noexcept;

ただし、file\_status というのは単なるキャッシュ用のクラスなので、file\_statusのタイプとパーミッションを「書き換える」というのは、単に file\_statusのオブニクトに保持されている値を書き換えるだけで、物理ファイルシステムに反映されるではない。物理ファイルシステムを書き換えるには、フリー関数の permission使う。

# 10.7 directory\_entry

クラス directory\_entry はファイルパス文字列を保持し、ファイルパスの指し、ファイルの情報を取得できるクラスだ。

物理ファイルシステムからファイルの情報を毎回読むのは非効率的 directory\_entry はいわばファイル情報のキャッシュとしての用途を持つ。

directory\_entry は物理ファイルシステムから情報を読み込むだけで、変更のミットはしない。

directory\_entry の構築は、コンストラクターに引数として path を与える directory\_iterator と recursive\_directory\_iterator からも得ることができる

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;
    path p(".");

// ファイルパス文字列から得る
    directory_entry e1(p);
```

```
directory_entry e2 = *i1 ;
      recursive_directory_iterator i2(p) ;
      directory_entry e3 = *i2 ;
  }
 directory_entry にはさまざまなファイル情報を取得するメンバー関数が
これは同じ機能のものがフリー関数でも用意されている。directory_entry
と、ファイル情報をキャッシュできるため、同じファイルパスに対して、物理
ルシステムの変更がないときに複数回のファイル情報取得を行うのが効率的に
  int main()
  {
      using namespace std::filesystem;
      directory_entry entry("/home/cpp/foo");
      // 存在確認
      bool b = entry.exists();
      // "/home/cpp/foo"
      path p = entry.path() ;
      file_status s = entry.status() ;
      // ファイルサイズを取得
      std::uintmax_t size = entry.file_size() ;
      {
         std::ofstream foo( entry.path() );
         foo << "hello" ;
      }
      // 物理ファイルシステムから情報を更新
      entry.refresh() ;
      // もう一度ファイルサイズを取得
      size = entry.file_size() ;
      // 情報を取得するファイルパスを
      // "/home/cpp/bar"
```

directory\_iterator i1(p) ;

```
entry.replace_filename("bar") ;
}
```

directory\_entry はキャッシュ用のクラスで、自動的に物理ファイルシステムで 更に追随しないので、最新の情報を取得するには、明示的にメンバー関数 refres 呼び出す必要がある。

# 10.8 directory\_iterator

イテレーターになる。

かは未規定だ。

リーは入力イテレーターとなる。

directory\_iterator は、あるディレクトリー下に存在するファイルパスをイテターの形式で列挙するためのクラスだ。

たとえば、カレントディレクトリー下のファイルパスをすべて列挙するコードに 下のようになる。

directory\_iterator はコンストラクターとして path を渡すと、そのディレジリー下の最初のファイルに相当する directory\_entry を返すイテレーターとなコンストラクターで指定されたディレクトリー下にファイルが存在しない場合、

directory\_iterator のデフォルトコンストラクターは終端イテレーターにな 終端イテレーターはデリファレンスできない。

directory\_iterator::value\_type は directory\_entry で、イテレーターのカ

directory\_iterator はカレントディレクトリー (.) と親ディレクトリー (..)

列挙しない。
directory\_iterator がディレクトリー下のファイルをどのような順番で列挙

directory\_iterator によって返されるファイルパスは存在しない可能性があって、ファイルが存在することを当てにしてはいけない。たとえば、存在しないフ

ルへのシンボリックリンクかもしれない。

された変更は、反映されるかどうか未規定である。

directory\_iterator のコンストラクターは列挙時の動作を指定 directory\_options を実引数に受け取ることができる。しかし、C++1 準規格の範囲では directory\_iterator の挙動を変更する directory\_options されていない。

### 10.8.1 エラー処理

}

directory\_iterator は構築時にエラーが発生することがある。このエラーではなく error\_code で受け取りたい場合、コンストラクターの実引数で errへのリファレンスを渡す。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

    std::error_code err;

    directory_iterator iter("this-directory-does-not-exist", err
    if ( err )
    {
        // エラー処理
    }
}
```

directory\_iterator はインクリメント時にエラーが発生することがある。 ラーを例外ではなく error\_code で受け取りたい場合、メンバー関数 increme び出す。

```
int main()
{
    using namespace std::experimental::filesystem ;
    recursive_directory_iterator iter("."), end ;
    std::error_code err ;
    for ( ; iter != end && !err ; iter.increment( err ) )
    {
```

```
}
   if (err)
       // エラー処理
   }
}
```

#### 10.9 recursive\_directory\_iterator

recursive\_directory\_iterator は指定されたディレクトリー下に存在す サブディレクトリーの下も含めて、すべてのファイルを列挙する。使いプ directory\_iterator とほぼ同じだ。

```
int main()
    using namespace std::filesystem;
    recursive_directory_iterator iter("."), end ;
    std::copy( iter, end,
                std::ostream_iterator<path>(std::cout, "\n") );
}
```

メンバー関数 options, depth, recursion\_pending, pop, disable\_recursion\_per をデリファレンスできないイテレーターに対して呼び出した際の挙動は未定義だ。

#### 10.9.1 オプション

recursive\_directory\_iterator はコンストラクターの実引数に directory\_opt 型の scoped enum 値を取ることによって、挙動を変更できる。directory\_option の enum 値はビットマスクになっていて、以下の3つのビットマスク値が規定され いる。

名前	意味
none	デフォルト。ディレクトリーシンボリックリンクをスキ
	プ。パーミッション違反はエラー
follow_directory_symlink	ディレクトリーシンボリックリンクの中も列挙
skip_permission_denied	パーミッション違反のディレクトリーはスキップ

バー関数 options を呼ぶ。

public :

} ;

class recursive\_directory\_iterator {

directory\_options options() const ;

```
このうち取りうる組み合わせは、none, follow_directory_symlink,
permission_denied, follow_directory_symlink | skip_permission_denied
類になる。
   int main()
      using namespace std::filesystem;
      recursive_directory_iterator
          iter("/", directory_options::skip_permission_denied), en
      std::copy( iter, end,
                 std::ostream_iterator<path>(std::cout, "\n") );
   }
 follow_directory_symlink は、親ディレクトリーへのシンボリックリング
する場合、イテレーターが終端イテレーターに到達しない可能性があるので活
こと。
   int main()
      using namespace std::filesystem;
      // 自分自身を含むディレクトリーに対するシンボリックリンク
      create_symlink(".", "foo") ;
      recursive_directory_iterator
          iter(".", directory_options::follow_directory_symlink),
      // エラー、もしくは終了しない
      std::copy( iter, end, std::ostream_iterator<path>(std::cout)
   }
 recursive_directory_iterator の現在の directory_options を得るには
```

### 10.9.2 depth: 深さ取得

recursive\_directory\_iterator が現在列挙しているディレクトリーの深さを知られている。

```
class recursive_directory_iterator {
public :
    int depth() const ;
};
```

最初のディレクトリーの深さは0で、次のサブディレクトリーの深さは1、それ降のサブディレクトリーも同様に続く。

# 10.9.3 pop: 現在のディレクトリーの列挙中止

depth() == 0 の場合は、終端イテレーターになる。

メンバー関数 pop を呼ぶと、現在列挙中のディレクトリーの列挙を取りやめ、ディレクトリーに戻る。現在のディレクトリーが初期ディレクトリーの場合、つ

```
class recursive_directory_iterator {
public :
    void pop();
    void pop(error_code& ec);
};
```

たとえば、カレントディレクトリーが以下のようなディレクトリーツリーで、 レーターが以下に書かれた順番でファイルを列挙する環境の場合、

```
a
b
b/a
b/c
b/d
c
d
```

以下のようなプログラムを実行すると、

```
int main()
{
    std::filesystem ;
```

```
recursive_directory_iterator iter("."), end;
auto const p = canonical("b/a");
for (; iter != end; ++iter)
{
    std::cout << *iter << '\n';
    if ( canonical(iter->path()) == p )
        iter.pop();
}
```

標準出力が指すファイルとその順番は以下のようになる。

a

b

b/a

С

"b/a" に到達した時点で pop() が呼ばれるので、それ以上のディレクトリー列挙が中止され、親ディレクトリーであるカレントディレクトリーに戻る。

# **10.9.4** recursion\_pending: 現在のディレクトリーの再帰をスキップ

disable\_recursion\_pending は現在のディレクトリーの下を再帰的に列挙すをスキップする機能だ。

```
class recursive_directory_iterator {
public :
    bool recursion_pending() const ;
    void disable_recursion_pending() ;
} ;
```

recursion\_pending() は、直前のイテレーターのインクリメント操作disable\_recursion\_pending() が呼ばれていない場合、true を返す。そうで合は false を返す。

言い換えれば、disable\_recursion\_pending() を呼んだ直後で、まだイテしのインクリメント操作をしていない場合、recursion\_pneding() は false を

```
using namespace std;
recursive_directory_iterator iter("."), end;

// true
bool b1 = iter.recursion_pending();
iter.disable_recursion_pending();

// false
bool b2 = iter.recursion_pending();

++iter;
// true
bool b3 = iter.recursion_pending();

iter.disable_recursion_pending();

// false
bool b4 = iter.recursion_pending();
}
```

現在 recursive\_directory\_iterator が指しているファイルパスがディレクトである場合、そのイテレーターをインクリメントすると、そのディレクトリー再帰的に列挙することになる。しかし、recursion\_pending()が false を返す場ディレクトリーの最適的な列挙はスキップされる。インクリメント操作が行わればは recursion\_pending()の結果は true に戻る。

つまり、disable\_recursion\_pending は、現在指しているディレクトリー下を 的に列挙することをスキップする機能を提供する。

たとえば、カレントディレクトリーが以下のようなディレクトリーツリーで、 レーターが以下に書かれた順番でファイルを列挙する環境の場合、

```
a
b
b/a
b/c
b/d
c
d
```

```
int main()
{
    std::filesystem;

    recursive_directory_iterator iter("."), end;

    auto const p = canonical("b/a");

    for (; iter != end; ++iter)
    {
        std::cout << *iter << '\n';

        if (iter->is_directory())
              iter.disable_recursion_pending();
    }
}

標準出力が指すファイルとその順番は以下のようになる。
    a
    b
    c
```

このプログラムはディレクトリーであれば必ず disable\_recursion\_pendi呼ばれるので、サブディレクトリーの再帰的な列挙は行われず、結果的にdirectory\_iterator と同じになる。

disable\_recursion\_pending を呼び出すことによって、選択的にディレクト再帰的な列挙をスキップさせることができる。

# 10.10 ファイルシステム操作関数

## 10.10.1 ファイルパス取得

### current\_path

```
path current_path();
path current_path(error_code& ec);
```

カレント・ワーキング・ディレクトリー (current working directory) への絶え スを返す。

### temp\_directory\_path

```
path temp_directory_path();
path temp_directory_path(error_code& ec);
```

一時ファイルを作成するのに最適な一時ディレクトリー(temporary directoへのファイルパスを返す。

### 10.10.2 ファイルパス操作

#### absolute

```
path absolute(const path& p);
path absolute(const path& p, error_code& ec);
```

pへの絶対パスを返す。pの指すファイルが存在しない場合の挙動は未規定。

#### canonical

```
path canonical(const path& p, const path& base = current_path());
path canonical(const path& p, error_code& ec);
path canonical(const path& p, const path& base, error_code& ec);
```

存在するファイルへのファイルパス p への、シンボリックリンク、カレントデー

### weakly\_canonical

```
path weakly_canonical(const path& p);
path weakly_canonical(const path& p, error_code& ec);
```

クトリー(.)、親ディレクトリー(..)の存在しない絶対パスを返す。

ファイルパス p のシンボリックリンクが解決され、正規化されたパスを返すイルパスの正規化についての定義は長くなるので省略。

#### relative

```
path relative(const path& p, error_code& ec);
path relative(const path& p, const path& base = current_path());
path relative(const path& p, const path& base, error_code& ec);
```

ファイルパス base からファイルパス p に対する相対パスを返す。

### proximate

```
path proximate(const path& p, error_code& ec);
path proximate(const path& p, const path& base = current_path())
path proximate(const path& p, const path& base, error_code& ec);
```

ファイルパス base からのファイルパス p に対する相対パスが空パスでなり対パスを返す。相対パスが空パスならば p が返る。

### 10.10.3 作成

### create\_directory

```
bool create_directory(const path& p);
bool create_directory(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

pの指すディレクトリーを1つ作成する。新しいディレクトリーが作成できな true を、作成できなかった場合は false を返す。pが既存のディレクトリーでで成できなかった場合はエラーにはならない false が返る。

```
bool create_directory(
    const path& p, const path& existing_p);
bool create_directory(
    const path& p, const path& existing_p,
    error_code& ec) noexcept;
```

新しく作成するディレクトリー p のアトリビュートを既存のディレク existing\_p と同じものにする。

```
bool create_directories(const path& p);
bool create_directories(const path& p, error_code& ec) noexcept;

ファイルパス p の中のディレクトリーで存在しないものをすべて作成する。
以下のプログラムは、カレントディレクトリーの下のディレクトリー a の下の・レクトリー b の下にディレクトリー c を作成する。もし、途中のディレクトリー
```

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem ;
    create_directories("./a/b/c") ;
}
```

る a, b が存在しない場合、それも作成する。

戻り値は、ディレクトリーを作成した場合 true, そうでない場合 false。

### create\_directory\_symlink

```
void create_directory_symlink(
    const path& to, const path& new_symlink);
void create_directory_symlink(
    const path& to, const path& new_symlink,
    error_code& ec) noexcept;
```

ディレクトリー to に解決されるシンボリックリンク new\_symlink を作成する。 一部の OS では、ディレクトリーへのシンボリックリンクとファイルへのシン リックリンクを作成時に明示的に区別する必要がある。ポータブルなコードは

レクトリーへのシンボリックリンクを作成するときには create\_symlink では

create\_directory\_symlink を使うべきである。

一部の OS はシンボリックリンクをサポートしていない。ポータブルなコード<sup>\*</sup> 注意すべきである。

# create\_symlink

```
void create_symlink(
    const path& to, const path& new_symlink);
void create_symlink(
    const path& to, const path& new_symlink,
    error_code& ec) noexcept;
```

ファイルパス to に解決されるシンボリックリンク new symlink を作成する。

# create\_hard\_link

```
void create_hard_link(
    const path& to, const path& new_hard_link);
void create_hard_link(
    const path& to, const path& new_hard_link,
    error_code& ec) noexcept;
```

ファイルパス to に解決されるハードリンク new\_hard\_link を作成する。

#### 10.10.4 コピー

### copy\_file

ファイルパス from のファイルをファイルパス to にコピーする。

copy\_options はコピーの挙動を変えるビットマスクの enum 型で、以下のがサポートされている。

名前	意味
none	デフォルト、ファイルがすでに存在する場合はエラ
skip_existing	既存のファイルを上書きしない。スキップはエラー
	報告しない
overwrite_existing	既存のファイルを上書きする
update_existing	既存のファイルが上書きしようとするファイルより
	ば上書きする

### copy

ファイルパス from のファイルをファイルパス to にコピーする。

 $copy\_options$  はコピーの挙動を変えるビットマスク型の enum 型で、以下の enum 値がサポートされている。

• サブディレクトリーに関する指定

名前	意味
none	デフォルト、サブディレクトリーはコピーしない
recursive	サブディレクトリーとその中身もコピーする

• シンボリックリンクに関する指定

名前	意味
none	デフォルト、シンボリックリンクをフォローする
copy_symlinks	シンボリックリンクをシンボリックリンクとしてコピーする
	シンボリックリンクが指すファイルを直接コピーしない
skip_symlinks	シンボリックリンクを無視する

# • コピー方法に関する指定

名前	意味
none	デフォルト、ディレクトリー下の中身をコピーする
directories_only	ディレクトリー構造のみをコピーする。非ディレクトリーフ
	イルはコピーしない
create_symlinks	ファイルをコピーするのではなく、シンボリックリンクを
	成する。コピー先がカレントディレクトリーではない場合、
	ピー元のファイルパスは絶対パスでなければならない
create_hard_links	ファイルをコピーするのではなく、ハードリンクを作成する

existing\_symlink を new\_symlink にコピーする。

#### 10.10.5 削除

#### remove

```
bool remove(const path& p);
bool remove(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

ファイルパスpの指すファイルが存在するのであれば削除する。ファイルがリックリンクの場合、シンボリックリンクファイルが削除される。フォローダされない。

戻り値として、ファイルが存在しない場合 false を返す。それ以外の場合 返す。error\_code でエラー通知を受け取る関数オーバーロードでは、エラ-false が返る。

#### remove\_all

```
uintmax_t remove_all(const path& p);
uintmax_t remove_all(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

ファイルパスpの下の存在するファイルをすべて削除した後、pの指すファールをする。

つまり、pがディレクトリーファイルを指していて、そのディレクトリーディレクトリーやファイルが存在する場合、それらがすべて削除され、ディリーpも削除される。

p がディレクトリーではないファイルを指す場合、p が削除される。

戻り値として、削除したファイルの個数が返る。error\_code でエラー通知取る関数オーバーロードの場合、エラーならば static\_cast<uintmax\_t>(-1)

### 10.10.6 変更

### permissions

ファイルパスpのパーミッションを変更する。

opts は perm\_options 型の enum 値、replace, add, remove のうちいずれか 1 つ別途 nofollow を指定することができる。省略した場合は replace になる。

カレントディレクトリーに存在するファイル foo を、すべてのユーザーに対して 行権限を付加するには、以下のように書く。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem ;
    permissions( "./foo", perms(0111), perm_options::add ) ;
}
```

perm\_options は以下のような enum 値を持つ。

名前	意味
replace	ファイルのパーミッションを prms で置き換える
add	ファイルのパーミッションに prms で指定されたものを追加する
remove	ファイルのパーミッションから prms で指定されたものを取り除く
nofollow	ファイルがシンボリックリンクの場合、シンボリックリンクのフォロ
	先のファイルではなく、シンボリックリンクそのもののパーミッショ
	を変更する

たとえば、パーミッションを置き換えつつ、シンボリックリンクそのものの。 ミッションを書き換えたい場合は、

perm\_options opts = perm\_options::replace | perm\_options::nofollow ;

#### rename

```
void rename(const path& old_p, const path& new_p);
   void rename(const path& old_p, const path& new_p,
             error_code& ec) noexcept;
 ファイル old_p をファイル new_p にリネームする。
 old_pと new_p が同じ存在するファイルを指す場合、何もしない。
   int main()
      using namespace std:filesystem;
      // 何もしない
      rename("foo", "foo");
   }
 それ以外の場合、リネームに伴って以下のような挙動も発生する。
 もし、リネーム前に new_p が既存のファイルを指していた場合、リネームに
new_p は削除される。
   int main()
      using namespace std::experimental::filesystem ;
      {
          std::ofstream old_p("old_p"), new_p("new_p") ;
         old_p << "old_p" ;
         new_p << "new_p" ;</pre>
      }
      // ファイル old_p の内容は"old_p"
      // ファイル new_p の内容は"new_p"
      // ファイル old_p を new_p にリネーム
      // もともとの new_p は削除される
      rename("old_p", "new_p") ;
      std::ifstream new_p("new_p") ;
```

new\_p >> text ;

// "old\_p"

```
std::cout << text;
}

もし、new_p が既存の空ディレクトリーを指していた場合、POSIX 準拠 OSでは、リネームに伴って new_p は削除される。他の OSではエラーになるかもない。

int main()
{

using namespace std::experimental::filesystem;

create_directory("old_p");

create_directory("new_p");

// POSIX 準拠環境であればエラーにならないことが保証される
rename("old_p", "new_p");
}
```

old p がシンボリックリンクの場合、フォロー先ではなくシンボリックリンク

### resize\_file

イルがリネームされる。

ファイルパス path の指すファイルのファイルサイズを new\_size にする。 リサイズは POSIX の truncate() で行われたかのように振る舞う。つまり、

イルを小さくリサイズした場合、余計なデータは捨てられる。ファイルを大きく イズした場合、増えたデータは null バイト(\0)でパディングされる。ファイ

最終アクセス日時も更新される。

### 10.10.7 情報取得

# ファイルタイプの判定

ファイルタイプを表現する file\_type 型の enum があり、その enum 値は以下の

名前	意味
none	ファイルタイプが決定できないかエラー
not_found	ファイルが発見できなかったことを示す疑似ファイルタイ
regular	通常のファイル
directory	ディレクトリーファイル
symlink	シンボリックリンクファイル
block	ブロックスペシャルファイル
fifo	FIFO もしくはパイプファイル
socket	ソケットファイル
unknown	ファイルは存在するがファイルタイプは決定できない

この他に、実装依存のファイルタイプが追加されている可能性がある。

ファイルタイプを調べるには、file\_status のメンバー関数 type の戻り ればよい。

以下のプログラムは、カレントディレクトリーに存在するファイル foo がうトリーかどうかを調べるコードだ。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

auto s = status("./foo");
    bool b = s.type() == file_type::directory;
}
```

また、status もしくは path からファイルタイプがディレクトリーであるたを判定できる is\_directory も用意されている。

```
int main()
{
    using namespace std::filesystem;

bool b1 = is_directory("./foo");

auto s = status("./foo");
bool b2 = is_directory(s);
}
```

file\_status はファイル情報をキャッシュするので、物理ファイルシスラ

file\_status を使ったほうがよい。

このような is\_x という形式のフリー関数は、いずれも以下の形式を取る。

bool is\_x(file\_status s) noexcept;

bool is\_x(const path& p);

bool is\_x(const path& p, error\_code& ec) noexcept;

以下はフリー関数の名前と、どのファイルタイプであるかを判定する表だ。

名前	意味
is_regular_file	通常のファイル
is_directory	ディレクトリーファイル
is_symlink	シンボリックリンクファイル
is_block	ブロックスペシャルファイル
is_fifo	FIFO もしくはパイプファイル
is_socket	ソケットファイル

また、単一のファイルタイプを調べるのではない以下のような名前のフリー関係存在する。

名前	意味
is_other	ファイルが存在し、通常のファイルでもディレクトリーでもシン
	リックリンクでもないタイプ
is_empty	ファイルがディレクトリーの場合、ディレクトリー下が空であれ
	true を返す。ファイルが非ディレクトリーの場合、ファイルサ
	ズが $0$ であれば $ ext{true}$ を返す。

#### status

```
file_status status(const path& p);
file_status status(const path& p, error_code& ec) noexcept;

ファイルパス p のファイルの情報を格納する file_status を返す。
p がシンボリックリンクの場合、フォロー先のファイルの file_status を込
```

### status\_known

```
bool status_known(file_status s) noexcept;
s.type() != file_type::none を返す。
```

### symlink\_status

```
file_status symlink_status(const path& p);
file_status symlink_status(const path& p, error_code& ec) noexce
status と同じだが、p がシンボリックリンクの場合、そのシンボリックリン
```

#### equivalent

イルの status を返す。

p1 と p2 が物理ファイルシステム上、同一のファイルである場合、true をiうでない場合 false を返す。

### exists

```
bool exists(file_status s) noexcept;
bool exists(const path& p);
bool exists(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

s, p が指すファイルが存在するのであれば true を返す。そうでない場合 t 返す。

#### file\_size

uintmax\_t file\_size(const path& p);

```
p の指すファイルのファイルサイズを返す。
```

は static cast<uintmax t>(-1) となる。

ファイルが存在しない場合エラーとなる。ファイルが通常のファイルの場合、

イルサイズを返す。それ以外の場合、挙動は実装依存となる。 エラー通知を error\_code で受け取る関数オーバーロードでエラーのとき、戻

### hard\_link\_count

```
uintmax_t hard_link_count(const path& p);
uintmax_t hard_link_count(const path& p, error_code& ec) noexcept;
```

```
p の指すファイルのハードリンク数を返す。
```

エラー通知を error\_code で受け取る関数オーバーロードでエラーのとき、戻は static\_cast<uintmax\_t>(-1) となる。

### last\_write\_time

p の指すファイルの最終更新日時を返す。

刻の分解能や品質の問題があるからだ。

pの指すファイルの最終更新日時を new time にする。

last\_write\_time(p, new\_time) を呼び出した後に、last\_write\_time(p) new\_timeである保証はない。なぜならば、物理ファイルシステムの実装に起因する。

file\_time\_type は、std::chrono\_time\_point の特殊化で以下のように定義される。

```
namespace std::filesystem {
    using file_time_time = std::chrono::time_point< trivial-clock >
}
```

trivial-clock とは、クロック(より正確には TrivialClock)の要件を満たてロックで、ファイルシステムのタイムスタンプの値を正確に表現できるものとされ

イルシステムで時間を扱うのは極めて困難になる。せいぜい現在時刻を設定か、差分の時間を設定するぐらいしかできない。

```
int main()
   {
      using namespace std::experimental::filesystem ;
      using namespace std::chrono ;
      using namespace std::literals ;
      // 最終更新日時を取得
      auto timestamp = last_write_time( "foo" ) ;
      // 時刻を1時間進める
      timestamp += 1h;
      // 更新
      last_write_time( "foo", timestamp );
      // 現在時刻を取得
      auto now = file_time_type::clock::now() ;
      last_write_time( "foo", now ) ;
   }
 ただし、多くの実装では file_time_type として、time_point<std::c
system_clock> が使われている。file_time_type::clock が system_clock
ば、system_clock::to_time_t と system_clock::from_time_t によって time
の相互変換ができるために、いくぶんマシになる。
   // file_time_type::clock が system_clock である場合
   int main()
   {
      using namespace std::experimental::filesystem ;
      using namespace std::chrono ;
```

auto time\_point\_value = last\_write\_time( "foo" ) ;

system\_clock::to\_time\_t( time\_point\_value ) ;

// 最終更新日時を文字列で得る

time\_t time\_t\_value =

```
// 最終更新日時を 2017-10-12 19:02:58 に設定
      tm struct_tm{};
      struct_tm.tm_year = 2017 - 1900;
      struct_tm.tm_mon = 10 ;
      struct_tm.tm_mday = 12;
      struct_tm.tm_hour = 19;
      struct_tm.tm_min = 2 ;
      struct_tm.tm_sec = 58;
      time_t timestamp = std::mktime( &struct_tm ) ;
      auto tp = system_clock::from_time_t( timestamp ) ;
      last_write_time( "foo", tp );
  }
 あまりマシになっていないように見えるのは、C++ では現在 <chrono> から
できる C++ 風のモダンなカレンダーライブラリがないからだ。この問題は将来の
格改定で改善されるだろう。
read_symlink
  path read_symlink(const path& p);
  path read_symlink(const path& p, error_code& ec);
 シンボリックリンクpの解決される先のファイルパスを返す。
 p がシンボリックリンクではない場合はエラーになる。
space
  space_info space(const path& p);
  space_info space(const path& p, error_code& ec) noexcept;
 ファイルパスpが指す先の容量を取得する。
 クラス space_info は以下のように定義されている。
   struct space_info {
      uintmax_t capacity;
      uintmax_t free;
      uintmax_t available;
```

この関数は、POSIX の statvfs 関数を呼び出した結果の struct staf\_blocks, f\_bfree, f\_bavail メンバーを、それぞれ f\_frsize で乗じて、spaのメンバー capacity, free, available として返す。値の決定できないメンバ static\_cast<uintmax\_t>(-1) が代入される。

エラー通知を error\_code で返す関数オーバーロードがエラーの場合、spaのメンバーにはすべて static\_cast<uintmax\_t>(-1) が代入される。

space\_infoのメンバーの意味をわかりやすく説明すると、以下の表のよう

名前	意味
capacity	総容量
free	空き容量
available	権限のないユーザーが使える空き容量

索引

# 索引

```
*this, 34
:: value, 22
<algorithm>, 153, 156, 183, 220
<any>, 104
<atomic>, 221
<chrono>, 262
<math>, 165, 221
<cstddef>, 81
<execution>, 156, 161
filesystem>, 225
<functional>, 179, 195, 196
<iterator>, 220
<memory>, 196
<memory_resource>, 133
< new>, 176
<numeric>, 222
<optional>, 110
<system_error>, 227
<tuple>, 194
<type_traits>, 201
<utility>, 193
<variant>, 85
[[deprecated]] 属性, 6
[[fallthrough]] 属性, 40
[[maybe_unused]] 属性, 43
[[nodiscard]] 属性, 41
__cpp_aggregate_nsdmi, 24
__cpp_binary_literals, 5
__cpp_capture_star_this, 37
__cpp_constexpr, 23, 39
__cpp_decltype_auto, 14
\_\mathtt{cpp\_deduction\_guides},\, 61
__cpp_fold_expressions, 34
__cpp_generic_lambdas, 15
__cpp_hex_float, 28
__cpp_if_constexpr, 56
__cpp_init_captures, 18
__cpp_inline_variables, 79
\_\mathtt{cpp}\mathtt{nested}\mathtt{namespace}\mathtt{definitions},\ 40
cpp noexcept function type, 30
```

```
\_\mathtt{cpp\_sized\_deallocation}, 25
__cpp_static_assert, 39
__cpp_structured_bindings, 75
__cpp_template_auto, 62
__cpp_variable_templates, 23
__cpp_variadic_using, 81
__has_cpp_attribute(deprecated), 8
__has_cpp_attribute(fallthrough), 41
__has_cpp_attribute(maybe_unused), 4
__has_cpp_attribute(nodiscard), 43
__has_cpp_attribute 式, 4
__has_include \sharp, 3
__USE_RVALUE_REFERENCES, 2
v版、23、201
0B, 5
0b, 5
0x. 27
16 進数浮動小数点数リテラル, 27
3 次元 hypot, 221
absolute, 248
addressof, 196
all_of, 153, 155
allocate, 134, 149
any, 85, 104
   any_cast<T>, 109
   emplace, 105, 106
   has_value, 107
   make_any<T>, 108
   reset, 106
   std::in_place_type<T>, 105
   swap, 107
   type, 108
   構築, 105
   代入, 106
   破棄、105
any_cast<T>, 109
as const, 193
auto, 8, 61
    厳格な~,9
```

```
BinaryOperation, 157
                                               disjunction, 203
BinaryOperation1, 157
                                               do_allocate, 135, 143, 149
BinaryOperation2, 157
                                               do_deallocate, 135, 149
BinaryPredicate, 157
                                               do_is_equal, 135
bool, 115
bool_constant, 201
                                               emplace, 90, 92, 105, 106, 208
Boyer-Moore-Horspool 検索アルゴリズム, 182
                                                  戻り値、206
Boyer-Moore 文字列検索アルゴリズム, 180
                                               emplace_back, 206
                                               emplace_front, 206
                                               empty, 220
C++03, v
C++11, v
                                               equivalent, 259
C++14, v, 5
                                               error_code, 228, 241
   コア言語,5
                                               ExecutionPolicy, 156
C++17, vi, 1, 27
                                               exists, 259
                                               extract, 213
   コア言語, 27
C++20, vi
C++98, v
                                               false_type, 204
c_str, 232
                                               file_size, 259
canonical, 248
                                               file_status, 236, 257, 258
char, 121, 230
                                               file_time_type, 260
CHAR_BIT, 81
                                               file_type, 236, 256
                                               filesystem_error, 227
char16_t, 121, 230
char32_t, 121, 230
                                               fold 式, 30
                                                   単項~, 31, 32
clamp, 220
                                                   二項~, 31, 33
clear, 228
                                                  左~, 31, 33
Compare, 157
                                                  右~, 31, 33
conjunction, 202
                                               follow_directory_symlink, 243
constexpr, 23, 37
                                               for-range 宣言, 67
constexpr if 文, 46
   解決できない問題,55
                                               free, 136
   解決できる問題、55
copy, 251
                                               gcd, 222
copy_file, 251
                                               generic_string, 234
copy_options, 251, 252
                                               get<I>(v), 97
copy_symlink, 252
                                               get<T>(v), 99
                                               get_default_resource, 138, 140
create_directories, 249
create_directory, 249
                                               get_if<I>(vp), 100
create_directory_symlink, 250
                                               get_if<T>(vp), 100
create_hard_link, 251
create_symlink, 250
                                               hard_link_count, 260
{\tt current\_path},\, {\tt 248}
                                               has_unique_object_representation
\mathbb{C} プリプロセッサー, vi, 1
                                               has_value, 107, 114
                                               holds_alternative<T>(v), 96
data, 220
                                               hypot, 221
deallocate, 134, 149
decltype(auto), 9
delete, 25
                                               if constexpr, 46
depth, 244
                                               in_place_type, 120
destory, 199
                                               increment, 241
directory_entry, 236, 238
                                               index, 94
{\tt directory\_iterator},\ 238,\ 240
                                               inline 関数, 75
                                               inline +-\nabla-\wedge, 75
   error_code, 241
   increment, 241
                                               inline 展開, 75
directory options, 241, 242
                                               inline 変数, 75, 78
```

索引

```
insert_return_type, 216
                                              native, 232
integral_constant, 201
                                              negation, 203
IntType, 83
                                              new, 141
INVOKE, 195
                                              new_delete_resource, 139
invoke, 195
                                              node_type, 211
is_always_lock_free, 221
                                              noexcept, 29
is_directory, 257
                                              not_fn, 196
is_equal, 134
                                              not1, 196
is_invocable, 204
                                              not2, 196
is_invocable_r, 204
                                              null_memory_resource, 139
is_lock_free, 221
                                              null 終端, 121, 126
is_nothrow_invocable, 204
is_nothrow_invocable_r, 204
                                              ODR (One Definition Rule), 76
is_nothrow_swappable<T>, 206
                                              operator (), 14, 37
is_nothrow_swappable_with<T, U>, 206
                                              operator delete, 25
is_x, 258
                                              optional, 85, 110
ISO/IEC 14882, v
                                                  bool, 115
                                                  has_value, 114
key, 212
                                                  in_place_type, 120
                                                  make_optional<T, Args ...>, 120
                                                  make_optional<T>, 119
largest_required_pool_block, 146
                                                  reset, 117
last_write_time, 260
                                                  std::bad_optional_access, 116
1cm, 223
                                                  std::in_place_type<T>, 113
lock, 160
                                                  std::nullopt, 112, 119
lock_guard, 221
                                                  swap, 114
                                                  value, 115
make_any<T>, 108
                                                  value_or, 116
make_from_tuple, 194
                                                  構築, 112
make_optional<T, Args ...>, 120
                                                  代入, 113
make_optional<T>, 119
                                                  テンプレート実引数, 112
malloc, 136, 141
                                                  破棄, 113
map, 207, 209
                                                  比較, 117
   key, 212
                                              options, 147, 243
   mapped, 212
mapped, 212
                                              parallel_policy, 159, 160
max_blocks_per_chunk, 146
                                              parallel_unsequenced_policy, 160
memory resource, 133
                                              path, 229, 235
   allocate, 134
                                              path::string_type, 233
   deallocate, 134
                                              path::value_type, 230
   do_allocate, 135, 143
                                              perm_options, 254
   do_deallocate, 135
                                              permissions, 236, 254
   do_is_equal, 135
                                              perms, 236
   free, 136
                                              polymorphic_allocator, 137
   get_default_resource, 140
                                                  コンストラクター、138
   is_equal, 134
                                              pool_options, 145, 146
   malloc, 136
                                              pop, 244
   new_delete_resource, 139
                                              Predicate, 157
   null_memory_resource, 139
                                              preferred_separator, 230
   set_default_resource, 140
                                              proximate, 249
merge, 210
monotonic_buffer_resource, 137, 147
                                              queue, 206
multi_map, 207
multimap, 209
multiset, 209
                                              read symlink, 262
```

depth, 244

directory\_options, 242

```
disable_recursion_pending, 245
                                             std::hardware_constructive_inter
   follow_directory_symlink, 243
                                                     size, 176
   options, 243
                                              std::hardware_destructive_interf
   pop, 244
                                                     size, 176
   recursion_pending, 245
                                             std::in_place_type<T>, 90, 105, 11
refresh, 240
                                             std::integral_constant, 22
relative, 249
                                             std::is_execution_policy<T>, 161
release, 147, 151
                                             std::monostate, 89
                                             std::nullopt, 112, 119
remove, 253
remove_all, 253
                                             std::pmr::memory_resource, 133
                                             std::pmr::polymorphic_allocator,
remove_prefix, 129
                                             std::sample, 183
remove_suffix, 129
rename, 255
                                             std::scoped_lock, 221
reset, 106, 117
                                             std::size_t, 25
resize_file, 256
                                             std::string, 123
rvalue リファレンス, 1
                                                 ユーザー定義リテラル、130
                                             std::string_view, 123
                                                 ユーザー定義リテラル, 130
scoped enum, 81
                                             std::terminate, 161
searcher, 179
                                             std::true_type, 201
sequenced_policy, 159
                                             std::tuple_size<E>, 71
set, 209
                                             std::uncaught_exception, 176
   value, 212
                                             std::uncaught_exceptions, 176, 17
set_default_resource, 140
                                             std::variant_alternative<I, T>,
SFINAE, 38
                                             std::variant_size<T>, 95
shared_ptr::weak_type, 200
                                             std::visit, 103
shared_ptr<T[]>, 192
                                             string, 233
size, 220
                                             string_type, 230, 233
space, 262
                                              string_view, 121
space_info, 262, 263
                                                 remove_prefix, 129
splice, 209
                                                 remove_suffix, 129
stack, 206
                                                 構築, 125
static_assert
                                                 操作, 128
   文字列なし, 39
                                                 変換関数, 127
status, 236, 259
                                              swap, 94, 107, 114
status_known, 259
                                              symlink_status, 259
statvfs, 263
                                              synchronized_pool_resource, 142,
std::any, 104
std::apply, 178
std::bad_alloc, 160
                                              temp_directory_path, 248
                                              The Arf of Computer Programming
std::bad_optional_access, 116
                                              traits, 22
std::basic_string, 123
                                                 変数テンプレート版, 201
std::basic_string_view, 123
                                                 論理演算, 202
std::boyer_moore_horspool_searcher, 182
                                              trivial-clock, 261
std::boyer_moore_searcher, 180
                                              true_type, 204
std::byte, 81, 222
                                              try_emplace, 207
std::chrono_time_point, 260
                                              tuple, 178, 194
std::default_searcher, 179
                                              type, 108, 236
std::error_code, 227, 228
                                              typedef 名, 19
std::execution::par, 156
std::execution::par_unseq, 156
std::execution::seq, 156
                                             u16string, 233
std::false type, 201
                                             u16string view, 123
```

std::filesystem::path, 229

std::for\_each, 158

#### 索引

u8path, 231	アライメント, 141
UnaryOperation, 157	アルゴリズム R(作
uninitialized_copy, 198	アルゴリズムS(逞
uninitialized_default_construct, 197	アロケーター, <b>133</b>
uninitialized_fill, 199	エイリアス宣言, 19
uninitialized_move, 199	エルミート多項式、
uninitialized_value_construct, 198	演算子の評価順序,
union, 85, 86	·
型安全, 85	型
型非安全, 86	IntType, 83
unordered_map, 207, 209	scoped enum,
unordered_multi_map, 207	std::byte, 8
unordered_multimap, 209	バイト, 81
unordered_multiset, 209	型安全な
unordered_set, 209	union, 85
unsigned char, 81	型が違う定数, 21
unsynchronized_pool_resource, 142, 145	型指定子,9
upstream_resource, 147, 152	型非安全, 86
using 属性名前空間, 62	可変長 using 宣言
UTF-16 エンコード, 230	可変長テンプレート
UTF-32 エンコード, 230	関数型 (例外指定)
UTF-8 エンコード, 230	関数宣言, 19
UTF-8 文字リテラル, 28	関数テンプレート、
	関数の戻り値の型推
value, 115, 212	完全型, 206
value_or, 116	機能テスト, 1
value_type, 230	機能テストマクロ、
valueless_by_exception, 93	キャッシュメモリー
variant, 85	キャッシュライン,
$\mathtt{emplace}, 90, 92$	球ノイマン関数, 17
get <i>(v), 97</i>	球面ルジャンドル降
get <t>(v), 99</t>	クラス宣言, 18
get_if <i>(vp), 100</i>	クロージャーオブシ
get_if <t>(vp), 100</t>	クロージャー型, 14
holds_alternative <t>(v), 96</t>	厳格な auto, 9
index, 94	コア言語, vi
std::variant_alternative <i, t="">, 96</i,>	構造化束縛, 63
std::variant_size <t>, 95</t>	完全形の名前,
std::visit, 103	クラス, <b>73</b>
swap, 94	仕様, 69
valueless_by_exception, 93	配列, 69
コピー初期化, 89	非 static デー
初期化,88	ビットフィール
宣言, 88	構造化束縛宣言, 67
大小比較, 102	古典的な union, 80
代入, 92	コピーキャプチャー
デフォルト初期化, 88	コンテナーアクセス
同一性の比較, 101	data, 220
破棄, 91	empty, 220
void_t, 201	size, 220
uchan + 191 990	コンパイル時条件分
wchar_t, 121, 230 weak_type, 200	コンパイル時定数,
·	
weakly_canonical, 248 wstring, 233	最小公倍数, 223
WD 01 1112, 400	-1X'3' -4  H XX, 440

```
ズム R (保管標本), 187
リズム S (選択標本), 186
-9-,133
アス宣言, 19
ート多項式, 168
の評価順序, 45
Type, 83
ped enum, 81
l::byte, <mark>81</mark>
/ ト, <mark>81</mark>
ion, 85
う定数, 21
子,<mark>9</mark>
È, 86
using 宣言,79
テンプレート, 30
(例外指定),29
‡, 19
/プレート, 21
灵り値の型推定, 8
206
スト, 1
ストマクロ,2
ンュメモリー, 175
ンュライン, 175
マン関数, 173
ジャンドル陪関数, <mark>167</mark>
ジャーオブジェクト, 14, <mark>37</mark>
ジャー型, 14
auto, 9
吾,vi
 束縛, 63
全形の名前, 71
ラス, 73
羕, <mark>69</mark>
刊, 69
static データメンバー, 74
ットフィールド、74
束縛宣言, 67
Lunion, 86
キャプチャー, 16, 34
ナーアクセス関数, 220
ta, 220
ty, 220
ze, 220
イル時条件分岐, 46, 49
イル時定数, 47
```

第2種変形ベッセル関数, 172

```
ジェネリックラムダ, 14
                                  畳み込み、30
シーケンス実行ポリシー, 161
                                  多值, 63
指数積分, 174
                                  单項 fold 式, 31, 32
実行ポリシーオブジェクト, 162
                                  単純宣言、67
                                  定義は1つの原則,76
実行時ポリシー, 156
  std::execution::par, 156
                                  定数
                                    型が違う~,21
  std::execution::par_unseq, 156
  std::execution::seq, 156
                                    コンパイル時~.47
条件文
                                  ディレクトリー
  初期化文付き~,56
                                    create_directories, 249
条件分岐
                                    create_directory, 249
  コンパイル時~, 46, 49
                                    create_directory_symlink, 250
                                  ディレクトリー区切り文字, 230
  実行時の~、46
  プリプロセス時の~. 48
                                  データ競合、159
初期化文付き条件文,56
                                  デッドロック, 159
                                  テンプレート実引数の推定,59
初期化ラムダキャプチャー、15
シンボリックリンク, 250
                                  テンプレート宣言、18、19
                                  動的ストレージ, 133
推定ガイド,59
                                  動的ポリモーフィズム, 137
数学の特殊関数、165
                                  トライグラフ,27
  エルミート多項式, 168
  球ノイマン関数, 173
  球面ルジャンドル陪関数、167
                                  名前空間
  指数積分, 174
                                    ネストされた~, 39
  第1種完全楕円積分,169
                                  二項 fold 式, 31, 33
  第1種球ベッセル関数, 173
                                  二進数リテラル, 5
  第1種不完全楕円積分,170
                                  ネイティブナローエンコード, 230
  第1種ベッセル関数,171
                                  ネイティブワイドエンコード, 230
  第1種変形ベッセル関数, 172
                                  ネストされた名前空間,39
  第2種完全楕円積分,169
                                  ノイマン関数, 171
  第2種不完全楕円積分,170
                                  ノードハンドル, 211
  第2種変形ベッセル関数, 172
                                    extract, 213
  第3種完全楕円積分,169
                                    insert. 215
  第3種不完全楕円積分,171
                                    insert_return_type, 216
  ノイマン関数, 171
                                    key, 212
  ベータ関数、168
                                    mapped, 212
  ラゲール多項式, 166
                                    node_type, 211
  ラゲール陪多項式, 166
                                    value, 212
  リーマンゼータ関数, 174
                                    取得, 213
  ルジャンドル多項式, 166
                                    要素の追加, 215
  ルジャンドル陪関数. 167
数値区切り文字、5
                                  バイト、81
スレッド, 154
                                    ビット数,81
選択標本, 186
                                  ハードウェア干渉サイズ, 175
属性トークン, 4,62
                                  ハードリンク, 251
属性名前空間,62
                                  パーミッション, 236, 254
                                  パラメーターパック,30
第1種完全楕円積分,169
                                  パラレル実行ポリシー, 162
第1種球ベッセル関数, 173
                                  パラレル非シーケンス実行ポリシー, 165
第1種不完全楕円積分,170
                                  非 static データメンバー, 23
第1種ベッセル関数, 171
                                  非型テンプレートパラメーター,61
第1種変形ベッセル関数, 172
                                  非順序連想コンテナー、209
第2種完全楕円積分,169
                                    merge, 210
第2種不完全楕円積分,170
                                  左 fold, 31, 33
```

非標準属性,63

### 索引

ファイルのタイプ, $236$	要素アクセス関数, 157
ファイルパス	例外, 160
absolute, 248	ベータ関数, 168
canonical, 248	ヘッダーファイルの存在, 3
current_path, 248	変数宣言, 20
proximate, 249	変数テンプレート, 18, 22
relative, 249	保管標本, 187
temp_directory_path, 248	PN 11 120 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
weakly_canonical, 248	マジックナンバー, <b>21</b>
取得, 248	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
操作, 234, 248	右 fold, 31, 33
ファイルパス文字列, 229	ムーブキャプチャー, 18
不完全型, 206	メモリーアロケーター, 140
浮動小数点数サフィックス, 28	メモリー管理アルゴリズム, 196
浮動小数点数リテラル, 27	メモリーリソース, 133, 140
プールリソース, $142$	取得, 139
	プールリソース, 142
largest_required_pool_block, 146	モノトニックバッファーリソース, 147
max_blocks_per_chunk, 146	メンバー初期化子, <mark>23</mark>
options, 147	文字型, 121
pool_options, 145, 146	文字型の配列, 121
release, 147	文字列エンコード, 230
synchronized_pool_resource, 142, 145	文字列なし static_assert, 39
unsynchronized_pool_resource, 142,	文字列ビュー, 121
145	文字列ラッパー, 121
upstream_resource, 147	モノトニックバッファーリソース, 147
コンストラクター, 146	allocate, 149
プレイスホルダー型,9	deallocate, 149
プログラミング言語 C++, v	do_allocate, 149
並列アルゴリズム, 153, 155, 156	do_deallocate, 149
BinaryOperation, 157	monotonic_buffer_resource, 147
BinaryOperation1, 157	release, 151
BinaryOperation2, 157	upstream_resource, 152
BinaryPredicate, 157	コンストラクター, 150
Compare, 157	, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
ExecutionPolicy, $156$	   ユーザー定義リテラル, 130
lock, $160$	要素アクセス関数, 157
$\mathtt{mutex},\ 160$	女衆アクセス国奴、157
$\mathtt{parallel\_policy},159,160$	_ , _ , _ ,
parallel_unsequenced_policy, $160$	ライブラリ, vi
${\tt Predicate}, 157$	ラゲール多項式, 166
${\tt sequenced\_policy},\ 159$	ラゲール陪多項式, 166
std::bad_alloc, 160	ラムダキャプチャー, 15
std::is_execution_policy <t>, 161</t>	ラムダ式, 14, 15, 34, 37
std::terminate, 161	乱択アルゴリズム, 183
UnaryOperation, $157$	リファレンスキャプチャー, 16
シーケンス実行ポリシー, 161	リーマンゼータ関数, 174
実行ポリシーオブジェクト, 162	ルジャンドル多項式, 166
実行時ポリシー, 156	ルジャンドル陪関数, 167
データ競合, 159	例外指定, 29
デッドロック, 159	連想コンテナー, 209
パラレル実行ポリシー, <mark>162</mark>	merge, 210
パラレル非シーケンス宝行ポリシー 169	验押演算 traits 202

●本書に対するお問い合わせは、電子メール (info@asciidwango.jp) にてお願いいたします。 但し、本書の記述内容を越えるご質問にはお答えできませんので、ご了承ください。

# 江添亮の C++17 入門(仮)

2018年x月x日 初版発行

えぞえ りょう 江添 克

発行者 川上量生

著 者

発 行 株式会社ドワンゴ

〒 104-0061

東京都中央区銀座 4-12-15 歌舞伎座タワー

編集 03-3549-6153

電子メール info@asciidwango.jp

http://asciidwango.jp/

発売 株式会社 KADOKAWA

〒 102-8177

東京都千代田区富士見 2-13-3

営業 0570-002-301 (カスタマーサポート・ナビダイヤル)

受付時間 9:00~17:00 (土日 祝日 年末年始を除く)

http://www.kadokawa.co.jp/

印刷・製本 株式会社リーブルテック

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。下記 KADOKAWA 読者係までご連絡ください。 送料小社負担にてお取り替えいたします。

但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。

電話 049-259-1100 (9:00-17:00/土日、祝日、年末年始を除く)

〒354-0041 埼玉県入間郡三芳町藤久保 550-1

定価はカバーに表示してあります。

ISBN: 978-4-04-xxxxxx-x